

主人公に勝てなくても
幸せにはなったオリ主

ツダはISなんぞに劣る筈がない！！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただ書き綴っただけです。

※主人公は番外編を除いて神様転生ではありません。

目次

主人公に勝てなくても幸せにはなったオ リ主	1
過去編でヒロイン作れなくても幸せにな るだろうオリ主	28
主人公に勝てないけど幸せになれたオリ 主	41
時系列がバラバラでも幸せを目指したい オリ主	59
主人公を家族として大好きだから幸せに なれるオリ主	98
主人公に勝ちたいし幸せになりたいオリ 主	131
主人公に勝つ為に幸せを目指すオリ主	154
主人公に負けたくないから多芸になった オリ主	184
要らない設定を書かれても幸せになつて たオリ主	210
主人公に勝てないけど幸せなオリ主	218
初めて前後編に別れたが幸せを目指すオ リ主	239
主人公(兄)への憧れが対抗心になってる 幸せになるオリ主	265
後編になっても主人公に勝ててないオリ 主	

- 主 303 主人公に勝ちたくて積み上げるオリ主
- 主人公に勝てないけど諦めはしないもう
目覚めたオリ主 335
- 主人公に勝てなくても嵐の中で輝いたオ
リ主 363
- 主人公に勝てなくても挑戦するのがオリ
主 390
- 番外編、IS二次創作の主人公に勝てな
いオリ主に憑依してしまった…… 412
- 主人公に勝てなくても幸せへ進むオリ主
445
- 主人公に勝てなくても負けたくないオリ
主 464
- 主人公に勝つ準備をしてる幸せかもしれ
んオリ主 515
- 主人公に勝てなくて暗躍して幸せを目指
すオリ主 532
- 主人公に勝てなくても幸せしたいオリ主
559
- 主人公に勝てないのは(中略)幸せなのが
悪いオリ主 570
- 主人公に勝てないけど幸せになってるオ
リ主 582
- 主人公に勝てなくても修学旅行はするオ
リ主 582

リ主

601

主人公そつちのけでサボったけども幸せ
にはなりたいオリ主

618

主人公に勝てなくても幸せにはなつたオリ主

クラス代表となった俺はISの特訓を始めようと筈とセシリアと共にアリーナに来た時、あいつがやってきた。

「おい兄貴！今日がお前の年貢の納め時だ!!」

俺たちの前にやってきたのは打鉄と同じ色の機体、白式のパチモンみたいなISだった。

「前回の打鉄とは違うんだよ打鉄とはなあ！こいつの名前は打鉄突撃機動型！白式のアイディアを活かして白兵戦特化！対象を捕捉して逃がさない強化モノアイセンサー！両肩部シールドにはアサルトライフル焰火が内蔵されて手にブレードを持ったまま射撃が可能！さらに白式と同時期に完成した機体の荷電粒子砲の技術を応用したブレードの荷電粒子刀が特徴だぜ！」

「前回の打鉄とはって……見たところスラスターと装甲を増やしてブレードが日本刀から雪片つぼいのに変わっただけに見えるけど。」

「う、うるさい！」

こいつの名前は織斑秋十、俺の双子の弟だ。

昔から何かと俺に勝負をしかけてくる奴なんだけど……そりや最初はまあ運動会の100m走とか、学校のテストの点数比べとか、競い合うのは嫌いじゃないし楽しんでたりはしたんだけど……小学校から中学校までの9年間365日ずっと勝負とかやらされるという加減……その……飽き飽きしてくる。中学卒業近くとか受験勉強しなきゃいけない時期とかも勝負しろとか言ってくるし……。

まあ受験勉強の大切さと将来設計の重要さを千冬姉と一緒に説教したら大人しくなったけど。

「とにかく俺と勝負しろ兄貴!!」

「……一回だけな？」

結果から言えば秋十は負けた。

代表を決める時の戦いでは片手にアサルトライフルもう片手にブレードの銃剣二刀流で武器を構えては打鉄の装甲で最低の攻撃だけ耐えてアサルトライフルを乱射しながら突貫、近づいたらブレードで全力の一撃をかまし、当たろうが外れようが通り過ぎるように全速力で離れては突貫を繰り返すという一撃離脱戦法をしていたがセシリアにはB T兵器を犠牲に攻撃パターンを読まれて撃ち落とされ、俺の時は鏢迫り合いの最中に白式の一次移行が発現、そのまま鏢迫り合いしたブレードごと秋十を叩き斬って敗

北した。

今回はその反省を活かしたのか両手でブレードを構えては両肩のシールド内蔵のアサルトライフルを撃ちまくりながら突撃、そして斬り掛かると見せかけて通り過ぎたり斬り掛かっても鏢迫り合いで俺のブレードを塞いだ状態で両肩のアサルトライフルを連射しては俺が秋十から距離を取るように仕向けたら俺から攻撃しようなら全力で逃げ回つてと打鉄の装甲を過信せず相手の攻撃に一切触れようとしない戦い方を披露したがビュンビュンとアリーナの端から端へと飛び回るもんだからすぐ追加したスラストターの推進剤を使い切つてはIS本体のスラストターだけでは重すぎる追加武装と装甲に動きを取られて俺の零落白夜の餌食となった。

「ぐぬぬ……つ、次は負けないからな！やーい！お前の幼馴染の姉ちゃん指名手配犯!!」
「次も負けないからなー！やーい！秋十の姉ちゃんの親友うさ耳コスプレおばさん！」

「それどつちも私の姉さんの事だろ!？」

「篠ノ之さん！俺と勝負だ！」

「だから私は箒でいいと…ん？一夏じゃなくて私と勝負するのか？」

一夏は千冬さんと零落白夜の制御の特訓をしているから今日はセシリアに頼んで模擬戦をしていたのだが…。あいつがやってきた。

「打鉄とは違うのだよ打鉄とは！あと姉さんの邪魔したら怒られるし…。あと零落白夜つて下手したらISGごとパイロット斬っちゃうんでしょ？ならそれを制御する特訓とか邪魔したらダメじゃん。」

つまり私とセシリアの邪魔ならしていいと言いたいのかお前は…。

こいつの名前は織斑秋十、前から騒がしくて負けず嫌いな奴だった。基本的に一夏に剣道や柔道の試合を持ちかけてきたりするが一夏の都合が悪いとだいたい私に勝負をしかけてきた…剣道で十回くらいボロクソに負かしてやったら柔道、追いかけてこ、算数のテストと自分が勝てそうな勝負にコロコロ替えてくる…微妙にセコい男という印象だな、まあ全部勝ったがな、負けた時がうざったそうだから。

「打鉄とは違うと言っていたがその機体は…。」

「良くぞ聞いてくれた！こいつはラファール・リヴァイヴの改修型のスナイパーカスタム！今までの機体とはちよつと違うぜえ!!」

「ちよつとどころか機体の種類そのものが別物になっているではないか。」

「うるせえ！篠ノ之さんの剣道なんざ撃ち落としてやるぜ!!」

結果から言えば秋十は負けた。

スナイパーカスタムはラファールの性能を操縦性、スピード、特定の装備の使用だけに徹底的に向上させた機体で背中の羽は白式程ではないが大型化されカニの爪のように開くと内蔵されたミサイルランチャーが現れ、武装は左脚部に追加した円形の小型ジェネレーターからケーブルの繋がったレーザーライフルと腰裏にマウントされたサ

ブマシンガンとIS用ナイフと従来のラファールよりシンプルになっていた、恐らくその分のメモリを本体の反応速度やハイパーセンサーの精度、狙撃能力やミサイルの誘導性等の能力向上に割り当てられているのだろう。

だがセシリアと何度も訓練している私から言わせてもらえば付け焼き刃の狙撃は防げない事は無い、相手を近づけさせない逃げっぷりには手を焼いたが目くらましのミスイルはセシリアから教わった方法でアサルトライフルを撃てば直撃を避けれる程度には撃ち落とせる。それに近接武装がナイフしかなく白兵戦能力をほとんど捨てたような機体では接近する事さえできれば私の剣から逃れられる筈がない。

何度か逃げられつつも狙撃時にその場から動かなくなる癖を逆手に取り打鉄の装甲を犠牲にして一気に距離を詰めてブレードで攻撃を食らわせてやった、時間をかけたがほぼその繰り返しで私は奴に勝つ事ができた。

「むむむ…つ、次こそ負けねえからな!! 覚えてろよ! やーい! お前の初恋の人唐変木ーう!!」

「なんだと!?! やーい! 貴様の兄は難聴野郎!!」

『それどっちも一夏の事だろうが!!』

『急に叫んでどうしたの千冬姉!!』

聴いてたのか千冬さん。

『なんなのよこいつ!!?アリーナのシールドを突き破ったきやあ!!?』

『避けろ鈴っ!!』

『もう避けてるわよ!!』

『おい兄貴!?!なんだこいつ!?!』

『それがわからんえ!?!秋十!?!なんでいるんだよ!?!』

『試合が終わった後に兄貴の白式の整備点検手伝おうとピットに来たらいきなりシャッターが勝手に開いてレーザービームが飛んできたんだよ!?!』

『あ、本当だ、私が避けたからピットに直撃してる…よく避けたわね…。』

『へへ!それはこの機体!メイルシュトロームBTE(ブルー・ティアーズ・エクスペリメント)のお陰だな!こいつはブルーティアーズの戦術実証機でBT兵器を2機備えてるんだぜ!BT兵器の威力が高い代わりに本体は実弾のライフルしか使えないけどその代わり脚部にミサイルポッドを搭載して火力を補ってるから安心だな!』

『どうやって避けたかを聞いたつもりなんだけど?』

『なんでイギリスの代表候補生でも無いのにそんなの乗ってるんだよ…。』

『うるせえ！この侵入者は俺がぶちのめしてやるぜ！援護は任せろ!!』

（あ、「お前らは引っ込んでろ！」とか言わないんだ…。）

結果から言えば秋十の機体は大破したわ。

最初秋十がビットとライフルの銃撃で三方向から攻撃しては相手が（まあアレは無入

機だったんだけど）避ける方向を制限してあたしと一夏に背中を向けるように誘導して一夏が零落白夜で本体の（無人機の人の部分ね）腕を避けるようにビーム砲付きの大型アームを切り落として武装を破壊しての無力化を図ったけど無人機は直ぐに対応して残った片腕を盾替わりに秋十から叩き潰そうとしてきた、秋十も秋十でそれを読んでたのかミサイルを同時に何発も放って爆風で動きを止めては瞬間加速を連続で行って距離を取り、巧みに無人機と追いかけてこしては隙を見てミサイルとビットで攻撃を繰り返s：あれ？あいつさきり気なくセシリアができなかったマルチタスクしてない？ま、まあセシリアと違ってあいつのビットは直線的な動きしかできてなかったし…。

まあ最終的に一夏が止めを刺した後「へへ、ざまーみるガラクタ野郎。」とか言ってる無人機の残骸をぺちぺち叩いてた所で自爆に巻き込まれたわ…：ねえセシリア…：なんで少し離れた位置に居た私と一夏が保健室のベッドで包帯巻きにされて直撃喰らったあいつは無傷で篠ノ之に『クラスみんなの避難誘導してたから見てなかったが勝利に酔って自爆に巻き込まれるとは何事だ！油断禁物という言葉を知らんのか!!』って説教受けてるの…？

ドイツ某所

「ラウラ少佐、先日I S学園で起きた無人機事件は知っているな？先程M s・織斑から弟殿の護衛を我々に依頼してきた。君は今から日本…I S学園へドイツ代表候補生として転入してもらう。」

「はっ！了解しました！」

「モンド・グロツソでは我々はテロリストにブリュンヒルデの家族の誘拐を許してしまった、この汚名を挽回する為にも是非ともM s・織斑から教わった技術を振るって欲

し。

「はい、織斑教官も被害者である一夏殿も我々の落ち度を責めずに寧ろ庇って頂きました…その御恩をお返しする為にも粉骨砕身力を尽くすつもりであります！」

「……とこころであの帽子がうさ耳の形に盛り上がった整備士が君の専用機となるISを弄り回しているように見えるのだが…。」

「はい！何やら身に覚えのないデータがインストールされていたので検査に出したところ『あー、これは修理案件だねえ…大丈夫大丈夫！たばn…整備士さんが今日中に直してあげるからねー！』との事であります！」

「そうか…なら専用機は君の転入に間に合うように後ほどクラリツサに送らせる、日本で手続きもあるだろうから君は一足先に日本へ向かうといい。」

「了解！」

俺と鈴の怪我も癒えて有耶無耶になった勝負の続きをする為にセシリアと箒に立会人をして貰って模擬戦を始めようとした時、あいつが来た。

「よう兄貴！」

「やらないからな？」

「いや俺はただ2人の勝負を見学させてもらおうと…。」

「普段の行いが悪い。……聞きたかったんだけど秋十はどうしてそんなポンポン新しい機体に取り換えてるんだ？というよりISってそう何度も別の機体に取り換えられるものなのか？」

「兄貴の所属が倉持技研だとしたら俺はIS委員会に所属してるんだよね…それで『量産されない機体や使わない試作機に男性パイロットを乗せて正式パイロットが乗っても大丈夫か、実際に操縦した上での問題点を探さ』」

「なんだそれは!?!まるでモルモットではないか!?!」

「そうだ秋十!!お前そんな」

「いや、俺の方から頼んだんだけど…。」

「『そうなのか?』」

「いやあ…本来ならI S コア一つにつき一機の専用機を一人しか動かせない所をコアに外付けのメモリを増設することでコアを他の機体に付け替えられる様にしたり他の人でも生体データを登録すれば動かさせられるようにする…えーっと『セーブ・データ・システム』だったかな？それを搭載したI S コアを丸ごと専用でくれるって聞いてさ…I S を動かせられるってんなら色々な機体に乗りたいし。」

「ああ…組み立てもしない癖に色々なプラモデル買い溜めしてたなお前…。色々乗りたいい気持ちは分かるけどI S の機体を習熟した方がいいんじゃないのか？そっちの方が他のみんなに勝てると思うけど。」

「う、うるせーやい！お前のねーちゃん汚部屋住人!!」
「なんだと！そっちこそお前んちの長女酒乱全裸女！」

「どっちも千冬さんのことじゃない!?殺されるわよ!？」

「もう遅い。」

結果から言うと織斑兄弟はジ・Oとキュベレイを相手にした百式並にゴコゴコにされたわ。でもあれだけズタボロにされておいて次の日にケロツとした顔で『よう飯一緒しようぜ鳳さん！』って来る秋十はなんなの？

「よう兄貴！今日も平和そうな顔してるな！俺、兄貴のそういう自然な微笑み顔好きだぜ！あ、そうそう！前々から兄貴が欲しかった射撃兵装、試作品を用意したから放課後ちよつと付き合ってくれよ！」

「お、おう……。ご機嫌だな秋十……。」

「恋は人生を変えるってやつさー！」

転校生が来てから1週間、他のみんなはタッグトーナメントが近いからなのかピリピリしているってのに……秋十だけ凄にご機嫌だ。中学時代から頑なに外さなかつたトレードマークのサングラスも外して改造したノースリーブ制服も俺と同じ無改造になつて……。

まあこれはアレだけど原因は微笑ましい理由だから別にいいや。

「おはよう秋十くん、一夏くんといい元気なのはいい事だ。」

「おう！おはようボーデヴィツヒさん！」

「あ、おはようラウラ。」

「うむ、秋十くん。転校初日にも言ったが私は別にラウラで構わないぞ？」

この人はラウラ・ボーデヴィツヒ、第二回モンド・グロツソで起きた『織斑一夏誘拐事件』で千冬姉と協力して事件の犯人であるテロリストを発見して助けに来てくれた軍人だ、テロリスト自体は千冬姉一人で倒しちゃったらしいけど彼女達ドイツのIS部隊がいなければ発見できなかつたかもしれないって話だ。

「ボーデヴィツヒさんも俺のことは呼び捨てでいいよ？なあ兄貴。」

「おう、同じクラスの友達だしな。」

「そうか？日本語の講師から男の友達には必ず名前の後に『くん』を付けるものだと聞いたが…。」

「それ以上に仲のいい友達には呼び捨てでいいってことだよ。」

「そうか、では改めてよろしく頼むぞ。一夏、秋十。」

「おう！よろしくな、ラウラ（さん）」

結果から言えば秋十は撃沈した、いやこの場合撃チンしたと言うべきだろうか。転入してきた頃から男というにはあまりにも不自然な所の多かつたシャルが案の定女の子だったのだ。まあ秋十は普通に気づいてたのか『君こそ俺の理想のパリジェンヌ!!付き

合ってください！いや！お友達からで構いませんから！！』とか叫んでクラスのみんなから男色って勘違いされかけてたし。

最初飲み物買いに出かけた帰りに秋十の叫び声が俺の部屋から聞こえた時はとうとうやりやがったかと部屋に飛び込めば手にシャンプー入のレジ袋を持った秋十が床に倒れてて脱衣場にはバスタオル巻いたシャルが居た。

……そういえば昼休みに「あ、シャンプー切らしてたな」って秋十の前で眩いたな。

そのあとシャルのお家事情で色々あったけど話すのが面倒臭いからいいや。

「ハニー♡、俺の事好き？」

「だーいすきだよ！ダーリン♡……ほら、ダーリンの為に朝ごはん作ってきたの！その代わり僕は食堂のランチだけだね。」

「おお！ハニーの愛妻弁当だ！やったぜ。」

「ぶっ飛ばしていいかしらあのグラサン…長袖になった以外元に戻ってるし…。」

「暴力は良くないぞ鈴。しかし教官から聞いたが『恋人になりたいから君にどんな事でもしてあげたいんだ！』の一言が決め手とは……やはり恋というものは変な言い回しなんて馬鹿馬鹿しい告白なんぞせずとも当たって砕けるが最適解なのだな。」

「……………」

「ん？鈴、そんな頭の痛そうな顔で私を見てどうかしたのか？」

『ニュースです、フランスの女権団体がI S企業デュノア社のアルベル・デュノア社長に対して娘であるシャルロット・デュノアさんを人質に脅し、男性操縦者織斑一夏さんの所有するI Sのデータの強奪を命じたとして脅迫罪を初めとした複数の罪状を理由に何人ものメンバーが逮捕されており、中にはアルベル氏の親族もいるとの事で……これに対してI S委員会特別顧問の篠ノ之束博士は『未来あるI S適性者がこのような事件に巻き込まれてしまった事を非常に悲しく思う』等とコメントを……』

『臨時ニュースです、ドイツのI S研究所が違法研究を行っていたとしてドイツ軍からの告発があり、I S委員会から調査員が派遣された所、調査される前に研究所が爆発、幸い怪我人はありませんでしたがテロリストによる犯行の可能性もあり、I S委員会の篠ノ之博士は「I S学園を襲撃した無人兵器テロと同一犯の可能性があり見過ごすことはできない」とコメントを……』

「なあ箒、束さんって行方不明とかじゃなかったか？」

「ああ、1つの場所に留まるとテロリストに関係ない人が狙われる可能性があるから世界中を飛び回って行方を眩ませる事で自爆テロだの襲撃だのできないようにしているらしい。必要な時だけ公に最低限出て基本的にはテレビ電話等を通してNASAとかの宇宙開発機関とISSの研究をしているそうだ。」

「そうなのか…。」

「ちなみにあの無人機って本当に束さんじゃないの？」

「……………『いっくんの護衛用ISSが完成したからISS学園に運びこもうとしたら丁度いっくんが試合で活躍して興奮しながら見てたらちやんと固定してなかったせいでアリーナのだ真ん中に落とした上に衝撃で制御コンピュータが暴走しちやっただよね、ごみんね？☆』だそうだ。」

「何してんだ束さん…。」

「心配するな、姉さんは私と千冬さんがメントスコーラ限界チャレンジの刑に処した。」
「何その私刑!?!」

「うう…お尻がまだポツカリしてる気がするよう…。」
「束様、いい加減トイレから出てきてください。いちいち近所のコンビニに行くのは面倒臭いです。」

過去編でヒロイン作れなくても幸せになるだろうオリ主

昔の話…

「わあ…これがあのパピー・ポツティーに出てきた9と3／4番線…ほら！東さん見てみて！今から魔法学校いきまーす!!」

「はいはい見てるよ見てるよー…」

「もう、ノリが悪いな…だから妹に『姉さんはたまに2、3日お風呂に入らずに過ごすからついその…嫌悪感が顔に出てしまつて…私は可愛げ無い嫌な妹なのだろうか…。』つて愚痴こぼされるんだよ。」

「はいh…ええ!?バレてたの!?というか箒ちゃんがあんまり東さんのこと好きじゃない理由つてそれなの?」

「うん、みんな知ってるよ？ついでに篠ノ之さん『それさえなければ私にとっては世界で一番凄い自慢の姉さんなんだ。』って言ってたよ？」

「うわ凄いショック…てつきり東さんの性格と家族に対する態度が嫌われてる理由だと思ってた…。」

「むしろ『姉さんは会話こそしないが母さんが風邪を引いた時は黙って看病してくれたり、父さんがパソコンの使い方が分からなくて困ってた時にパソコン教室のパンフレットを渡してきたり、不器用だけど家族思いな人なんだ。』って姉自慢してた。」

「まじか…明日からちゃんとお風呂入ろ…。」

「そんな事よりもせつかくのイギリスだよ!? 楽しまないと!!」

「シャーロック・ホームズの実写映画が面白かったって理由だけで朝の四時に叩き起きて『東さんイギリス行きたい！行こう！行くぞ！ちよつと行く!!』って耳元でギャンギャンがなり立てられて誰にも教えたつもりのない人参ロケットの隠し場所まで布団

「こと引き摺られて……そんなコンデイションで旅行楽しめると思う？」

「なら楽しむ努力しろよ!?!なめてんのか!?!」

「全部他力本願でイギリス旅行しやがった奴に努力とか言われたくないよ……というかなんで東さんはあつくんに言われるがままイギリスまで飛んだんだろ……。」

この子は東さんの親友のちーちゃんの弟のいつくんの双子の弟のあつくん、人の事を猫型ロボットかなんかだと思ってるのか時々思いついたようにやれ『夢の国に行つてエレクトリカルパレードの真つ最中に同時多発的にシユールストレミングの缶詰の自身をぶちまてリア充共のデートを台無しにしてやりたい!』とか『いつも頑張ってる千冬お姉ちゃんに温泉旅行させてあげたい!』とか『車体をボロボロに錆付かせた上でシャークペイントを施してエンブレム代わりにバッファローの頭蓋骨を貼り付けたキャデラックに乗つてテキサスのハイウェイにV8エンジンの唸り声を轟かせてみたい!』とか『嵐の中で輝きたい!』とか『お台場の実物大おつちゃんにラストシユーツィングのポーズ取らせたい!』とか頼み込んでくるんだよね……まあいつも東さんが凄い暇だつたり気分転換に何か騒ぎたいなとか思ってる時に来るからついつい面白そうだ

なあつて手を貸しちゃうんだけどさ。

しかし今度は映画に影響されてイギリス旅行なんてあつくんも意外と小学生らしい頼み事するんだね、まあ寝てる東さんを起こすのにわざわざパジャマとパンツ脱がしてお尻に爆竹挟ませようとしていたのに気づいた時はチエルノブイリに放り捨ててやろうかと思っただけ。

「よし、満足したから列車乗ろう！」

「はいはい、それじゃああつちの2番線nうわあつ!？」

『おいあつちに有名人がいるらしいぞ!』

『ジャパンのコメディアンだつて!』

『違うよ!ボイスアクターだよ!』

『たしかくろがねの城つてロボットの…。』

『そんなわけあるか!レッツコンバインするやつだよ!』

『ぬまつちつて言うらしいぞ!』

「た、東さん!?大丈夫?おもつくそ観光客っぽい人達に突き飛ばされてたけど…。」

「痛たた…おい！どこに目をつけてるんだよ英国凡人共!!」

「多分束さんと同じ場所に…あれ？束さん？うさ耳は？」

「え？……あれ!!無い!!無い無い!!束さんのうさ耳が!!」

嘘でしょ？束さんのチャームポイントのうさ耳が!!あつくんのクソダサイグラサンと違つてオシヤレポイントのうさ耳が!…さっきの凡人達にぶつかった時に取れた!!無い!!あのうさ耳が…!!

「た、束さん？なんか顔がガミラス帝国の人みたいに真つ青だよ…？ちよ、ちよつと？」
「ひっ！あああああ、あ、あつくん！お願い！束さんのうさ耳探して!!あ、あれが無いと…。」

「ほ、本当にどうしたの？いつも余裕そうな腹立つドヤ顔が消えてるよ？」

「あ、あれにはちよつと言えないけど束さんの大切なデータが入ってるの！お願い！誰かに盗まれたりしたら…。」

あれは使い方さえ違えば核ミサイルすら凌駕する兵器になる！そんなもの誰かの手

に渡つたら東さんの夢が戦争の悪夢にされる！そんなの嫌だ!!

「お願い！探すの手伝って！もしくは破壊して!!」

「壊すの!?!たかがメカっぽいうさ耳カチューシャに何ビビってんの?」

「いいから!!手伝ってくれないなら…箒ちゃんが夏の暑さに負けて誰も居ないと思って剣道着をただけさせて涼んでた所をあつくんが覗き見して箒ちゃんのまな板の桜色をしつかり見た上に鉛筆でスケッチ描いて額縁に入れて鍵付きの引き出しに隠してる事をバラすからね!!」

「や、やめろよ…バレたらガチで友達の信用失くすタイプの秘密を盾に脅すのはやめろよ…。」

『しかしセシリアには悪い事をしたな…。』

『大丈夫よ、あの子には他の使用人やチエルシーがいるもの、それに夫婦水入らずの旅行なんてセシリアが生まれて何年ぶりかしら…。』

『君には苦勞をかけるな…。』

『構わないわ、その代わり貴方には損な役割をさせてしまっているもの。』

『ああ、君が敏腕な女経営者、そして私はその社長のさえない夫であり会社の幹部…普段君の尻に敷かれている私には君をよく思わない幹部やライバル企業の手の者が来る…。』

『そして貴方がそんな連中から得た情報は私へと送られる…：ねえ、やっぱりセシリアには本当の事を…。』

『いいや、まだダメだ。君から会社を…オルコット家の全てを奪おうとする奴等はまだまだ多い、いずれ家を継ぐセシリアの為にも敵を1人でも多く私達が減らさなくては。少なくとも全て話すのはセシリアが社会の分かる年齢になってからだ。』

『貴方…：…ん？』

『どうしたんだい？』

『ほら、あそこ…。何かカチューシャが落ちてるわ。』

『おや、本当だ…。金属のウサギの耳みたいなデザインだな。』

『何かしら…。？映画とかの小道g』

「あああああ!!?!?!?!そのイギリス人!!うさ耳返せええええ!!」

『きやあ!!?』

「あ!?!東さんのカチューシャが!?!落とし物を投げるんじゃないやありません!!それじゃあ失礼!!」

『……な、なんだったんだ?』

『さ、さあ?…あのカチューシャ、あの子のもだったのかしら?ビックリして遠くに投げちゃったわ…悪い事しちゃった。』

「ああ糞！線路まで投げ落とすなんて…どんな肩してたんだよあのイギリス熟女…見た目が20歳くらいにしか見えなくても子供産むくらいの歳だってバレバレだつてーの！」

「あのカチューシヤは束さん以外が頭に装着すると自爆装置が働くって言うの忘れてた
…まあダサイサンングラス付けてるやつが束さんのイカしたうさ耳を付けようなんて思
うわけないよね。」

『あら？お父様、お母様？旅行に行くんじゃないや無かったですか？』
『ただいまセシリア：それが駅で謎の爆発が起こってね、大事を取って帰ってきたんだよ。』

結果から言えば案の定秋十は爆発した。感情に合わせてピコピコ動くうさ耳を着けてみたいと思ってしまったのだ。

爆心地に居たはずなのにグラサンにヒビ入った以外は無傷だと束が言っていたが恐

らく奴の驚異の科学力で秋十を治療したに違いない、頭皮の真上で爆発が起きて怪我ひとつしない人間がいるものか。問い詰めても束はしらを切るし：恐らく脅されているのだろう、秋十は一貫して「自分がイギリスに行きたいと言ったせいだ。」とまるで原因は自分にあるかのように束を庇う。あいつが温泉旅行をプレゼントした時は驚いたが……まさか、私と一夏だけで熱海旅行に行かせたのは秋十が遠慮したからではなく束が秋十を何らかの良からぬことに利用する為か？ 奴の一夏に対する視線も怪しい……ここは心を鬼にして束を問いたださなくては……。

「というわけで私は束に牙突千本ノックしてくるから秋十と大人しくお留守番してるんだぞ、一夏。」

「わ、わかったけど素振り用の小さい竹刀を持って束さんの何処をノックするつもりなの千冬姉……。」

「うう…閉じないよう…穴が閉じないよう…。」

「姉さんの部屋に何でオムツが…え？…ま…まさかお風呂だけじゃなくてトイレも？…ええ…しばらく姉さんと距離置こう…。」

主人公に勝てないけど幸せになれたオリ主

「舞い上がつれ〜舞い上がつれ〜舞い上がつれ〜♪白式い〜♪」

「君よ〜♪」

「はしれ〜♪」

「まだ勝利を求めろ〜♪闘志があるなら〜♪」

「ひかりのーつるぎで〜♪」

「勝てよ♪勝てよ♪勝てよ〜♪」

「しろい〜つばさで〜♪宇宙（そら）へ〜♪びやくしい〜き〜♪」

「インフィニット〜♪ストラトオス〜♪白式い♪白式っ!!♪」

「のほほんさんとラウラは何を歌ってるんだ？」

「おりむー知らないの？クラス代表を決める試合でおりむーがセツシーと戦ってる時にあつきーが歌ってた応援歌『跳べ！白式』だよ？」

「本音さんがハミングしていたから曲を教えてもらったのでに歌ってたのだ。」

「そうなんだ…全然知らなかった。」

「学園の流行歌だぞ？遅れてるな一夏。」

「中学の頃から思ってたけど、秋十はさあ…お兄ちゃん好き過ぎじゃない…？」

「気にするな鈴、秋十の奴は小学校の頃からライバルポジ気取りな癖してそんな感じだったからな。」

シャルの一件も一段落して俺は秋十が改造してくれた白式の訓練を…ああそうそう、秋十はI S委員会直属のパイロットであり、そこそこI S開発もできるので「すいません、消防署『の方』から来たんですけど」みたいな感じで色々口出しできる立場を手に入れたらしく、秋十がI S委員会を通して倉持技研へ

『近接武器だけのI Sで一夏を野放しにすると収集できるデータが偏るのでは』

という懸念の声があり、結果、秋十ちゃんが定期的に俺の白式用に新兵装を開発してくれるようになった。

しかし秋十ちゃんはなんだか格闘専用機のことをキライみたいで、いつもいつも不愛想にビツクリドッキリメカばっかりお出して、お予算足りない足りないなのだった。

……話は戻すけど秋十がやつと真面目に作ってくれた白式の射撃兵装が…「右腕部内蔵二連装グレネードランチャー（単発）、左肩部サブアームシールド+内蔵マシンガン、両脚部補助スラスト兼用荷電粒子砲」とガンダムで例えると白式にZガンダムの右腕、ザクウォーリアのシールド（裏側にマシンガンポン付け）、リバウのフレキシブル・

ビーム・ガン追加……：剣1本の白式があつという間に重武装になったわけだ……：え？
イコライザが無いのにどうやって武装を追加したか？……：ああ、元々あつた装甲を全部
剥がして、武装を取り付けて、それに合わせて装甲を貼り直して白式の外装パーツとし
て登録し直したんだとか。元々パワーも推進力も高い白式だからこそ元々の性能はほ
とんど落とさずにここまで豊富な武装を実現させたんだとか。：欠点としてはどの武
装も弾切れしたらパーツ丸ごと取り外さないと補給できないらしい……。

整備性悪くないか？…：簪さんにまた色々教えてもらわないとなあ…。

とか考えてたら俺に影がさしてきた…：物理的に。

「よう兄貴！敗北の苦渋を味わう準備はできたか？」

「ごめんね一夏、今大丈夫かな？」

IS学園ベストバカップル賞で前大会優勝の代表候補生カップルにトリプルスコアを決めて優勝した日仏コンビがやってきた：いや、シャルの方は覗き込むように顔を出してなきや分からなかったけど…。

ちなみにシャルと呼んでは本人が女子として転入したときに『これからは気軽にシャルって呼んでください』とクラスのみんなに言ってたからそう呼んでる。：誰に言い訳してるんだろ俺。

「なあ秋十。俺にはお前がMGSPWのコクーンのAIポッドを丸ごとISの上半身に付け替えたような機体に乗ってるように見えるんだけど…。」

「良くぞ聞いてくれた！これが本来兄貴に渡す予定だった白式用射撃兵装『分離合体式単独要塞：一夜城』だ！どうだ！でつかいだろ？」

「宇宙服の筈のISがなんでガソリンの臭いガンガン吐きながらキャタピラ駆動してるんだよ…え？今それ白式用の装備って言わなかった？」

「おう！白式そのものを脱出装置に見立てて、超火力、重装甲、オールレンジを実現した夢のようなISだぜ！どうだ凄いだろ？」

「そりや自動操縦のミサイルだのガトリング砲だの沢山積んでおけばオールレンジ（笑）つて言えるかもしれないけど、アーリーナの6割がお前のISで埋めつくされてるんだけど…。」

「ちなみにこれの最高速度は時速20kmだよ。」

「原チャリより遅いIS初めて見た…。」

これキヤタピラで移動してるって事は飛べないんだよな…：原チャリ以下の速度でキヤタピラで縦横大型トラック数台分のスペースないと動けないISを俺に渡すつもりだったのかコイツ。

「ま、完成が遅れに遅れたから兄貴に渡すことなく試作機作っただけで計画が凍結され

「ただけどき。」

少なくともこんなもん完成させるまでの予算は降りてたのか…。

「そんなわけでこいつの試運転ついでに兄貴!!お前を倒して俺が織斑家のニューリーダーになってやるぜ!あ、ハニーは危ないから下がってね♡」

「わかったよダーリン♡、愛情たっぷり込めて応援するから頑張つてね!」

「うん!ハニー宇宙で一番大好き!!…さあ!来いッツ!!」

(BGM:水〇奈々『恋の抑止〇』)

結果から言えば秋十の惨敗だった。秋十の機体は90度旋回するのに1分かかるし自動操縦のミサイルもガトリング砲もISで振り切れるIS登場前の兵器の使い回しだしついでに脱出装置とコクピットを兼ねてるIS本体は上半身が無防備でむき出しの超ポンコツだったのだ。

だが秋十はすぐさまガトリング砲を手動に切り替えては自分で発射したミサイルを撃ち落とすことで白式を爆風に巻き込もうとしたりミサイルをばらまいて足止めにする事に専念してはガトリング砲を当ててきたり、IS自体もアサルトライフルとバズーカを装備して近づかれてもある程度戦えるようにとスピード自慢の白式への対策を思いついては使いこなしてみせた……だが、巨大すぎる機体は1度近づかれるとどの武装

もガトリング砲では近すぎて攻撃できずミサイルは避けられる上に自分自身に直撃する……ぶっちゃけそれに気づいてはガトリング砲とIS本体の武器の射線が届かない足元で零落白夜をチクチクするだけで勝てた。

そもそも相手が近づけば全力で逃げ回り、距離を取ろうとすれば追いかけて回して射撃兵装でガンガン削る感じの一撃離脱戦法モドキが得意な秋十に鈍足すぎる機体は罰ゲームだと思う。

「こ、これで勝ったと思うなよ！やーい！お前のIS学園初の男友達女の子ーっ！」

「なんだと！やーい！お前の彼女……ば、パリジエンヌー！」

「どっちも僕の事だよね!?あと一夏は思いつかないなら無理に捻りださなくていいから！」

「その時たまたまグラスサン外してノースリーブ脱いでたから気づかなかったんだと思うんだ。……だから生徒会長に言ってやったよ。『あの…俺、秋十ですけど?』 ってさ。」

「確かにあつきーって、声も見た目もおりむーと瓜二つだもんね。ひよつとしてサングラス付けてるのっておりむーと見分けつくように?」

「その通り、だから織斑先生は俺がグラスサン付けてても何も言わないってわけ。」

「いやいや、流石に織斑先生は見分けついてるでしょ？」

「……………兄弟二人揃って風邪引いてさ…途中トイレ行って戻ってきた時に兄貴もトイレに行つてさ、怠くて自分の布団じゃなくて近くの兄貴が寝た布団に入ったんだよ………そしたら台所からお粥を持ってきた姉ちゃんが『ほら一夏、食欲はあるか？これだけでも食べておけ。』って俺に…。」

「ええ…………。」

タッグトーナメントに備えて俺と箒はセシリアと鈴のペアを相手にラウラ指導の元で連携を意識した戦い方を練習していた、その時またあいつが来た。

「よう兄貴！優勝は俺とハニーが頂くからな！」

「ダーリン、素直に一緒に訓練したいって言えば？一夏達なら普通にOKしてくれるよ？」

「ああ…大丈夫よシャル、秋十のそれは『ただ構って欲しいだけだから』って一夏と千冬さんからみんな聞いてるから。まああたしは中学の頃から知ってたけどさ。」

「ち、ちげえし！俺は兄貴を倒してどちらが上かハッキリさせてえんだよ!!」

「専用機持ちでもない私が言うもの何だが何回も負けたり引き分けでも機体が大破してたりと散々ではないか、お前の戦績は。」

「うっさい！と、とにかく！この東さんの無人機の残骸をガメて作った『ゴーレム・リペアカスタム』で全員けちよんけちよんにしてやるからな!!」

「そのジオングとギャン・バルカンのミキシングプラモみたいなISあの無人機ベースなのか…。」

「今ガメたって言わなかったか…？お前まさか学園の押収品の無人機をそのままベース機に使ったのか!？」

「大丈夫大丈夫、俺はIS学園より上の立場の『IS委員会直属』のテストパイロットだから。それより見ろよこのブルー・ティアーズの残骸パーツから解析したデータを元に作った有線ビット、両腕が文字通りジオングになってるんだよね。両肩のビームバルカンは発射速度と射程範囲を従来の機体装備より向上してるし…いやあ、俺の才能が怖いわあ。」

「凄いよダーリン！あんなボロボロのスクラップと整備科が廃棄したジャンク品でIS作っちゃうなんて、学園の物を無許可で使う所は控えて欲しいけど技術は本当に尊敬し

「ちやうよー！」

「いやあ、ハニーに褒められると照れるなあ……というわけで！タツグトーナメント覚えてろよ！！」

「何しに来たんだあいつは……。」

結果から言えば秋十はトーナメント前日に出場禁止処分になった、やっぱり無人機の残骸を勝手に使ったのがいけないかったらしい。出場禁止だけでお咎め無しなのは秋十が遠隔操作と無人操縦可能な部分を完全に破壊していたから『テロリストに奪われる前に無人機を破壊処分した。』というお粗末な言い訳が通ったとの話だが俺は生徒指導室で仁王立ちする千冬姉に土下座する秋十とIS委員会のお偉いさんを見てしまったから多分千冬姉がブリュンヒルデ的なアレで秋十を庇ってくれたんだと思う。

ちなみに優勝したのは普段の訓練の成果を余すことなく発揮した箒と軍人としての経験と千冬の指導をみっちり受けた事で自他共に認める実力を持つラウラのペアだった。

元々抽選で相方を決めるつもりだった俺は秋十と組めなくて意気消沈したシャルと組むことになったんだが……初戦の相手が山田先生にボロ負けしてから訓練しまくって息びつたりのセシリア&鈴のペア…即席チームの俺達じゃ勝てなかったよ。

「それで裸エプロンの簪さんに似てる女の人が出てき、びっくりしてつい…『俺、秋十だけど…?』って言ったたらなんかシヨック受けた顔して帰っちゃったんだよな。」

「ドアを開けたら裸エプロンって…そういうや兄貴、優勝した篠ノ之さんがなんか兄貴を屋上に呼び出してたけど何かあったの?」

「ああ、実はトーナメント前に『優勝したら付き合ってくれ。』って言われててさ、今度の休み筈と2人で遊園地行くことにしたんだ。」

「へえ…可哀想に。」

「……………何が?」

「はい…はい…それが…転んだ拍子にすつぽり入ったと言つてまして…。冗談ではなくて…いえ、娘はお風呂上がりにファイト一発決めるつもりだったと言つてます…。…はい…やろうとはしたんですけど…奥まで入り込んで…はい、お願いします…。」

「東様、救急車がサイレン鳴らして来てくれるそうですよ。」

「何もしてない…束さん何もしてないのに…うう…あんまりだあ…。」

「娘が久しぶりに家に帰って来たかと思っただら風呂場で悶絶してる…あと私のコーヒー牛乳が見当たらないんだが…。」

時系列がバラバラでも幸せを目指したいオリ主

私が更識家当主『楯無』を就任する日…この名を受け継げば私は本当の意味で更識の人間となる…もはや子供だからなんて言い訳は許されない。その為に私は今日まで育てられて来たのだから。

だからこそ…妹には…簪ちゃんには私のように暗い道を歩むような人生を歩んで欲しくない、できるなら本音ちゃんと一緒に陽の光の下で…普通の幸せを考えて生きて欲しい。

だからこそ…私は今日、妹に伝える。

『無能なままでいなさいな。』

何もなくていい、無理をしないで、無茶をしないで…『更識』で貴女の価値を見出さないで…きつと機械弄りが得意な簪ちゃんはその才能をどんどん伸ばすでしょう…でも、それはいけない…そうすれば貴女も引きずり込まれてしまう…私が進もうとする…日陰の中に…。

だから私は……はつきり言おう……最愛の妹に……たとえ拒絶されてしまおうとも。
愛する者の為になら嫌われても構わない……それが家族でしょう？

さあ伝えよう……。

と、さつきまでは思っていたわ、簪ちゃんの部屋の前に立つまでは……。

「かんちゃんん、お花飾りはこれでいいかなー？」

「うん、ありがとう…そしたら、これ…掛けるの手伝って…。」

「ん？なにになに…『刀奈お姉ちゃん！更識家当主、就任おめでとう！』…この横断幕かんちゃん一人で作ったの？すつごーい！」

「お姉ちゃんに…お祝いしてあげたくて…。誕生日とかも私は何もしてあげられなかったから…。」

「お姉ちゃん思いの妹を持ってお嬢様は幸せだねっ！」

「ほら本音、早くしないと刀n…楯無お嬢様が来るからお菓子は置いて。」

「むう、ちゃんと手伝ってるよー！お菓子はただのつまみ食いだもん！」

「つまみ食いもダメ… 虚さん、クラツカーの用意は…？」

「はいこれ、あとはお嬢様が部屋に入ってくるのを待つだけで…。」

「ドアを開けたらクラツカーがパパパパーン！だね！」

い、言えねえ……！こんなお祝いムードな相手に『無能でいなさい』とか言えるわけない……！こんな状況で言ったが最後、最悪簪ちゃんどころか本音ちゃんにも虚ちゃんにも嫌われかねない……！それだけは避けないと!!布仏姉妹には私の『無能でいなさい』発言の後に……。

『楯無就任の日に無能でいなさいと言われた？……もしかして本心は……。』

みたいな感じで何となく私の本心を簪ちゃんに悟らせて姉妹の寄りを戻す為に必要なんだからあ……！どすればいい!?今日という日を逃したら……後日『無能でいなさいな』をやってもそれはただの悪口!本当の意味を悟らせるにはどうしても就任当日の今日言わないとダメなのがいいいいいい!!!

「お姉ちゃん、私の作った扇子…どう？達筆の文字が浮かび上がってメモ帳とかカンペとして使える機能を付けた自作なんだけど…？」

「ありがとう簪ちゃん！お姉ちゃん本当に嬉しい!!愛してる簪ちゃんっ！」

「むぐっ……お、お姉ちゃん……む、胸が……息出来な……っ」

結果から言えばめつつつつちやお祝いパーティー満喫したわ、つい我慢できなくて今まで抑えてた分簪ちゃんを猫可愛がりしてたら何か次の日から顔を赤くして私を避けるようになっちゃったけど……あ、姉妹仲は悪くないわよ？今でも偶に私と一緒にのお布団で寝たいと甘えて来るところが可愛いのよねえ……ってあれ？織斑くん……？何処行くの？ねえちよつと！楯無お姉さんの昔話くらい付き合っつてよ！わかったから！もう裸エプロンしないk

……え？俺は一夏じゃなくて秋十だよ？

……ごめんなさい。部屋を間違えました。

「へえ、篠ノ之さんと鳳さんが二人揃って医務室送り…ねえ、何かあったか知ってる？」
ラ

ウラさん。」

「いや、だが2人とも寮の自室…キッチンで爆発に巻き込まれたと噂らしい。」

「はあ？ I S 学園って国際的な教育機関でしょ？ そんな事故が起きたら人の首が飛びそうな施設で爆発って…大丈夫？ 学園建てた会社が手抜き工事とかしてないよな？」

「さあな、まあ I S 学園は人工島を利用したちよつとした街みたいなものだからな…ほとんどの施設が学園を締めているとはいえ食堂にトレーニングルームに射撃場に…建設するのに莫大な金額が流れているんだ。袖の下に入れようと何処かで金と手を抜いていても可笑しくは無いだろう。」

「まあ防犯の要でもあるドアが木刀で簡単に突き破られるような寮じゃあ…ねえ。」

「人を悪く言うのは軍人として避けたいが…それは箒の腕力がおかしいだけだと思うぞ…多分。」

学園に来て馴染めるだろうか不安はあったが織斑千冬教官の教え子という点や一夏

や秋十が真っ先に私と交流を深めてくれた事からそれ繋がりで織斑家ファンクラブなる生徒達を通じて私にも友達が出来た、黒兎隊と教官のアドレスしか入ってなかった私の携帯も今では友達の名前でいっぱいだ…本来の任務を忘れてはいないが、学生としてこの3年間を生徒として青春してみるのも悪くは無いな。

「ところで俺はハニーと夕食食べようかなあつて思ってるけど、ラウラさんはどうする？」

「む、食堂で済ませようと思っていたが…私を誘って大丈夫なのか？シャルと恋人水入らずの方が…？」

「何言ってるんだよ、可愛い可愛いハニーの手料理だよ？そんなの友達に自慢しなくてどうするんだよ？ほら、俺の惚気の為にラウラさんには夕食をご馳走様してあげるよっ！」

「わわっ、こら、背中を押すんじゃないっ…わかったわかった。付き合っただけから…。」

「廊下の真ん中で騒ぐもんじゃない、他の生徒に迷惑だ。」

「きよ、教か…織斑先生！」

「げ、姉ちゃん!？」

「実の姉をみて第一声が『げ』は無いだろう…全く、もうすぐ夕食の時間だがお前達は食堂に行かないのか？」

「はい！いいえ、今秋十に夕食を誘われてご馳走になる所です！」

「あ、そうだ。姉ちゃんも一緒にどう？俺の未来の奥さんは料理が絶品なんだよ。」

「ふむ…：…そうだな、義理の姉として弟の妻に相応しいかどうか料理を味見してやろうじゃないか。」

教官は冗談らしく笑いながらそう告げる、成程…きつと教官の守りたいものというの
はこういう…：暖かいものの事なのだろう、家族の事になれば教官は頬を綻ばせ微笑みを

浮かべていた…。

「あ、おかえりダーr…お、おおお織斑先生!？」

「ただいまハニー! ハニーの手料理を自慢したくて誘っちゃったよ。」

「……ボーデヴィツヒ、今デユノアが織斑弟におかえりと言っていたように聞こえるが。」

「はっ！秋十に頼まれて私が一夏の部屋に、秋十はシャルの部屋で過ごしております！」

「あ!?!ちよつと!?!」

「秋十からは『ほら、ラウラさんは兄貴の護衛に来たんだろ？なら兄貴が1番無防備になる寝床…寮の部屋と一緒に居た方がいいんじゃないかな?』と提案を受け、それは名案だと思ひ部屋を交換しました！」

「……………ほう。」

「え、あーっ…は、ハニー!?!ほら、今遠目で部屋から誰か出ていくように見えてたけどアレは何かあったのかな!?!俺すっごく気になるなあー!!気つになあーるつなあー!!（C V・子〇武人）」

「ダーリンがテラ子〇に…え、えーと料理を教えて欲しいって頼まれて今一緒に作ってたんだよ。料理は完成したけどちよつと作り過ぎちゃて…そ、そうだ！良かったら織斑

先生とラウラも一緒に……あはは。」

「……まあ、今回は見逃して置いてやろう。」

結論から言おう、私達4人は仲良く病院へと搬送された。原因は食べたポトフに絵の具と香水がタップリ入っていたそうだ……タチの悪い食中毒になったかと思っただぞ……しかし絵の具を入れたセシリアも悪いが秋十のヤツめ、いくら何でも香水を台所に置きっぱなしにするのはどうかしてるぞ。しかも見た目は『紳士服を着た蜂がハチミツを舐めているイラスト』とは……料理初心者のセシリアが調味料と間違えてもおかしくはない……くもないけど……ああ、死ぬかと思った。しばらく他人の家で食事をご馳走にはなりたくない……。ところで一夏よ、私は体内に医療ナノマシンを仕込んでいるから軽傷で済んだが……何故シャルと織斑教官は未だに意識不明なのに秋十はその日の内に退院してリンゴを剥きながら床に正座するセシリアに『彩りが足りないからって変なもん入れるやつが何処にいるんだよ!』と説教しているんだ?

昔
の
話
……
……
……
……
……

「へえ……ここが中国か……黒い噂をネットで聞くけど意外と観光名所って感じだなあ。」

「まあ……観光名所だからな。しかし東、よくお前が知らない他人の為にここまでする気になったな。」

「まあいっくんと箒ちゃんの友達なんだし、そのリンリンだからランランだから知らないけど箒ちゃんの頼み事なら断れないよ。」

「すいません、東さん。」

「姉さん……私が転校したくないと我儘を聞いて貰ったばかりなのに……本当にすいません。」

「気にしないでよ！東さんも家族と離れ離れはぶっちゃけ嫌だから政府の人をお願いしただけだしさ、まあ両親の方は政府の人が生活を全面サポートするって言った途端に『ちよつと夫婦水入らずの時間を過ごしたい』とか言つて島根まで飛びやがったけど

……。」

「まあ父さんと母さんは姉さんに苦勞した分羽根を伸ばしてきて欲しいから私が秋十に『両親を唆して欲しい』と頼んだのですが。」

「箒ちゃんつたら酷い！束さんそんなに手のかかる子供じゃないもん！」

「言つとくがお前、少し前までご近所から『中学生になつて他人様の家の小学生の男の子をあつちこつち連れ歩くシヨタコン』つて噂されていたからな。」

「マジで!?あれほとんどあつくくんが束さんを振り回してたからね!？」

「あれ?そう言えば秋十は？」

「おーい兄貴!!見てよこのゴーグル!そこのおっさんから聞いたんだけど中国軍が独自開発した機密兵器の『物が透けて見えるゴーグル』だつて!こんな凄いのがつたの8000元!いい買い物したぜ！」

「……………カモられてる…。」

「アイツがナチュラルに中国語話してた事実はともかく、アレただの…。」
「うん、中国軍つてのあつてるけどアレただの壊れた暗視スコープだね。」
「秋十…お前という男は…だから一夏に負けるのだ。」

「畜生……！畜生……！こんなものって……こんなものって……!!」

「あつくん、普通に考えてインチキだってわかるでしょ……。」

「大通りのど真ん中で号泣するんじゃない。周りの人が路上パフォーマンスと間違えてスマホ構えてるではないか。」

俺と秋十、箒は家庭の事情で転校した鈴に久しぶりに顔を見に行こうと中国へやってきた、まあ飛行機は束さんが用意して貰った人参のボディにうさ耳を模した翼というふざけたプライベートジェットに乗ってきたけど……中学生3人だけで外国は危ないから束さんと千冬姉が保護者として着いてきてくれてる。

まあ、秋十……時々頭の良さに似合わないバカをやるどころ、お兄ちゃんは嫌いじゃないからな。

「それで、鳳さんの家つてどこなの？」

「知らずに来たのか秋十……なあ箒。」

「私も知らんぞ。てつきり一夏が知つてるとばかり……。」

「言い出しつぺの秋十が知つてるかと……。」

「文通してる兄貴ならわかかってるか……。」

「何!?一夏!?お前鈴と文通しているのか!？」

「え、ああ……そうだけ……。」

「貴様……っ!」

ええ？俺悪い事してないよな？鈴とは友達なんだから連絡位は取りたいし……。

「何故私にも教えてくれないんだ！私だって鈴と友達だぞ！」

あ、確かに。それは俺が悪かったな…。

「ごめん筈、俺達みんな筈とメールアドレス交換してるしいいかなって…。」

「馬鹿者、メールではなく手書きだからこそ伝わる気持ちもあるだろう！」

「そうだぞ兄貴、まあ鳳さんが文通言い出してそれを兄貴にしか伝えなかった俺も悪かったけど」

「チエストオオ！」

「ぐへえ!？」

「あ、秋十おおおおお!？」

「話が全く進まん…。」

「尤もです、千冬姉。」

「なんで私達が外に…。」

「仕方ないだろう、秋十が『東さんと一緒に鳳さんのスマホをハッキングして自宅の場所調べるから待って！』と言って私達を置いてこの…この…この…多分ネカフェ？に入ってしまったのだからな。」

「それで東さん、例の物は？」

「もちろんできてるよー！はい、ヤクル〇の容器に入った惚れ葉。いやあ箒ちゃんに告白する事なく失恋したかと思ったら今度は中国娘とは、あつくんは切り替え早いねー。」

「いやあ…それほどでも…。」

「褒めてないからね？」

「で、これを飲めば…。」

「うん、あつくんが望んだ通りに『同じ惚れ薬を飲んだ相手を強く意識する。』効果がでてくるよ、まあ意識するだけで本当に惚れるかどうかは当人同士の好意次第かな？」

「よっしやあー！」

「でもいいの？東さんなら完全にあの中国娘をあつくんメロメロの好き好き大好きにできる惚れ薬作れるよ？」

「それじゃダメなんだよ…いや、これも本当はダメだけど…これを飲めば鳳さんは俺を一夏の兄貴と比べずに織斑秋十という一人の男として見てくれる…その上で告白して断られてこそ…俺は鳳さんを諦めきれるんだよ。」

「惚れさせる為じゃなくてフラれる為に惚れ葉飲ませる奴なんてあつくん位しかない
だろうね…。」

「いらっしやい一夏！箒！秋十！千冬さん…それと…。」

「こんちゃー！東さんだよー！日本ではそれなりに有名人だよ！」

「いや名前が分からなかったんじゃなくて……篠ノ之博士……あの、ISを作った……」

「そう！本来の目的は宇宙を飛ぶためのものだけど大衆共に受け入れて貰うために『女性しか動かせない事を除けばどんな危険な場所でも安全に作業できるパワードスーツ』として発表したんだよね！もちろんISの実機で実演してデタラメだの虚構だの言う連中を黙らせてやったよ！」

「最近アマゾンの密林の火災も消防隊仕様のISが消火してもう鎮火寸前なんだっけ？」

「そうそう！日本の地震やアメリカの台風の後の被災地の復興にも大活躍っ！そんな世界最高の発明をした大天才がこの篠ノ之東なのだー！ひかえおろー!!」

「え、えーと……ははーっ」

「いや、鈴…乗らなくていいからな？」

一応メールで来ることは伝えただけどまさかメールした翌日に来ると思ってたのか鈴は最初驚いていたが友達との再会が嬉しいのかすぐ笑顔で迎え入れてくれた。

「それはそうと済まなかったな鈴、急にやって来てお茶まで出してもらって…。」

「気にしないでよ箒、別に何か用事があった訳でもないし…それに友達がわざわざ日本から中国まで会いに来てくれたんだからお茶位ださなきやこつちが罰当たっちゃうわよ。」

最初は何故か仲が悪そうな雰囲気だった箒ともいつの間にかいつも一緒にいる…鈴にとつて男の親友が俺なら女の親友は箒って感じの仲になってたんだよな…やっぱり武術をやつてる者同士通じ合う所があるのかな？そういえば弾が鈴をからかつて秋十が箒を茶化しては箒と鈴のダブルパンチで2人仲良く吹っ飛ばされてたなあ…何故かいつも秋十が弾の下敷きになってたけど。

どうせなら弾や数馬も誘って…ダメだ東さんがokする予感がしない。

「それで最近学校はどのようなのよ？弾のやつはやっぱり秋十とナンパ失敗記録伸ばしてるの？」

「ちよつと！俺があんな中学デビューと一緒にされちゃこまるぜ！このグラサンに懸けて！俺はナンパなんて不埒なことは…。」

「そう言つて『金髪お姉さん』だの『僕っ子大学生』だの『バイク一筋な姉御肌』だの弾に言いくるめられて休みの日に仲良くナンパに繰り出してたのは何処の誰だっけかなあ〜？」

「…ぐう…」

「ぐうの音を出すな馬鹿者…まあ秋十は最近弾の奴の誘いに乗らずに一夏一筋だな。」

「……………まだやってるの？」

「ああ、『最近音楽の授業のテストで勝負しろー！』って言ってさ名前忘れたけど英語

の歌を歌うテストだったんだけど……秋十は『英語は完璧だけどドイツ訛りが酷すぎて音程が取れてない。』って言われて『普通に音痴未満』って言われた俺が紙一重で勝ったぜ！」

「自慢することかそれは……。」

「さつき中国語で挨拶された時もそうだけど何で秋十は外国語話す度に『イギリス訛りのイタリア語』とか『黒人訛りの中国語』とか『中国人の話すロシア語』とかどれもこれも言葉と発音がアベコベなのよ……しかも誰一人として『日本人の発音とは思えない。』みたいな評価してるし……。英語の先生びっくりしてたわよね……。」

「だって教えて貰う講師の人が悪いし……。」

「前から気になってたがお前は誰からそういう事を教わるんだ？私の後輩がスクーター壊して困ってた時も自動車修理工もビックリな手際でバラバラに分解して組み立て直しながら修理してたし……束か？」

「IS以外の機械関係は束さんじゃないよ？というか束さんもそれ前々から気になってただけど……。」

「やべ……ま、まあまあ！俺の事はいいじゃん！今は鳳さんの事話そうよ！ね？ね？」

「だから私は鈴でいいって……もう、本当に頑なに名字でしか呼ばないんだから。」

.....

「でさ、兄貴がすつ転んで頭が弾くんの股間に……ぶぶつ」

「ぶつ……っ……ははっあははははっ！ただボーリングしてただけで……くふつ……そ、そんな奇跡起きる？ぶはっ……私もそれ見たかったなあ。」

「所がどっこい……ここに録画した動画がございますお代官様。」

「ふふ、秋十も悪よのう……。見せて見せて！」

「やめろよ2人とも……俺の顔面であの感触味わって……うげえ……やっと忘れてきたと思っただのに……。」

「それでも手放したボールがストライクを取ってしまう当たり一夏はこういう事は運が良いものだな。」

「わかるわあ…一夏にジュース買ってもらうと結構な確率で自販機のルーレット当てるのよね。」

「お、おい！お前らそんな理由で俺をパシらせてたのかよ？」

「いいじゃんか兄貴、逆にいえば篠ノ之さんも鳳さんもいつつも兄貴にジュース奢ってたんだしさ。」

「そういう秋十は俺にジュース買わせる時何だかんだで金出さないよな。」

「あ、いやそれは…あはははっ」

「あ、もうこんな時間…みんなそろそろ帰らないと…。」

「え？もうそんな時間？」

「む…まだ話し足りないが…しかし明日も学校があるからな…。」

「そんな、俺まだ鈴と話せてないこといっぱい…。」

「無理を言うな一夏、東だつて予定を無理して空けてここまで私達を連れてきてくれたんだ。」

「そっか…：…なら途中まで見送るわ！帰り道も話はできるでしょ？」

「…鈴（鳳さん）（リンリン）…：…」「…」

「今リンリンって言ったの誰よ!？」

⋮

「はあ…今日の昼に鈴と再会して夕方にまた離れ離れ…ちよつと寂しいな…」

「気にするな一夏、顔が見たければスマホでテレビ電話でもすればいい。」

「鈴のやつ…本当は自分も寂しいだろうに私達に気を使って…ふっ…最初に会った頃に比べて成長したな…」

「千冬姉…あれ？秋十…どうかしたのか？」

「え？いや…なんか昔話に花咲かせてる内に何か忘れた気がして…。あと忘れ物した気がする。」

「忘れ物？大丈夫か？」

「スマホも財布もパスポートもあるし…グラサンは鳳さんにあげたし…。」

「『離れても友情は海を越えても変わらないぜ、鳳さん。』とか言ってたが鈴のやつ普通に『これいらなんだけど…』みたいな顔して受け取っていたな。」

「まあ忘れるような事だし…俺にとってそこまで未練はなかったもんなんだろうな。」

「とか言つてその忘れ物のせいで鈴が困ってたらどうするつもりだ…。」

「たかが忘れ物で？……電話もメールもできるんだから困るなんて事はないでしょ？」

『あんたが置いていった日本土産のヤ○ルトをパパとママが飲んだら私の目を盗んでは
所構わずおっぱじめるようになったんだけど?! どういうことよ?! 男女の営みも知らな
い乱が偶然ベランダで盛る2人を目撃して寝込んだのよ?! このアホ秋十おっ!!!』

「ごめっ！本当に忘れてた……っ……てか乱って誰？」

「心配するな鈴、原因を作った2人には私がお仕置きしておこう……とりあえず一夏、しばらく織斑家の食事は全てキノコづくしにしろ。お残しは私が許さん。」

「そんな殺生な!?!」

「秋十つて泣くほどキノコ嫌いだもんな…。」

「で、篠ノ之博士はM s. 織斑に『聖なる勇者の剣ごっこ』とやらを受けて動けない…で
すか?」

「すいません、姉が本当にすいません…。」

「うう…マスターソードの台座じゃないよう…そこは勇者の剣を封印してる岩じゃない
よう…。」

主人公を家族として大好きだから幸せになれるオリ主

「はあ……暇だ……ドイツまで来たつてのに何でホテルで缶詰めしなきゃならないんだよ。」

「しようがないだろ秋十、俺達は今くまで千冬姉の応援に来てるんだから……それにさっきSPの人が話してたじゃないか、千冬姉のモンド・グロツソ2連覇を妨害しようとしている人達がいるつてさ。」

「大事を取つて安全なホテルでSPさんに警備してもらつて……まあ分からなくはないけどよお……。」

そう文句言わないでくれよ秋十、俺だつて退屈でしようがないんだから……。

俺達2人は千冬姉が出場する第二回モンド・グロツソの応援にドイツまで来ている……去年は秋十が風邪を引いて看病で行けなかつたんだよな……。千冬姉はこの大会で優勝したら選手として引退するつて言うから来ることができて良かったぜ。

「まあ殿堂入りのDは出入り禁止のDだからね。」

「やめろよ秋十…確かにテレビで見る限り千冬姉は圧倒的だったけど、でも今回は違いかもしれないだろ？」

「あー…そういえばあのテンペスタ乗りが1番姉ちゃんに食らいついてたよなあ…まあ…今年も姉ちゃんが優勝だろ…。」

こいつ…ドイツ観光できないと分かった途端に凄いやる気無くしてやがる…折角束さんがチケツトも護衛のSPの人も泊まるホテルまで用意してくれたのに…。

「ん……………あ、兄貴…俺ちよつとユニットバスのトイレ使おうわ。」

「おう、もうすぐ会場に行く為の迎えの人が来るから早めに出せよ。」

「りよーかーい。」

「まあ俺の手にかかれば窓から出るくらい訳無いんだよな…へへっ食べ歩きと洒落こんでやるぜ。」

……

「おい、お前らわかってんだろうな？」

「は、はい！オータムさん。織斑一夏が出てきたら拉致つて例の場所まで連れていけばいいんですね？」

「そうだ、スコールがないからつて情けない所は見せられねえ、しくじつたら…わかるよな？」

「はっ！はひ！必ずやり遂げて見せます!!」

「さてと…あと20分もすりや織斑兄弟が会場に向かう…で、私らは迎えのフリをしてあのホテルの前に車を付けて織斑一夏の方だけ拉致る、簡単な話だろ？」

「あれ？兄弟2人出てくるなら何で片方しか連れていけないんですかい？」

「考えりやわかんだろ馬鹿、どっちか片方に『家族が攫われた』つて目撃証言してもらわなきゃ下手したらイタズラ電話だと思われて相手されないかもしれないだろうが。」

「あ、確かに…でも相手は見た目も声もクリソツな双子っすよね？見分け着くんですか
い？」

「ああ、スコールから織斑兄弟はグラサンを付けてる方が弟、付けてない方が兄だっ
ちやんと聞いてあるからな。」

「了解です!!」

「さてと…まだちよつと時間あるしその喫茶店でコーヒーでも飲むか。このオータム
様がお前らに奢ってやるよ。」

「あざあーっす!!」

……

「あれ？秋十の奴、トレードマークのグラサン置き忘れてる……恥ずかしくて言えなかったけど、俺もちよつとグラサンとか……こういう男のファッションってのしてみたかったんだよなあ……ちよつと付けてみよ。」

……

「あれ？オータムさん！織斑一夏がホテルでてますよ!？」

「はあ!?!試合の時間はまだ…あいつ旅行パンフレット持ってやがる!!姉の晴れ舞台すっぽかして何処行くつもりだよ!?!」

「いや、ひよつとしたら近場の観光スポットで食べ歩きするのも…。」

「おい行くぞ!」

「まだ注文したコーヒーが来てません！」
「泥水でも啜ってろや!! さっさと来い!!」

.....

「はあ？ 一夏が誘拐された？」

「はい、ですがイタズラ電話だと思えますよ？先程SPに確認を取らせましたが…。」

『え？織斑一夏くんが誘拐された？』

(ガチャツ)

『……ど、どうかしましたか？(あつぶねえ…秋十がトイレから出てきたかと思ってグラサンぶん投げちゃった…)』

『えつと…秋十くんは？』

『トイレ行ってますよ？』

『そうですか、失礼しました。』

「と、まあ2人ともホテルの部屋にいるみたいで…。」

「……………成程。」

まあ前回のモンド・グロツソでも似たようなイタズラ電話はあったからな…：それに一夏の携帯と秋十のグラサンには東お手製の発信機がついている、何かあったら真っ先に東から私へ連絡が来るはずだ。

……………でも万が一、秋十がSPの目を誤魔化して街へ出ていた場合…。

「すいませんが秋十がちゃんと部屋に居るか見てもらってもいいでしょうか？」

「わかりました。」

……………

「よかった……どこも壊れてないな……というか秋十のやつトイレ長いな……だからトイレはこまめに行けっつていつも言ってるのに……。」

「……………(スチャツ)……俺は秋十だけ！好きなのはシチューで嫌いな物はキノコ料理だぜっ！小学校の頃は一夏をお兄ちゃん千冬姉をちー姉って呼んでたのは内緒なんだぜ！……………グラサンとノースリーブ着ただけだ……思ってたよりも秋十って感じだな。まあ秋十のコスプレしてるなんて知られた日には恥ずかしくっつて」

(ガチャツ)

「あつ」

「えっと……一夏くん？」

「……………あ、秋十です。」

……………

「秋十くんもホテルの部屋に居るそうです。」

「じゃあイタズラ電話だな。」

……………

「オータムさん！全然信用して貰えないどころかブリュンヒルデ本人に『くだらないイタズラするな』って怒鳴られました!!」

「なんでだよ?」

「あの、俺…帰っていいかな?そろそろ試合始まつちやうよ。」

「うるせえ!というかお前は誘拐されてんのに家族に全く心配されてないこの状況を何とも思わねえのかよ!!」

「だってこっそり抜け出してきたから多分イタズラ電話扱いされてるの俺のせいだって予想つくし。」

「護衛されてる身で脱走嘯ましてんじやねえよ!!周りの迷惑とか考えろ!!」

.....

「もひねすもひねすー、どったのちーちゃん？へ？いつくんとあつくん？発信機の反応はちゃんとホテルの部屋に映ってるよ？…監視カメラをハッキングして様子を見て欲しい？…あつくんがなんかノリノリで踊ってるけど？あ、喉乾いたのかな…玄関のキッチンへ行っちゃった…街の監視カメラじゃ死角で見えないや…あ、いつくんがカップ麺片手に入れ違いで出てきたよ。」

.....

「イタズラ電話の相手から『もう一度確認してみろ』とか言われたから確認させたが……
やはり2人ともホテルに居るみたいだな。」

「イタズラ電話ですね、着信拒否しておきます。」

……

「あいつら本当に着信拒否しやがった!?!畜生!!」

結論から言うと秋十は救出された、結局トイレの鍵が閉まってないことに気づいた俺が慌ててSPの人に伝えてから30分くらいで千冬姉が秋十を見つけて助け出したんだ。ちなみに誘拐した組織は束さんが国連と協力して壊滅させたい、なんでも世界的なテロリストだったから天災が目をつけたのを丁度いいからって理由で束さんが見つけた所を片っ端から一斉検挙と逮捕したそうなの。

でも当時俺がグラサンノースリーブのままだったから世間的には『織斑一夏が誘拐された。』ということになった……。解せぬ。

助け出された直後に秋十は千冬姉の説教と金的のダブルパンチを喰らって失神した、帰国まで目覚めなかった秋十をホテルに置き去りにしての千冬姉と2人でのドイツ観光は凄く楽しかったなあ…。

そういえばなんで災害救助用のパスワードスーツであるISがガンダムファイトもどきしてるのかといえは…。

昔の話……

「ただいま帰りました。」

「おじやましまーす！へえ、箒の家って神社なんだ…。」

「ああ、と言つても別にこれといって何かあったりはしないが…寛いでくれ。」

「あ、箒ちゃんおかえりー…と、その子は？」

「姉さん、こちらは鳳　鈴音。少し前に転校してきた私の友達です。鈴、この人が篠ノ之束、私の姉でつい最近ニュースにちよつと出てきたISの開発者だ。」

「この人が…あの…ごめん、私そのニュース見てないと思う。」

「そっか…あはは…だよねえ…はあ…。」

「あ！ご、ごめんなさい!!」

「気にしないで……うふふ……。」

「……………姉さん、なんであんな凄い I S が世間あまり知られていないのですか？」

「純粹に……………テレビがニュースで取り上げてくれなかつたんだよ。ほら、I S って軍事利用したら大変な事になるし……そんなもの開発してるなんて大々的に広めて国際問題とか日本的には洒落にならないだろうし……そこら辺が絡んでるんじゃないかな……。まあ束さんも最終的に宇宙を飛べれば I S はできれば兵器以外の使い道で世界に知って欲しいから文句は言わないけど……………」

「姉さん滅茶苦茶元気無いな……………」

「ついでに軍事兵器になりかねないものに予算は出せないとか言われてさ……………。はあ……………めんどくさいなあ政治って……………」

「……まずい、姉さんは結構自己顕示欲が強いからこのままI Sが世の中に広まらなければ下手したら強引な手段でI Sを世界に認めさせようとしてくるぞ……。」

「強引な手段？」

「例えば世界中の核ミサイルを日本に発射してそれを撃ち落としてI Sの力を見せつけるとか……。」

「まさか、I Sを兵器として使つて欲しくないとか言つてたんだからそんな馬鹿なマツチポンプするわけないでしょ？」

「それもそうかもしれないが……。」

「なんとか世の中にI Sを…子供が笑顔になる方向で広める手段は無いものか……………」

「(私、箒に一夏に惚れた者同士仲良くしようみたいな感じで家に誘われたのよね……………な
んで小学生がこんな相談してるのかしら…)」

「……………鈴は何かアイディアとか無いだろうか？」

「え？ああ、そうね……………そうだ！こういった事ならアイツとか力になるんじゃない？」
「ん……………ああ！あいつか！」

.....

「それで、このアニメは本当に神アニメなんだよ。キャラクターはそれぞれ違いあつてタダのモブで収まらないし、子供向けなのに大人も楽しめる良さがあつてさ……。」

「ふうん……この前ロボットアニメの劇場3部作を俺に見せた時も似たような事言つてなかつたか？」

「いいからいいから……ん？電話……誰だよこんな時に……。」

『あ、もしもし秋十？私鈴だけど……ちよつといいかな？』

「今兄貴と録画したアニメ見てるから後に出来ない？」

『録画してんなら別に後で見ればいいでしょ！女の子が困ってるんだから話だけでも聞

きなさいよね!」

「えー……どうせ兄貴が唐変木が困るとかしよーもない話でしょ? 篠ノ之さん鳳さんも一々俺にそんな話題振らないでよ……。」

『違うわよ! いや違くはないけど今回は違うの!!』

「えー……どーしよつかなあゝ。」

『今度美味しい酢豚食べさせてあげるから! (一夏に食べさようと作った残り物だけど。』

「……………兄貴い!」

「おお、これゲームにいないアニメオリジナルキャラなんだな……ん? どうした秋十?」

「今中華なら何食べたい?」

「中華？ 酢豚食べ飽きたから青椒肉絲食べたいかな。」

「OK……回鍋肉定食と青椒肉絲定食、大至急ね。」

『あんた覚えてなさいよ!! 箒い！ちよつと台所貸して!!』

~~~~~

「そう、ISを世の中に広めて、好意的に認められたい……ねえ……なんで篠ノ之さんじゃなくて鳳さんが俺に相談してんの？」

「箒は今落ち込んでる束さんを慰めてるのよ。」

「そう……まあ簡単だよ、ISでアニメ作ればいいんだよ。」

「アニメ？」

「そう、I Sを題材にしたロボットアニメで知名度を上げて、『実はこのI Sは実在するロボットなんです！』って発表すれば玩具とかプラモデル作りたい会社とかが宣伝してくれるんじゃない？ 知らんけど。」

「なるほど…」

「で、ゆくゆくは世界的有名コンテンツになったI Sを実際に作るプロジェクトとか発表すれば世界中の企業とか宣伝効果を狙ってお金を寄付してくれるよ…で、完成品はお台場に…。」

「なんか別のロボットアニメで聞いた事あるんだけど…。でもI Sでアニメってどんな内容にすればいいのよ？」

「簡単だよ、戦わせればいい。」

「戦わせるっ？」

「そうそう、物語がつまらなくなるとすぐシリアス入ったり敵が現れて戦うじゃないか。」

「要は喧嘩の見物が楽しいのと同じね。でもISに戦わせるってそれこそ軍事利用を助長しないかしら?」

「レスキューファイアーみたいに悪い連中が人為的に起こした災害から人々を守る内容にすれば大丈夫だよ、どうせ誰も覚えてないから。」

「誰も覚えてないって…そんなことないわよ! オープニングとか結構好きだし…。まあありがとう! 早速箒に伝えてくるわね! あ、お皿は後で取りに戻るから!!」

「あれ? 鈴もう帰っちゃったのか…?」

「お、兄貴…アニメ面白かった?」

「ああ! 最初は子供っぽいと思ってたけど見てる内にのめり込んだよ! ……ところで秋十の言ってた事がさつき見てたアニメで聞いたような…。」

「まあ一部受け売りだからね……しかし、やっぱり星のカービイは2期も作るべきだな。」

結果からいえばI Sアニメ化計画は大成功した、1作目は特撮ヒーロー監督が手がけたI Sが悪の組織が巻き起こす災害から人々を守るアニメ『インフィニット・ストラトス』レスキューフォーエクス、そして2作目は……『機動武闘伝インフィニット・ストラトス』、内容は察して欲しい。

……1作目放送終了後に東さんと秋十が『I Sとガンダムどっちか最強か』とかめっちゃ議論してて秋十が『姉ちゃんと白騎士が相手でも東方不敗は最強だから！はい論破あ！』とか言ってたのは関係無いと思う。



「東さん……話のオチが弱いからって身体張らなくても…。」

「違うよ！誰かが東さんの自転車からサドル盗んで行ったんだよ！！ご丁寧にプラスドライバーを差し込みやがって!!……ちーちゃんの腕力でも抜けないとかどういことだよ!?!」

「はい……はい……東が……そうです……すいません、病院まで付き添ってから学校行きます……。」



# 主人公に勝ちたいし幸せになりたいオリ主

秋十が白式に新しくビームライフルとラウラの I S からアイディアを得たというどう見てもザフトのゲイツなワイヤーブレードを搭載してくれたのでその習熟の為に射撃兵装何でも来いなシャルを相手に射撃戦の特訓をしていたとき、あいつは来た……。

「よう兄貴、俺も混ぜてくれよ。」

「秋十……。」

「あ、ダーリン♡さつきぶり！」

秋十はいつものようにまた違う黒と灰色の迷彩色の I S を見に纏い俺達の前に降りてきた、いつかの無人機を思わせる脚部に鈴の I S 「甲龍」の両腕、4枚に増えたラファールの羽根、腰の辺りに八角形のミツバチの巣のようなミサイルポッドのフロア

ト・ユニットを浮かせ、両腕には外付け式のマシンガン（グフカスタムっぽいなアレ…）を装備している…秋十が乗るISにしては武装が少ないな…。

「へへ！こいつは『シュバルツァ・クリーガー』。シュバルツァ・レーゲンの格闘戦特化型だったのをジャンクパーツで近距離戦闘仕様に変更したISだ！実はラウラさんの乗るレーゲンの完成を優先して急いだあまり未完成のまま破棄予定になっちゃったコイツをドイツから貰って俺が完成させたのさ！どうだ！凄いだろ？」

「すごいよダーリン！ほぼ週一で一夏の白式の新装備か改造ISのどっちかを完成させちゃうなんて…いや本当に凄いけどドロンボーじゃあるまいしそんなメカをどうやったら短時間で作れるの？」

「あ、それ俺も気になってたんだよな。」

シャルってヤッターマンとか知ってるんだ…ああ、ロボット好きの秋十の影響か。あいつフルスクラッチでドロンボーメカ全種類作ってたなあ…その後フルスクラッチ1/144ビッグ・ザム持ってきた束さんとロボ魂のカンタムロボ持ち込んだ弾を相手に自

作の1/1000バイク戦艦のラジコンを持ち出した秋十がブンドドして遊んで棚ごと倒して全部ぶっ壊してたけど。

「そ、それは…そういう野暮な事聞くんじゃない！こいつはA I Cを普通のパイロットでも使えるように改造したA I C・E (e a s y)を両腕に2つに分けて搭載して両腕を構えることで正面からの実体系の攻撃を全て左右に逸らす事が可能なんだよ！即ち、兄貴の必殺の剣はコイツには当たらないってわけだなあ…へへっ、射撃素人の兄貴がビームライフル持った所でそうそう当たらねえし、もう俺には勝てないって事だ！」

「お前(ダーリン)もバカスカ撃たないと当たらないじゃん。」

「ちや、ちゃんと狙撃系の武装は当ててたんですけお！使い分け…してたんですけおお!!」

そう言って秋十は拳を振り上げ……コンソールにそつと人差し指を当てた。

『織斑秋十 が 模擬戦 を申し込みました。』

とりあえず俺は『はい』を選んだ。

「そんな……嘘……。」

「ぐ……秋十……強くなつたな、いや勝ててないだけで元々秋十強いけど……。」

「はははは！鈍い！鈍いぜ兄貴い！まるで止まつてるみたいだ……なあ!!」

流れは完全に秋十の物となっていた。白式の放つビームライフルを秋十は機体全身の各所に配置されたスラストを巧みに操りまるで短距離の瞬間移動を繰り返すように避けていき、すれ違い様に両腕のマシニングを浴びせていく、俺が少しでも動きを止めようものならバズーカを展開して数発放つ、1発は直撃コース：比較的弾速の遅いそれはISのハイパーセンサーと白式の少ない強みであるスピードで避ける事はできる、だが流星は兄弟といった所なのか秋十は必ず初撃以外は俺が避ける方向を予測して撃つてくる、なんとか反対の手に持った雪片で切り落とすか運良く避けてはいるが回数を重ねる後に追撃の射撃精度が上がっていく…。さらにこちらが追いかければミサイルをばら撒くように発射しては俺から1番近いミサイルをマシニングで撃ち抜く事で爆風を当ててくる、オマケにその爆風に当てられ他のミサイルも連鎖的に誘爆しては直撃を諦め確実にダメージだけを喰らわせてくる。

…何かがおかしい、別に秋十は弱くなんかない。多分だけど同じ機体を乗り続けられウラとシャルに追いつける程の勝利を重ねるくらいはできると思ってる…：まあそれを絶対にしないから勝ててないんだけど、それを踏まえても俺の行動を先読みして予測射撃、必要最低限の動きで攻撃を回避、バラバラに放ったミサイルをどのタイミングで爆破すれば俺に高いダメージを与えられるのかを瞬時に計算…：普段の秋十に比べて、正確すぎる、この感じ…：まるであの無人機を相手に戦ったような感覚を思い出す。

思考に気を取られた俺は相手のミサイルとマシンガンの波状攻撃に飲まれた。

結果から言えば秋十は逮捕された。

秋十のIS、シユバルツァ・クリーガーには「AIがISコアの演算能力を利用し勝利に必要な行動を予測、コアネットワークを通してパイロットの脳へ最も成功率の高い選択肢を命令してISを操作させる。」…パイロットをコントローラーにしてAIが動かすという機能が備わっていたのだ。これが「モンド・グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行する」というVTシステムの一種では無いかと疑われて秋十は千冬姉率いる教員部隊に拘束されたのだ。

VTシステムでは無いことは証明されたそうだがどのみちパイロットを消耗品扱いするようなAIが組み込まれた機体は悪用されたら洒落にならないので東さん立ち会いの元でISコアを抜き取った後で機体は溶鉱炉に溶かされたい。



職員室で生徒会長と千冬姉の前で泣き土下座して許しを乞う秋十とI S委員会の偉い人がいたから多分秋十は2, 3日したら戻ってくるんだろな。

「まさか逮捕されるとは……ただVTシステムのメカニズムを調べて自分なりにオリジナルH A D E Sシステム作っただけなのに……」

「寧ろなんでそんなもの作って許されると思つてたのダーリン……あ、着いたよ。」

私は今ダーリンと一緒にIS学園から最寄りのショッピングモールに来てる。林間学校は海のすぐ側で海水浴ができるらしいから水着を買いに行く……つてダーリンが言つてた。

彼は織斑秋十、私の恋人で世界初のISの男性操縦者の片割れでもある。ダーリンはパイロットとしても中々の実力を持つていてしかも廃棄するIS部品から使えるパーツを抜き取つてはそれを組み立てて新品同然のISを作つちやう凄腕メカニックでもある、1人でそんな芸当できるわけないと思つてたけどk o g e k k o っていう丸いボールに腕が三本等間隔に生えたロボットを組み立て分解作業員として働かせているのを見たから多分何体か構想を思い浮かんでそれをロボットの数に任せた人海戦術で同時に作つて少しずつ小出ししてるんじゃないかな。

ちなみにダーリンは男の人の格好をした女の人が好きみたいで二人っきりの時にちよくちよく私にシャルルの格好をさせてくるんだよね…理由を聞いたら『俺の性癖が歪んだのはどう考えてもハニーのせいだよ』って力説されたけど、私、なにかしたかな……？

「ねえダーリン、時間少しあるし水着買う前に…デート、楽しみたいな？」

「もちろんだよハニー！今日は初デート記念日だね♡」

「うん！それじゃあまずは服を見に行きたいな♪」

「わかった！女性向けの服は……。」

「見に行くのはダーリン用の服だよ？」

「えっ……。」

「ごめんねダーリン、でもグラスサンノースリーブは無いと思うんだ。」

「これはどうかかな？」

「名ばかりフリーダムで全然自由な人生送れてない赤髪の女性にトラウマありそうな服だね…そんなベルトいっぱい着いた服何処で見つけたの？」

「これならどうだ！」

「ジャスティス名乗ってる割にはコロコロと裏切って出戻りしてるような服だね…あとそのグラサンいつものよりダサイと思う。」

「ハニー辛辣……。」

「これは……。」

「……………」

「シャルロット・デユノアは何も答えてくれない……。」

だって16歳になってタンクトップに短パンはコメントすら出ないよ…。

「これならダーリンもオシャレボーイだよ！」

「おお、なんか凄いオシャレボーイな服だ！さすがハニー！いよ！愛の国フランス！」

「えへへ、褒めてもちゅーしかしないよダーリン♪」

「くっ…人類の半分が死滅しそうなイチャつきをして…!」

「落ち着くのはよ鈴、あれはただイチャついてるだけ。なんか腹立つからってISを展開して壁を殴るのは一番しちゃいけない行為よ…。」

「私はクラリツサの勧めでげえむせんたあに行こうとしてただけなのに何で君達と共にスネークっごっこしなくてはならないんだ…。」



「やはり相手に気づいてもらうまで待つより自分から素直に言う方が…だが、一夏に言ってもどうせ遊びに行く約束と思われるだけだ…。」

「ぐぬぬ…私なんのであの時否定しちゃったのよ…認めていれば今頃一夏と…。」

「お！ラウラ、こんな所で何してるんだ？」

「ああ一夏、何か彼女達に捕まっちゃってな。」

「あれ、箒に鈴にセシリア…3人とも壁に隠れながら何を覗いてるんだ？」

「…：…（IS学園の）有名人が彼女連れてデートしてるらしいぞ。」

「へえー…あの3人も芸能人の追っかけとかするんだな…。」

「邪魔しては悪いから…どうだ一夏、ジュース奢りを賭けてげえむせんたあで一勝負しないか？まあ私は初心者だが。」

「いいなそれ、なら秋十が最近ハマってる戦場の絆？ってゲームやろうぜ！それなら俺も初心者だし。」

「うむ、今は私も同じ学園生、手加減はしないからな？」

「おう！望むところだ！」

「あれ？ラウラは…？」

「ん？そう言えば見かけないな…ってセシリア、何を指さして固まつ…ああ！一夏!?!ぬ、抜け駆けだと…!?!」

「ラウラの場合は友達と遊ぶ感覚だろう。」

「そうだった、ラウラは特に一夏とそんな関係でも…って千冬さん織斑先生!」

「カップルの尻を追いかけるほど暇なんだろう? 私と水着でも買いに行こうじゃないかなあに生徒と教師のスキンシップってやつだ。」

「ああ!ちよ…ま…い、一夏が!ああ!力強つ…。」

「ああ!いけません織斑先生!いけません!んおお!逝く!逝くつ!!鳳 鈴音!!16歳!大衆の前で鬼教官にネックハングキメラれながら気絶するわよ!?!見てなさいよ!!フツフツフツ!!(過呼吸)」

さつきからチラチラ見てるのに気づいてたけどなんかハチャメチャしてるなあ……。あとなんで見てもらう必要があるんだろう。

「いやあ、まさか山田先生がいたなんて…。今日は千冬ねe織斑先生と一緒にじゃないんですね。」

「なんか用事があつたみたいで…。」

「へえ…千冬姉が買い物誘つて来たからてつきり山田先生も誘つてるかと…。」

「そうなんですか？あれ？じゃあ織斑くん先輩と一緒になんじゃ…。」

「いや、今日は男友達と遊ぶ約束してて…あはは…あ、ラウラは偶然…。」

「弾くん！そんな動きでは私のダンス☆レボリユーションは止められんぞ!!」

「この幼女ダンレボめちやくちや上手え!! さっきのメガネ巨乳先生といい一夏の知り合いはみんなゲーム達人過ぎだろ!？」



その日の夜。

「秋十にVTシステムのデータを送ったらしいな……今日は機嫌が悪いから人間ペツト  
ボトルロケットの刑にしてやる。」

「ちよつと待って!?! 高圧洗浄機は死んじやうから!?!」

## 主人公に勝つ為に幸せを目指すオリ主

少し前…。

「織斑秋十です！その初期アバターの双子の弟です！趣味はフルスクラッチでプラモ制作！特技は…教えてもらえば何でも覚えるぜ！目標は打倒兄貴と姉ちゃん!!…そうそう兄貴と違ってグラサンとこの真つ赤なノースリーブ制服がトレードマークなんで…そこんとこよろしく！あと俺の事は兄貴と区別つくように『織斑「秋」十』でオリアキって呼んでください！以上！NEXT織斑ズヒント兄貴！」

「え？お、おう！…織斑一夏です！趣味は料理！特技は家事全般！えつと…ISに関しては完全に初心者なので皆と一緒に学んでいけたらいいなと思います！」

「はい、自己紹介ありがとうございます織斑くん。」

ふう…秋十のおかげで無事に自己紹介できた…。ところでなんで他の皆は山田先生



来た時に挨拶返さなかったんだ？秋十が『いいか兄貴、IS学園は元女子高なんだから第一印象は大切だからな？挨拶もできない奴なんて思われたら皆に嫌われちゃうかもしれないぜ？』って言ってたから小学校の頃を思い出すつもりで先生に挨拶返したら俺と秋十と箒だけしか言わなかったし。

……

『みなさん、おはようございます。』

『『『『『……』』』』』』

『え、えつて』

『おはようございます!!(秋十の言う通り挨拶は大事だな!)』

『おつ、おはようございます!!(みんなダンマリするから出遅れちゃった…)』

『ん…？し、しまった！緊張してて聞いてなかった!!』

『お、おはようございます!!（一夏と秋十に挨拶できない奴と思われてたまるか!）』

…

なんかタイミングずれてたけど…。まあ気にする事じゃないか。

しかし本当に秋十には頭が上がらないな：HR前の空き時間に自己紹介考えてなかったって言ったなら『とりあえずこれに名前と特技と趣味とクラスの皆に一言書いて、絶対役に立つから。』ってメモ帳貸してくれたし。後は書いた内容読み上げるだけで無難に自己紹介できたぜ。

「一夏、ちよつといいか?」

「お、箒。どうしたんだ?」

「篠ノ之さんが感動の再会を祝してちゅーしたいってさ。」

「えっ!？」

「そんな事一言も言っていない!! だいたい中学卒業して再会と呼べる程日も経っていないだろう…。なんなら先週の日曜日に一夏とは会っている。」

「ああ、束さんからISの専用機?…の話と一緒に聞いたな。」

護身用にISくれるって話だったな…俺も箒も束さんの身内って理由で受け取るのは他の生徒の人に悪いからって辞退したら束さんが泣きそうな顔するから勢いに押されて領いちゃったなあ…箒は最後まで頑なに『篠ノ之束の妹という立場に胡座をかくつもりはありません。欲しければ日本代表候補生にでもなります。』って言い切ってたけど。

「…え?俺聞いてないんだけど?」

「そりゃ秋十は『用事がある』って言って元々いなかったじゃないか。」

「ねえねえ!おりむーとしののんはどんな関係なの?」

「お、おりむー？」

「うん！織斑くんだからおりむー！」

いつの間にか俺と秋十の間を挟むように女子がぴよこんと顔を出してきた…袖が長いなこの子…。

「しののん…私のことか（アダ名か…中学の時はクラスメイトに『ホッキー』と呼ばれていたな…。）」

「ああ、箒は幼馴染だよ、中学の時まで一緒だったんだ。」

「そうなんだ…ひよつとして恋人だったり？」

「ひえ!?わ、わわわわわ、私は、そ、そんな…!!」

「無い無い、ただの幼馴染。」

箒は可愛いし家事もできて面倒見いいから、良いお嫁さんにはなるなあと思うけど……。

しかし本当に袖が長いこの子…。

「じゃああつきーと…?」

「いやでも、私は別に嫌では…って！こんなノースリーブと付き合うわけないだろう!!」

「箒（しののん） 辛辣……。」

「……………」

ん？いつもなら秋十が何かしら… 『なんだと!? やーい！お前の姉ちゃんストロングゼ口中毒!!』とか言いそうなのに… っってアレ？秋十の奴、よく見たら袖の長い… えつと… 名前聞いてないや… 袖の長いのほほんとしてそうな子をじつと見てるような…。

なんでこんな袖が長いんだ…?

「キャラが…被ってる…っ！」

「ほえ!？」

「はあ?」

何言ってるんだコイツ…。

「いやいや!ほら!制服の袖改造してるじゃん!袖改造キャラ被ってるよ!!」

「ええー!?! いやいや! あつきーはノースリーブで私のは萌え袖だよ!!」

「萌え袖つてレベルでいいのかその長さ…なんかナイフとか隠せそうなんだが…。」

「そんなの仕込んでないよ! あ、でも中にプリッツは入ってるよ? しののん食べる?」

袋じゃなくてプリッツ一本袖から出してきた…よく折れないな。

でもプリッツを隠すのにその袖の長さは必要なのか…?

「いや! それでも袖が他の人と違うって時点でキャラ被ってるよ!!」

「マスコットの癒し系とチンピラルックを一緒にするんじゃない。」

「私マスコット!?!」

言われてみたらなんかデフォルメのキャラグッズ作ったら売れそうだなこの子…袖の長さとか表情豊かな所とか箒の言う通りマスコットっぽいかもしれない。

「お、俺がチンピラ!?どこら辺がだよ!オイ!こらア!イテマウドコラア!」

「全体的にチンピラじゃねえか!!ノリがいいな秋十!!」

「何を騒いでいるんだ!全員席に着け!」

「グラサンノースリーブはオシヤレだろうに…。」

「結局一夏に本題を話せなかった…。」

「(そういえばさつきからオルコツトさん…セツシーがこつちチラチラ見てたけど何だろ?)」



「つなんだこの夢っ!?!」

「うわびびっくりした!?!どうしたのダーリン…。」

「いや、1回しかセリフが出てこないイギリス人の夢を……。」

「セリフ？イギリス人？…映画の夢でも見てたの？」

もう、バスに乗った途端に寝ちゃって…寝て5分位で飛び起きたけど。

今僕は臨海学校でバスで海の近くの旅館に向かってる。で、走行中のバスの中で……。

「♪～！♪～～!!♪」

「織斑先生08小队とか知ってるんだ…。」

「しかも歌い方が遠藤正〇カバー…。」

絶賛カラオケ大会中…織斑先生意外とノリノリ過ぎる…。さつきは一夏が『めぐりあい宇宙』歌ってたし…箒は『哀・戦士』…秋十がガンダム布教したのは予想着くけど…。僕もガンダムとか見た方がいいのかな…。

「ふう…採点機能はないのか…。」

「織斑先生ありがとうございます！次は…ボーデヴィツヒさん！曲は『マジンガーZ (Infinity. ver)』です！」

うん、絶対秋十が吹き込んだよね。

「セシリアがGONG歌ったって本当!？」

「ああ、コブシが効いてたぜ!なあ秋十!」

「オルコットさんがあんまりにもノリノリで歌いきるからトリに回された俺が凄いプレッシャーだったよ…。」

「そんなこと言って…ノリノリでエヴァンゲリオンのOP歌ってたじゃん、しかも水樹奈々の声真似で。」

「ガンダム以外知らない秋十がスパロボ布教してないわよね?」

「鳳さんの方はカラオケ大会とかしなかったの?」

「私のクラスのバスは〇ラえもんの夢幻三銃士の上映会してたわよ、バスのモニター

で。」

「それ帰りのバスでやる事なんじゃねえかな…。」

そんなこんなで俺と秋十は旅館の部屋に案内されて…部屋割りはてつきり俺と秋十で同室だと思っただけ…。

「織斑は私と同室、織秋は山田先生と同じ部屋…なんだが…。」

「絶っつ対に嫌です!!マイビューティラブリイエンジェルプリンセスハニーシャルロット以外の女性と同室なんて嫌です!」

「ガンブラどころか呼び方まで盛るのか……。文句を言うな、私と同じ部屋にしなかっただけ満足しろ。」

「そ、そんなに私と一緒に嫌ですか……？」

恋人を大切にするのはいい事だけど、秋十……そんな廊下をゴロゴロ寝転がって往復しながら駄々こねるのはお兄ちゃん見るに耐えないんだけど。あと山田先生が泣きそうな顔してるからやめてやれよ……。

結果からいえば秋十は折れた。千冬姉がコデユノアの部屋から見つかったこれは何だ

ろうな？ん？」と0.03ミリを取り出したのだ。

使用済みをストックの内ポケットに入れて持ち歩くのはどうかと思います、織斑先生。



「ったく、人の部屋のゴミ箱漁るとか有り得ねえよ…もう…。」

「学生の分際で元女子校の寮室でやる事やってる方が有り得ねえと思うけどなあ…とこ  
ろで…あれ、いいのか? 『抜いてください』とか書いてあったけど。」

「東さんがこんな所に来るわけないから誰かのイタズラだよ。」

「いやそうじゃなくてさ…地面から生えてた東さんのウサ耳に千冬姉と山田先生の I S  
スーツ姿の写真貼り付けてたけどバレたら秋十ぶちのめされるぞ?」

「でもウサ耳単体はちよつと抜けないし…。」

「お兄ちゃん思うには物理的な意味だと思っただけだなあ……。」

「美味しいっ。」

「このタレがいいよね。」

「織斑くんが作った特製タレだっ！」

「そうなんだあ…織斑くんは女子力で負ける私達って…。」

「……………」。

「さあさあ！どんどん食べて！こんなことできるのはIS学園臨海学校だけだよ！」

「おりむーのタレも美味しいけどあつきー特製ハチミツ漬けのお肉もおいしいよー!!」

「熱っ…おい秋十お！何故私まで肉を焼かなくては…熱うっ！水着だから油が！油がモロっっ!!」

最初の一日は自由時間な為、俺達は海に出た…ただ秋十はカナヅチだから浜辺で勝手にBBQしてはみんなに焼いた肉を振舞ってるけど。

ちなみに他のメンバーは箸は最初何処にも見当たらなかったんだけどいつの間にか秋十の手伝いをして鈴は泳いでる最中に足をつってセシリアに連れていかれてシャルはクラスの友達とビーチバレー…で、ラウラは…。

「ヒヤツツツホオオオオオオオオオ!!! エンツツツトリイイイイイ!!!」

「すごいラウラさん!?! 逆立ちのまま後ろ向きに波を滑ってる!!」

「今度は180°。方向転換しながら波を飛び越え…別の波に乗り込んだ!?! あれってサー

フィン得意ってレベルでいいの!？」

何処ぞのゼーゴックみたいな変態軌道かましながらサーフィンに勤しんでる。

……この軍人俺の護衛として転入した割にはエンジョイし過ぎてないか？

「ねえダーリン!一夏!こっちで一緒にビーチバレーやろう!」

「あ、ハニー♡!今行っきまーす♡♡!!」

「おう!混ぜてくれよ!!」

(デュノアさんナイス!!)

(シャルさんのおかげで珍しくノーマークの織斑くと距離を縮められるチャンス!!)

まあみんな楽しそうだしいいか！

「おい?!秋十!!私を置いてくな!」

明日私にISを渡すとか言ってた姉さんとは旅館に着くまでLINEしてたのに何故か浜辺に来てから連絡が取れなくなっただし、私のような実力の伴わない者がただ開発者の妹というだけで専用機を受け取るのは間違っているんじゃないかと皆から離れた岩場で一人悩んでたらいきなり秋十と布仏に両手両足を持ち上げられて担架みたいに強制連行されて砂浜で牛角メニューばかり焼かされて……私は何か悪い事でもしたのか!?!そりや入学初日に同室とは知らずに部屋に入ってきた一夏には……裸を見られてついピンタしてしまったのは……本当に悪かったと思ってるのだが仲直りはした筈だ!鈴とは一夏を巡って時々くだらない争いはするがあれは私達なりの友情あつての行動だ……セシリアとは紅茶と緑茶の淹れ方を互いに教え合う仲……ラウラは私にとってはIS

のイロハを説いてくれた師匠だと尊敬している……シャルロットは……そういえばISSで訓練する時はあんまり接点が無いな……。クラスを中心とまで言わんが昼食を共にする友達だっている……私はこんな目に遭うような事何もしないぞ!?

「しののん!次厚切りカルビ食べたい!」

「なら私はここら辺でホルモンいきたいっ!」

「ソーセージ追加お願いしますーす!」

「おい!学年生徒の3分の1を私一人で捌けっ言うのか!?戻ってこオオおい??!!」

「あ、あの……私も、手伝う。」

「お前は……確か四組で一夏に白式の整備を教えた……」



「織秋くん、本当デユノアさんの事となると周りが見えないんだね……篠ノ之さん、ほら焼き立てのお肉取り分けたからこれ食べて、その間交代するよ?」

「た、鷹月……!」

「私も食べて満足したから焼くの手伝うね!」

「織秋くんと篠ノ之さんばかりやらせても不公平だもんね、ほら! 篠ノ之さん何食べた  
い?」

「私ももう少し食べたらず伝うよお……あ、そうだ! しののんラムネ飲む?」

「み、みんな……!」

父さん、母さん……私は友達に恵まれて幸せです!!

でも秋十は絶対許さん。



「あの…ちーちゃん、なんで東さんはごめん寝のポーズで縛られてるのでしょうか…？」

「旅館の中庭に私の写真を置いて又いてくださいとはお前も随分タチの悪いイタズラをするようになったな…。」

「ち、ちーちゃん？なんの話？いや（ウサ耳を引っこ）抜いてくださいの看板を立てたのは東さんだけど…いや！あれはいつくんとあつくんに向けたちよつとしたイタズラで抜くと東さんg」

「又くとお前が2人にナニをするつもりだったんだ？ん？（おこ）」

「ねえ!?そのロアナプラ育ちみたいなのドスの効いた声おこつてレベルじゃなくない!?」

「よし、折角の夏だ…スイカ割りならぬモモ割りでもするのでしょうか…。」

「またなの!?医療ナノマシンも万能じゃないんだよ!?失われた物はもう二度と取り戻せないんだよ!」

「心配するな、形ある物はいずれ壊れるものだ。」

「ねえ！スイカ割りの真似ごとならせめて目隠ししようよ!?東さんの後ろでビリヤード

の構えしないでよ!?! ねえ!?!」

「せーのっ。」

あっ

主人公に負けたくないから多芸になったオリ主

「尻入られて〜、いるんだあ♪長過ぎい♪なモノを♪」

「人は〜♪挿入れるモノを♪選べない…ものさあ♪」

「尻入られて〜♪いるんだ♪太すぎい♪なモノを♪」

「穴もお弱いままではあ〜♪いられないさあ♪この性癖（タチ）い♪」

「嗚呼〜♪だけどお♪こんなあ…ガバ穴でもお♪」

「掘らりたい〜♪」「ほらりたい〜♪」

「猥褻な♪」「わいせえつなあ♪」

「所がある……あるう〜んだあ〜♪」

「のっけから喧嘩売ってんのか!?!この野郎!!」

「姉さん落ち着いて!?!秋十が白目剥いてますから!!!あとギターは人を便器にホールイン



ワンする物じゃないですから!？」

「あつきーのギターがポツキリ折れてる……。。」

「綺麗にすつ飛んだな。」

「千冬姉、あれは人を煽った秋十と暴力に訴えた東さん、どつちを注意したらいいんだろ……。。」

「知るかそんなもん。」

はろはろー！みんな大好き東さんだよお！え？なんで東さんがこんな所にいるかって？それはね……………。

昨日の夜…

「うーん、美味しい！もう一杯!!」

「これがジャパニーズA・S・A・R I☆ミソスープ…ふむ、最初は変な匂いと思っていた

が……磯の香り……食欲が掻き立てられるな……味噌の濃いめの味が中々……」

「しかしオルコットさんも馬鹿だなあ、脚が痺れて辛いなら最初からテーブル席にすればいいのに……。」

「さつきからチラチラ一夏を見ているが……ふふつ、兄と一緒に食事が取れなくて拗ねているのだろうか？ 秋十。」

「そ、そんな事ないし！ 俺にはハニーがいるもん、ね？ ハニー♡」

「素直じゃないなあダーリンは……そんな所も好きだけどね♪」

「疑惑は深まったな。」

「もう……ハニーまで……あむ……うん、やっぱり刺身にはおろしたての本ワサが一番、このツンとしてても爽やかな後味がなんとも……。」

「織秋くん食レポ始めてる……。」

「素直に慣れない系ブラコン……ぶっちゃけすこ……。」

「あつきーは芸達者だねえ……あむ、んー！茶碗蒸しすつごく美味しい!!」

「……………ねえダーリン？本ワサって？」

「ん？……………ああ、この抹茶クリームだよ……つ……ふふ……。」

「抹茶クリーム!?生魚にクリームが合うの!?!」

「学園の売店にも生クリームとイチゴの入ったサンドイッチとかあるし生クリームに生魚も合うのではないか？」

「いやラウラ……パンにクリームはともかく生魚とクリームは……。」

「物は試しだ、食べてみればいいじゃないか。」

「そうだよハニー、ほら刺身につけて……あっ!? そんな全部一気に口に入れたら……!」

「秋十のやつ…一体何したんだ？」

「さあな…だがあの右フック…デユノアもなかなかいいモノを持っているな。」

「隣がうるさいから様子を見に来たけど…セシリアが床で悶絶してるしシャルは一心不乱にお茶をガブ飲みしてるし秋十は白目剥いて千冬さんに運び出されてるし…一体何やらかしたのよあいつは…。」

「ちよつとからかうつもりだったのに酷い目にあつた…。」

「秋十、お兄ちゃん的にあれはお前が悪いと思うよ?」

「そうだけど……しかし風呂に入ると本当にどつちがどつちなのかわかんねえなこれ。」

「確かに……身長とか顔付きならともかく、ここの大きs

ごめんちよつと遡り過ぎた……今のは束さんが悪かったから……ち、ちーちゃん……すいません! 本当にすいません! 見てないから! 見てないから!! 双子の1寸違わぬ15cmなんて見てn……やめて!?! こんな人前でスカート降り降ろそうとしないで!?! 箒ちゃんは何真顔で法螺貝なんか持ち出してんの!?!

「うう…まだ寝たりない…。」

「ボーデヴィツヒさん昨日は皆と夢中でスマブラしてたもんね…まさか本音がSwitch持ち込んでるとは思わなかったけど…。」

「せつしーが部屋出る時にたまたま通りかかったラウラウに見つかった時は焦ったけど、まさか同じ部屋の子呼んで混ざりに来るとは思わなかったなあ。」

「いやあ…あはは、夜中に集まってワイワイはしゃぐなんて軍隊の訓練をしていた時はできなかつたからな…つい夢中になってしまった。」

「それはそれとして全員ボーデヴィツヒさんに最低4回はボコボコにされたけど…明らか



かに初めてゲームするって腕前じゃ無かったよね？」

「うえっ!? あ、いや…あははは…。」

「そう言えばラウラウ、私に負けかけた時に『ええい!! まだだ! まだ終わらんよ!!』とか言いながら眼帯外してたけど、綺麗なオッドアイだったねえ。」

「そ、そそそそそそう褒めても何もでないぞ? ほ、ほら! 早く朝ご飯食べないと遅刻してしまうぞ?! ほら! な? な?。」

「何焦ってるのボーデヴィツヒさん?。」

『ニュース速報をお知らせします。昨日未明、ハワイ沖にてアメリカ、イスラエルが極秘に開発していた違法 I S が内部告発によつて発覚し I S 委員会特別顧問の篠ノ之東博士が I S 委員会所属の治安維持部隊による強制捜査を行った事が先程明らかになりました、現在わかっている情報によりますと告発したのは I S パイロットであり…「自身の I S が条約違反の軍用として改造されている。」と I S 委員会へ報告し、それが今回

の強制捜査へと繋がった模様です、反ISを掲げ国内でISに代わるパワードスーツの開発をマニフェストに掲げていることで有名なロナルド・クランプ大統領はこの一件に關して関与を否定しており「IS委員会の捜査に協力を惜しまない、あと国境沿いの壁をもう一枚増やす事をここに宣言する。」とツツタカターにて発表しました。』

「ハワイ沖?ここから近い距離でもないが…。ISの速度なら…。」

「一応簪に聞いてみたけど軍用IS自体はもう束さんが押さえたから事件に巻き込まれる心配はないってさ。」

「ん?何故そこに簪…?という奴が関わってくるのだ?」

「え?あつ…え、えつと…ほら!簪は日本の代表候補生だろ?そういった話を日本政府から聞いてないかなあ…なんて…あははは。」

「なるほど…しかし姉さんと連絡がつかなかったのはそういった理由だったのか…。」

本当は私的な事情で連絡取れなかっただけで日本からハワイ沖に急いでトンボ帰りしたんだよね。

で、無事ISをその場で競技用に作り直して…まあ不要な物をとっぱらって東さんお手製リミッター付けたただけだね。…それでそのの試運転ついでにアメリカのパイロットさんと一緒にここまで来たってわけなんだよね…

「以上！説明おわりっ！」

「閉廷！解散っ!!」

「おつかれ〜。」

「山田先生、この後どうです？」

「いいですねー！私良いお店新しく見つけたんですよ…あ、でも織秋くんは未成年だから行けませんね♪」

「ちえー、フラれちゃつて」

「勝手に解散させるな！！全く、便器から出てきたと思ったら…。」

「ダーリン、とりあえず海の家シャワールームで洗ってきてね。」

「はーい。」

秋十が便器に突っ込んだ頭を綺麗に洗い直して戻ってくると織斑先生の指示で私達生徒は先生達と乱入者：姉さんとアメリカ軍の2人の前に整列する。やっと授業が始まるな……。

「……人参ロケットがいきなり海に突っ込んで水没したり、脱出するのに手一杯で力尽きて溺れかけてたアメリカ軍人とポンコツ天災を何故か置いてあつた足漕ぎアヒルボートで救助したり、ウサ耳女に心臓マッサージして途中でいきなり愚弟がギター取り出してのんびり娘と歌い出したりと色々あつたが：改めて臨海学校の授業をこれから始める！」

「「「「よろしくお願いします!!」」」」

「勝手にボタン触っちゃダメってあれ程言ったよね？アメリカ軍はそんな事も教えてくれないのかな？」

「ご、ごめんなさい……でも明らかに1人乗りのアレに私たち2人が無理矢理入ったらスイッチがお尻に当たって押ししてしまっても無理は無いんじゃないかと……。」

「何？2人して土左衛門になりかけたのは東さんのせいとでm」

「いい加減にしろ!!ほら、自己紹介でもしろ!!」

「はい……みなさんちやおーっ♪有名人篠ノ之東です！仏頂面なのはちーちゃんだけで充分だからみんな東さんにはフレンドリーに接してくれてOKだよ！まあ社会的常識もわからない子はノーサンキュー!!」

「初めまして、アメリカ軍所属のナターシャ・ファイルスです。知ってる人もいるかもしれませんが今朝のニュースで話題になっていたISのパイロット、今日は篠ノ之博士が違法改造されていた私の専用機を直してくれたのでその試運転と……成り行きでみなさんの1日講師をさせていただきます。」

「と、言うわけで専用機持ちは私と東と共に着いてこい。他の者は山田くんら担任の教

師とファイルスからしつかり学ぶように！」

「…と、言うわけでこれが箒ちゃんの専用機の『紅椿』です!!」

「早くない!?!もつとこう…そんなポケットから小銭出すみたいなのリリじゃなくて…空から降ってくるのかないの?」

「何を言ってるんだ秋十、そんなことして万が一にも誰かに当たったり砂浜の砂が飛び

散って目に入ってしまったりしたら大変ではないか。」

「そうだよあつくん、いくら東さんでも分かりきったような事故を起こす真似はしないよ。」

「ああ、うん……そりやそうだよね……。」

急に叫んでどうしたと言うんだ秋十は……しかしこれが私のIS、紅椿か。見ての通り真つ赤なカラーリング……武装はブレードが2本だけか……ラウラやセシリアに銃の扱いを教わったから使ってみたくもあつたのだが……いやいや！姉さんが私の為に作ったISだ！それに文句を言うなど……私はまだ未熟者、贅沢な事を言っただけでどうする!!恥をしれ篠ノ之箒!!……よし、反省した。使う事がなくとも銃の特性を知っていればそれは戦いの役に立つ筈だ、学んだ物は何一つ無駄になってない。この紅椿に……私に期待して専用機を渡してくれた姉さんに恥じぬようより一層の鍛錬を積み強くならなければ……!

「というわけで……この紅椿は初期武装のレーザー発射可能なブレード2本以外にもビー



ム兵器が効かない相手に備えて他の武装を2, 3丁積める程度の拡張領域があつて打鉄やラファールとかの装備は大体使えるようにOSを組んであるから武装は箒ちやんが扱いやすいように好きなのを……箒ちやん聞いてる?」

「うえっ!? あ!! す、すいません!! 切腹します!!」

「なんで?! 別にいいよ?! 専用機貰つて浮かれてるのか気を引き締めてるのか分からないけど上の空だった程度で怒らないから!!」

「すいません……武装の説明をもう一度お願いします。」

初っ端から躓いた……情けない。

「このブレードだね、これがそれぞれ雨月と空裂、紅椿の主力武装で雨月は刺突攻撃の際にレーザーを出して空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出することができるんだよ! 凄いでしょ?」

姉さんは紅椿に振れると二振りの刀を足元に展開させ拾い上げながら説明する、これが紅椿の…私の剣…。

「カツコイイなこれ……。鞆のデザインも合わさって篠ノ之さん専用って感じだね。」

「えへへそうでしょう？ 箒ちゃんの体格やISの稼動データから計算して箒ちゃんが一番使いやすいサイズと重量を割り出して作ったんだよ！」

秋十がそう言って私が手に取った物とは別のブレードを姉さんから受け取っては鞆から引き抜いて空へ掲げる。

「篠ノ之さん、そつちも見せて貰っていい？」

「ああ、構わないぞ。」

「ほ、箒…俺もいいかな？」

「ならこつちを…。」

「箒！私も持つてみてもいいかしら？」

「甲龍の双天牙月に比べれば軽すぎるかもしれないが…鈴なら使いこなしてしまえばいいかな。」

「ふふつ、刀に関しては箒には負けるわよ。」

「へえ……鈴、そっち見せてくれよ。」

「いいわよ、ねえ秋十。そっちの私に見せてよ？」

「うん、構わないよ鳳さ……ん？」

「どうしたのあつくん？」

「どころでさ……これ…どっちが雨月でどっちが空裂なの？」

「えっ?」

えっ……………あれ? そう言われてみたら……………これ、見た目がほとんど同じだな……………。

「何言ってるの……………それは……………それは……………えーつと……………」

一夏と鈴からブレードを受け取った姉さんがそれぞれを見比べ……………クルリと後ろを向いてからゴソゴソ何かしてからまた私達の方へ振り返る

「こっちが雨月で、こっちが空裂だよ!」

ブレードの柄にはガムテープが貼られ、めちやくちや急いで書いたのか墨汁を直接零して書いたような「あまつき」「からわれ」の字がマジックで書き込まれていた。  
……………本当に情けない。





「ごめん……本当にごめん……東さん……。」

「ぐお……っ……ぬふっ……お、覚えてろよ……グラサン野郎……おまつ……お前っ……東さんの……本当にお前っ……。」

「まさか秋十が『見分けつかねえのかよ!』って漫才みたいにつっこみ入れたら東さんがバランス崩して尻餅着いて……。」

「紅椿の爪先の出っ張りにズブっといくとはな……今回は本当に同情するよ、東。」

# 要らない設定を書かれても幸せになつてたオリ主

IS委員会へ織斑秋十に纏わる報告書

作成：

技術試験部門 織斑秋十 専属担当管理官 ルーコス平野

名前：

織斑秋十

所属：

IS委員会、IS学園及び同学園ジャズバンド部

役職：

IS委員会技術試験部門↓所長代理補佐心得

IS学園↓一般生徒

IS学園ジャズバンド部↓副部長

年齢：16歳

織斑家の末っ子で次男、小学生時代からグラスアンにノースリーブがトレードマークと



なっている。理由としては双子として長男である織斑一夏と瓜二つであり、彼と自身を見分ける事ができる存在が篠ノ之束を除いて本人以外不可能だったからとされている。(コンピュータによる顔認証ですら彼等兄弟を見分ける事ができていない。)

何故か長男の織斑一夏に異常な対抗心を燃やしており何かと勝負を仕掛けては何やかんやの理由で敗北を重ねている。姉に対しても対抗心は同様だが『まずは兄貴、次は姉ちゃん、そして束さんだ!』と発言しているらしい。

手先が器用であり、一度学んだ技術をほぼ八割ほど自身で再現する特技を持っており、それによりプラモデル制作、楽器演奏、IS開発等の様々な技能を發揮している。篠ノ之束のIS開発にも関わっていたらしくパイロットとしてもメカニックとしても優秀であり廃棄パーツだけでISを作り上げたり仕様が全然違う機体をほぼ初乗りで乗りこなす技能を見せつけている。

家族へ対抗心を燃やしているが武装が剣一本しかない一夏の専用機の白式に追加武装を開発したり、姉の織斑千冬に温泉旅行をプレゼントしたりと敵対心がある訳ではなく、「秋十は家族に構って欲しいだけ」との証言もある。

現在恋人がいて人生の絶頂である。

趣味は気に入ったアニメのロボットをフルスクラッチすること。

頭脳労働は感覚でやっている部分があり勉強ができる訳では無い。

専用のＩＳコアを与えられているが機体そのものはＩＳ委員会が世界各国から送られてきた「採用しようかどうか迷う微妙な機体」「専用機として与えるにはイマイチだし量産機にしてはコストがかかる」みたいな機体を与えられてはそれを乗り回して再評価して送り返す……といった具合に特定の機体を所持することは無い。またそれらの機体を素体として廃棄。パーツや試験用装備を組み付けた自作ＩＳも同様である。

最もその殆どは大破か条約違反を理由に破壊処分を受けており委員会にはほぼ電子データのみが送られる事が殆どである。

ちなみに彼が作った自作ＩＳはパーソナルマークとしてスパナとバールの十字架に「A. E. (AKITO. EXPLORIT『秋十の功績』)」と書かれたものが両肩と両脚にデカデカと描かれている。

彼の自作ＩＳは一部委員会から与えられた業務とは別にＩＳ学園から「学園固有の専用機」の開発に向けて自分の才能をアピールする為に作られた機体、本人はコンペティション形式で行われると思っており数打ちや当たる戦法でポコポコ作つてはそのデータを学園に送つているとの事。

彼の作る機体はたとえば格闘戦専用機でも遠距離攻撃を可能にし、狙撃特化型でも近接武器を取り付けるなど「どの状況でも最低限対応だけはできる」という彼が自分が乗り

たい機体の好みの特徴が見られる。

「二点特化」や「ピーキーな性能」という言葉を「単なる言い訳」と考えており白式を見せられた時即座に解体しようとして涙目となった織斑一夏の目の前で織斑千冬に殴られる非公式記録が確認される。

どういう訳か篠ノ之束は彼の頼み事に弱く、デ○ズニーランド異臭閉鎖事件、お台場ガンダ○ラストシユーツィング事件、お台場○ンダム輝き撃ち事件を起こしている。

彼女に恋愛感情とか特別気に入られているアレとかではなく普通に彼女が死ぬ程退屈していたから秋十の頼み事を暇潰しにきいていただけとの本人から証言を得ている。

原作で白騎士事件とか妹の専用機持ちに箔をつける為に人が死にかける事件起こすような人だしね。

→誰だか知りませんが勝手に人の報告書に身に覚えの無い文章を追加しないでください。

他2人の織斑家と同じくクローン人間であるが「最高の人類の創造」を目的とした千冬と違い「量産性と汎用性の高い優秀な人材」というコンセプトで作られており、秋十型のクローンが1000人入れれば小規模な軍隊を組織するもベンチャー企業作ってそこそこ儲けるも思いがまま…….と思われたが承認欲求の強い個体しか作れず、本当に秋

十が100人いたら多分「誰が最強の織斑秋十か。」を決めるために勝敗の着かない争いを延々と続けるだけだったりする。

→誰ですか？これは二次創作小説の意味の無い裏設定や自己満足のキャラ設定を書くスペースではございません。これはれっきとしたIS委員会に提出する真面目な報告書です。

IS学園においてジャズバンド部に所属、目立った活動はしておらず他の部員からは「たまに来てはめっちゃトランペット吹いていく幽霊部員予備軍」と評価されている。ちなみに吹奏楽部、軽音楽部、邦楽器同好会等の部活からも勧誘を受けているとの事だが「趣味ではない。」と一蹴している。

ボーカロイドとかにわか程度に好きな癖して「俺はジャズ以外は気が向いた時しかやらないから」とかぶっちゃけ寒いよね。

→本当にやめてください。何故か削除できない文章を追加しないでください。

ちなみに担当管理官のルーコス平野は実は逮捕を逃れたふぁん

→バカやめろホントにいい加減にしろお前後dくあwせdrftgyじこip

結果から言えば束さんは俺の部屋でラウラとセシリアの3人でマイクラをしている最中に公式文書の改ざん、それと時たま秋十と一緒に土下座していたIS委員会の偉い人にシユールストレミングを浴びせてPTSDにした容疑で誤認逮捕された。

千冬姉から何故か「何バラそうとしているんだお前は」と怒鳴られながら野球グローブを付けた両手で某忍術漫画の千年殺しを喰らっていたけど多分大丈夫だと思う。

ちなみに束さんが悶絶しながら千冬姉に引き摺られて行ったあとラウラとセシリア

の2人でマイクラでホワイトベースを完全再現していた。

「篠ノ之博士…篠ノ之博士がいなくなったら…ホワイトベースががらんとしてしまつた。……でも大丈夫、すぐ慣れると思うから…心配しないでくれ、東さん。」

「東さんが艦内のモバイルスーツを作る予定だったんだ…。」

「うう……身に覚えがないよう…身に覚えがないよう……。」

「普段の行い……は、別に悪くは無いが反省しろ。」

## 主人公に勝てないけど幸せなオリ主

「AIS—EOI（秋十製インフィニット・ストラトス試作1号）……通称『ディッカーマン』、これはIS学園防衛を目的とした機体であり第三世代に分類されます。外観は全身を装甲で覆った姿に特徴的な背部の可変式バックパックと大型化された脚部……バックパックと両脚部がメインスラスタの役割を果たしています……基本フレームは完全な新規造形であり背部、両脚部に分散させる形でジェネレーターを搭載する事で白式の二倍の推進力、紅椿に次ぐ最大出力を誇り現状存在する機体では速度、火力と共に第三世代中最高の機体です。一撃離脱を基本運用としていますがジェネレーター出力をパワーユニットへ回す事で白式や甲龍を圧倒できる程の性能があり、またエネルギー兵装、実弾兵装と装備を選ぶ機体でもありませんので射撃戦、白兵戦共に乗り手も装備もほとんど選ばずに申し分無い性能を発揮する事が期待されています。基本兵装は白い警棒のような持ち手の先から荷電粒子を発生させそれをAICに似たもので形状維持させた……言うなればライオセーバーみたいな『荷電粒子刀二型』及び機体の基本兵装として唯一の射撃兵装『肩部固定式2連バルカン』の二つです、武装が二つだけなのは第三世代兵装がパス・スロットを圧迫する為にその他追加武装と排他で選択式と



なっているのが主な理由です。」

秋十のやつ、夏休み初日に教員を集めて何をさせるつもりかと思えば……なんだ、真面目にISを造っているじゃないか。いつもトンチンカンな物や明らかに条約違反な物を造っているし、その割りに日の目を見る機体が少ないからテストパイロットに専念して開発は辞めたのかと思つたぞ……しかし聞けば紅椿に次ぐ高性能機、強力なスラストが背中と両脚に3つも追加されているのは見た目通りの重装甲をカタログスペック通りの速さで動かす為か……一撃離脱戦法を基本運用と言つていたがそれは恐らく第三世代兵装による物、つまり第三世代兵装を装備しないなら白兵戦特化、射撃戦特化、汎用機と幅広く運用が可能……これから世界各国で第三世代機を量産させていく事も考えれば教員部隊のISも打鉄やラファールだけでは少し頼りないと思つていた所だ……この後の模擬戦闘試験が上手くいけば私からもこの機体をIS学園に配備して欲しいと上に勧めてみるでしょう。まあブリュンヒルデも絶賛なんて聞けばIS委員会も学園の理事長も悪い返事は出さないだろう。

『それではこれより模擬戦闘試験を開始する！教員諸君はテロリスト役としてI S学園へ侵入し第三アリーナを占領する事を勝利条件とし、ディッカーマンはそれを阻止する事を条件とする！ディッカーマンは試作された三機だけしか配備されていないが第三世代兵装を装備した一機以外は背部多連装ミサイルランチャーユニットを装備した火

力支援型、秋十製白式用ビームライフル及びグレネードランチャー内蔵シールドを装備した汎用型となっている。テストパイロットはIS委員会より出向してきた三名の：居村望、ルーコス平野、巻紙礼子である、3人ともパイロットとしては優秀な成績を残しているので油断してかからぬように!!』

しかし教員全員で向かうのか…この人数をたった3人で相手する等…余程腕に自信があるのかそれともそれだけ機体の性能がいいのか…いや、その両方なのだろうな、秋十が作った機体ということは。

相手は名前の聞いた事ない2人とIS委員会における秋十の担当官…あの女はパイロットでもあったのか、知らなかったな。まあいい…久しぶりの実戦…腕が鈍っていないか確認も兼ねて暴れさせて貰うとしようか。

「先輩…大丈夫ですかね？」

「どちらの心配だ？ たった3人で教員部隊全員をまともに相手にできるのか……と思っ

ているのなら、油断大敵というものだぞ。山田くん。」

「油断…ですか？」

「ああ、あの機体を作ったのは秋十。そしてそれを相手するのはあいつの姉であるブリュンヒルデ率いる中隊規模のI S部隊、秋十の事だ…一夏を倒す前に私に黒星を付けて一夏に実力の差を見せてやるとか考えているだろう、何より…一夏もそうだが弟共は私を誰にも負けない最強…と信仰と呼べるレベルで信じ込んでいるからな。そんな秋十がわざわざ用意した機体とパイロット…恐らく只者では無いだろうな。」

「そう言ってる割には楽しそうな顔をしていますね、先輩。」

「まあ、久しぶりに全力を出せるかもしれない…と思えばな。」

試験開始のブザーが学園から聞こえる、それと同時に教員達は私と山田くんを先頭に二つの部隊へと別れて学園へと飛び立った。

「作戦は説明した通りだ!! 二手に別れて挟み撃ちを行う! 単純だがその分細かいアクションによる失敗は互いの実力で補えるだろう!! 私と山田くん、どちらかが撃墜された場合は事前に話した通りの順で指揮官を交代!! 敵の第三世代兵装を装備した機体には必ず三機で取り囲んで相手するように!!」

そうして私の隊と山田くんの隊が互いにまだ視認できる距離で学園へと迫る、ISの速度とは言えまだそれなりの距離、完全に二手に別れる地点までは万が一の事も考えてカバーし合える距離を保つ、するとオープンチャンネルが不意に繋がる。

『待ちに待ったときが来たのだ、私が…紛い物でなかったことの、証のために…!』

この声は…あの時に組織は壊滅させたはず…!?…いや、IS委員会は事実上…東が最高権威となっている、あいつなら…まさか…!

『再び貴様と対峙するこの時のために！ 私！お前を倒すために！』

耳元で警報が響く、ISのハイパーセンサーから熱源反応…いや、耳元で響いてるのではない、ここにいる全員のISから警報がやかましく響いて…まだ学園から数十キロあるんだぞ!?! ISが警報を鳴らすなんてミサイルでロックオンされるか何らかの攻撃が迫っている状況がほとんど…それがこの距離で鳴り響くだと…!?!一斉に鳴り響く警報、オープンチャンネルから聞こえる声に全員が不気味さを感じ…

その場に止まってしまったのだ。

『ちふゆねえ！おかえりなさい！！』  
『ちーねえ！よるごはん！おにいちゃんといつしよに  
つくったよ！』

一夏…秋十…私がまだ束の話に乗っかる前…あの頃は毎日夜遅くまでバイトして、日々の疲れが身体から離れる時は無かった…でも、慣れない夜更かしをして私を待ってくれた家族がいて…苦痛に感じた事はなかったな…。

『千冬姉、おれ…大きくなったらいっぱいはたらいで、ぜったい千冬姉を楽させてみせるよ!!』

『なら俺はお兄ちゃんよりもっと働いて大金持ちになってお兄ちゃんたち姉を楽させてやるよ!』

ふふ…秋十はこの頃から一夏に対抗心を燃やして…お前達はいつまで経っても私の弟だ。もっと私を頼っていいんだぞ？

『姉ちゃん…今まで言えなかつただけど……ひよつとして俺と兄貴の区別ついてない?』



そ、そんなことは……すまん……。

『…やつぱり、昨日俺達が風邪引いた時、俺と兄貴途中でお布団入れ替わってたけど姉ちゃん普通に俺の事を一夏って呼んでたよな。』

いや、だがお前達は本当にそっくりなんだ…見間違えてもしようがな…す、すいませんでした。

『秋十、寒くないか?』『子供は風の子だぜ兄貴!それにこれからはノースリーブグラサンが流行る!!間違いない!』

まさか昨日の今日でグラサン付けてノースリーブにするとは…だが、似合ってるよ、秋十。

『ほら!姉ちゃんもこう言ってるじゃんか!』

『へへ、どうかな千冬姉……ちよつとブカブカだけど……』

まあ中学生はすぐ大きくなるもんだからな、学ランなんて大きいくらいで丁度いいものだ。……萌え袖みたいで可愛いな私の弟。

『へ？なんか言ったか千冬姉？』

いや、なんでもない。それはそうと……。

『？……なんだよ？姉ちゃんも兄貴もこっち見て……』

『いや秋十……流石に……』

学ランまでノースリーブにするのはどうかと思うぞ？

『えっ!?!俺達がプリキュアに!?!』

『嘘だろ千冬姉!?!』

まだ何も言っていないだろうが……全く、お前達にはIS学園に入学してもらおう。IS委員会最高顧問……まあ束のお達しでな。少なくとも入学すれば実験体だの解剖だの

そういった目に合う事は無くなるだろう、まあ束がIS委員会の実権を握ってる限り学園に入らんでもそんな事はさせないだろうがな。

『へえ…なあ姉ちゃん、ちよつと委員会の人と話せたりする?』

ああ、できるが束と連絡を取りたいなら私の携帯から…。

『あ、いや!そういうわけじゃないから大丈夫大丈夫!!ね?いいでしょ?』

……?まあ構わないが…先に一夏にIS学園に入学するのに必要な書類と参考書を渡しておくから後で一夏から貰っておけよ?

『へっへっへ…了解しました!』

なんか怪しいが…まあいいか、行くぞ一夏…。

『お、おう?』

『この度、I S 委員会から出向してきました、技術試験部門の……織斑秋十です。』

『あ、あれ？秋十さん……？つてせんぱ……じゃなくて織斑先生の弟さんの……。』

秋十……なんでお前がI S 委員会所属のバッチを付けてるんだ……。

『いやあ、I S委員会にちよつと売り込んだら是非委員会直属のパイロット兼技術者  
にって言われちゃってさあ…あはは！いやあ、優秀な人材として認められるなんて、能  
ある鷹は爪を隠せないもんだなあ…アツハツハツハツハツ！』

いま自分で売り込んだと……ん？……まで、これは……ああ、そうか……。

『織斑千冬よ!!!  
私は!!  
帰ってきた!!!  
』

「これが走馬灯か。」

光が私を包み、視界が白く染って暗闇に消えた。



結果から言えば秋十は逮捕された。明らかに核兵器レベルの破壊力を持つ兵器を作ったからISの軍事利用の疑いと大量破壊兵器製造と複数の条約を違反した容疑で……フランスに高跳びした秋十を怒り心頭の束さんが人参ロケットで追いかけて、フランスの空港で取っ組み合いの殴り合いの末にボコボコにされた後……事情を知らない現地警察に連行される形で逮捕となり、シャルは一人で仲直りした両親と共に実母の墓参りへ行つたそうだ。

尚、本人は『予期しないリミッターとジェネレーターの故障による事故であり故意的なものではない。』との証言が裁判で通つてしまい、何故か無罪放免となった……ニユースで見てたけど裁判官とか秋十の無罪を主張してたIS委員会の人とか秋十を擁護する会見してた人達……たまに学園に来て秋十の担当のIS委員会の偉い人と仲良く話し合いしてた人達だよな……？何話してたかは外国語だからよく分かんなかったけど。

『爆裂荷電粒子砲……高熱源体である荷電粒子を特殊なナノマシンで包み込み限界まで

圧縮させ、甲龍の龍砲に似た空気砲で射出する、ナノマシンで包まれた荷電粒子の塊が目標へ近づくとナノマシンが起爆、風船に針を刺すと破裂するように最大数千度の熱量の荷電粒子が直径十数キロを多いつくし、圧倒的熱量でISの電子機器を破壊して行動不能にさせる第三世代兵装。』

……いくらIS相手でもこんな核爆弾とほぼ変わらない威力のものがどうして通ると思っただこの馬鹿!!!」

「だってテロリストなんて残党とか出てきたら後々面倒だから一気に焼いた方が後腐れ無いと思っただもん!!」

「IS学園は教育機関なんだよ!!こんな破壊兵器運用できるかこのスカポンタン!!!だいたい『ISの機動力と速度でテロリストへの最適な攻撃ポイントへ移動し爆裂荷電粒子砲を放った後に撤退、もしくは次の攻撃ポイントへ移動。』ってお前これ殆どメタルギ○の核兵器運用思想と似たようなもんじゃねえか!!後、ラウラから聞いたがドイツカーマンってドイツ語で『太った男』って…これ隠す気無いだろう!!!?なあ!!」

「でも力なき正義は意味が無いつて何人も先人が言ってるじゃん！なら抑止力は必要じゃん!!」

「核兵器より強いISを何十台も保有してるIS学園に今更抑止力なんて必要無い!!と  
いうか世界が核の代わりにISを推してる時代に核抑止に逆戻りとか何考えてるんだ  
お前は!!」

「織斑さーん、回診のお時間ですよー。」

「あ、はい。」

「……………」

「あ、あの…篠ノ之博士…ですよ？私、I S学園の山田真耶っていいいます…まさか同じ病室なんて…あ、あれ？篠ノ之博士？」

「あ、あんまり話しかけないであげてください。東様は秋十のクソ野郎を逮捕しようとして取っ組み合いとなり…クソ野郎に突き飛ばされた拍子に2人をとり囲もうとした現地警察の持っていた警棒がズプリと突き刺さってショックで放心してしまっているんです…まさかあんなスムーズに啜えこんでしまった自身の恐ろしさに。」

「ええ……………」

初めて前後編に別れたが幸せを目指すオリ主

昔の話…。

「はあ!? 簪ちゃんのISは造らないですって!?」

「い、いえ! 楯無様、造らないではなく人員削減による延期…。」

「んな言い訳が通る訳ないでしょ!! あの子は日本の代表候補生!! それをたかだか男性操縦者の機体を造るからって蔑ろにしているの!?!」

う、うう…: いくくんの護身用ISを作りたいから工廠貸してって倉持のお偉いさんしてる元クラスメイトを頼ったら他の人に皺寄せがきてる…: これ絶対束さんのせいだよね…: どうしよう、なんかあの日本人にしてはちーちゃんの後輩並に不自然に黒とかけ離

れた髪色してる女の子めっちゃ怒ってるよう…なんか日本政府お抱えの臀部とか愛撫  
だか知らんけど裏世界で暗躍してる家柄っぽいし下手な対応したらIS学園に入学す  
るいっくん達に何かしら被害が…。

東さんならあいつを物理的にも社会的にも黙らせて話終わらせるくらいできるけど  
………いっくんに嫌われたくないし、ちーちゃんとあっくんには

「お前の夢を手伝う代わりに後暗い真似したらアクシズ落としてやるからな。」

「まあIS技術教えて貰った恩返しはするけど寝覚めの悪いことしたら篠ノ之神社にコ  
ロニー落としするからね？」

つておもつくそ死刑宣告されてるし…というか2人とも制裁方法が人類の半数を死  
に追いやる被害が出るんですけど頭デラーズかよお前ら。

というか私の実家はジャブローかよ。

「お、お姉ちゃん…私は気にしてないから…。」

「かんちゃん、それISスーツ宣伝用のマネキンだよ?。」

「ほら見なさい!憧れの姉を追いかけて必死に努力して代表候補生の座を手に入れて念願の専用機受領って時に製造中止の連絡来た簪ちゃんを!!錯乱して鼻メガネ付けて、着る必要もないのにISスーツで街中を歩いてここまで来たのよ!?!」

「そ、それは止めてあげましょうよ…というかアレってISスーツじゃなくてただスク水にニーソ履いただけなんじゃ…。」

日本政府の偉い人も大変だなあ…まあ束さんが『対応するの気まずいから代わりに相手してね』って押し付けたんだけど…。」

「機体本体とISコアを渡して貰えるなら自分で組み立てますから…。お姉ちゃんも一人で組み立てたそうですから…。」

「簪ちゃん……それテレビに映った天気予報のお姉さん。つていうかその話は……まあ後で話せばいいか。」

「重症だね。」

「そ、それならば……わかりました、倉持の方に掛け合ってみます……。」

「え、えつと……お、お姉ちゃん……簪ちゃんと一緒にお父さんに何も言わずに家飛び出して……ここまで来ちゃったから……帰りのタクシー呼んでくるわね？」

「かんちゃん、元気だして！私も手伝うから……だからいい加減スク水ニーソ止めて着替えてね？ここにIS学園の制服置いておくからね。」



「うん、私はここで篠ノ之博士にISの作り方教えて貰うから。」

「…簪ちゃん、それ観葉植物だから。」

「かんちゃん本当に重症だね…。」

「と、いうわけで気まずいからついそのまま帰って来ちゃってさ……いやあ、東さんもこればっかりは悪い事したなあ……ってあれ？ いったくんとあつくんは？」

「今通りかかったタクシーに飛び乗って倉持技研に行きましたよ。ちなみに今の話は全部千冬さんに伝えましたから。」

「箒ちゃん!? そんな事したらまたちーちゃんが東さんに突うずるっ込みに来ちゃうじゃん!?!」

「いいじゃないですか、お通じが悪いとか言ってみましたし。」

「ちーちゃんのせいで今はドライブスルーみたいになっちゃってるよ!! こうしちや居られない! 今すぐ逃げないと…!」

「もう遅い。」

あ  
っ

お姉ちゃん…本音…私に気を利かせて一人にしてくれたのは有難いけどまさか呼んだタクシーに乗ってそのまま帰るのはどうなの……。

まあ電話して聞いてみたら別のタクシーを呼んでくれたみたいだけど…。

だけど……。

「すいませんでしたッ!!!」

タクシーと一緒に……世界初の男性操縦者の兄弟がボンネットと屋根に土下座の体勢で乗ってやってきた……。

え？何これ……？金さえ払えばタクシーの何処に乗ってもセーフ説？

「ええつと……ひよつとして千冬ちゃんの弟くん達？」

「あ、貴女は……！千冬姉のクラスメイトで……。」

「東さんとロボットアニメ談義で『種運命とR2は無い』と言って殴り合いに発展したという……その名は！」

「篝火ヒカルノ!!!」

「Yes! I am !!」

ノリがいいなあこの人達……。

「……で、自分の専用機のせいで私の機体の開発が中止されるかもしれないって話を聞いてIS学園の受験勉強を放り出して慌ててここまで来たと…。」

「そういうの嫌いじゃないけどタクシーは座席に座って移動しないとダメだぞ少年達。」

「ほんつつつとすいませんしたっつ!!」

私とヒカルノさんの目の前で土下座のまま不動の姿勢を貫く男性操縦者2人、スク水の女の子2人に土下座する男2人って何この絵面…というかなんでヒカルノさんはスク水着てるんだろう…。いやそれ以前に何でヒカルノさんはここに…？

「ん？ああ、私はほら…これ忘れ物だろうか？」



「あ、私の制服…なんでここに…？」

お姉ちゃん達がなんか言ってたのは聞こえてたけどひよつとして着替え置いてくれたのかな…気づかなかった。

「それはそれとして何でスク水来てるんですか2人とも。」

「それはいいから。」

改めて聞かれると恥ずかしいからやめて。

「…つまり開発途中の専用機…打鉄式は引き取って自分で完成させると…まあ確かに I S コアはともかく本体造るなら 1 人でも…。」

「いや、1 人では造らないけど…。」

「秋十、それできるの多分お前と東さんだけだから…。つて…入学式まで 1 ケ月無いけど間に合うんですか？」

「そんなの 1 週間あればできるだろ？」

「1 週間ごとに新しいメカを出せるのは東さんとお前とジオンとドロンプーくらいしかないって…。」

今グラサンの方が 1 人で造るとか言ったけど冗談だよな？

1週間とか言っただけどジョークだよね？

まあ倉持技研が『申し訳ないから良かったら…』って入学式までの間設備を貸してくれるらしいから…：…それでも人手が足りないのは変わりないけど…：…せめてマルチロツクオンと荷電粒子砲のデータが手に入れば…。

「で、これが完成予想図ね。」

「へえ…：…ばら蒔いたミサイルが別々の目標を狙う事ができるのか…。」

「どうせならアップサラスみたいにビーム砲にすればいいのに…。」

「って何機密中の機密の第三世代機のデータを勝手に見せてるんですかヒカルノさん！?それ私の専用機い！」

「アップサラスかあ…：…楽しかったなあ08小队ごっこ…。」

「ああ、篠ノ之さんが何故かノリス役で姉ちゃん相手に大立ち回りしてたね。」

「え？何それ!?それ俺は聞いてないけど!？」

「ああ、ごめん兄貴、誘うの忘れてた。」

「千冬姉も秋十も揃ってお兄ちゃんハブるのは良くないと思うぞ。」

「まあまあ少年、ほら撮影したビデオ貸したげるから、しかもNG集付き。」

「ちなみにサンダースとカレンはあの五反田兄妹が起用されてるぜ兄貴。弾くんの親父さんが『…間に合うものか』ってカツコ良くキメる所が俺的にはイチオシかな。」

「あのおじさんノリノリだったよねえ…。まあサハリン兄妹一人二役したり陸ガンからマゼラ・アタックまでメカを全部作っちゃった東が一番ノリノリだったけど…。」

「みんなして俺を除け者にしてない？お兄ちゃんいっぱい悲しい。」

なんか全然関係ない話題でヒカルノさんと織斑兄弟で盛り上がってるし…。

「まあ、俺的に一番楽しかったのは東さんと一緒にアプサラスを5分の1サイズで完全再現で造り上げた時かなあ…。」

「ああ、プラモも買う時か作る時が一番楽しいもんな。」

私の専用機の話をしに来たんじゃないのこイツら…ん？

「アプサラス作ったの!？」

「ぐえっ、っ、造りました!アプサラスIIIだけ…他はハリボテ…!」

「うお!?!か、簪さん!?!締まってる!!秋十の首が締まってる!?!」

「ああ!?!ちよつとやめたげなって、グラサン少年が死んじゃうから!!」

「荷電粒子砲はガンダムのビームライフル、マルチロックオンはアプサラスのOSS…  
どっちもデータが揃ってる…。」

「こ、こんな事もあるうかとグラサン型メモリーカードにデータ入れたまんまにしないと良かった…。」

「お前のグラサンどうなってるの？お兄ちゃん凄い気になる。」

「設備もデータも揃ってる…：機材も資材も足りなけりやすぐ用意できる。うん、これなら入学式までに間に合わせられるね！微力ながら私も手伝うよ。」

「ヒカルノさん…！」

「俺も、機械弄りとかさっぱりだけど…：手伝います！」

「織斑くん…。」

倉持の所長、アプサラスを作った男、そして…：えっと、好青年！この人たちが力を貸してくれるなら…：…！！

「俺は。パス。」



「秋十!」「少年!」「織斑くん!?!の弟の方」

「秋十でいいよ。」「俺も一夏でいいぜ。」「あ、なら私も簪で…あと2人とも敬語使わなくていいから。」

「おい秋十!どうして…!」

「だって、俺 I S 委員会の方で呼び出されてるから…。」

「そうか…まあ秋十が持ってたデータがなきやそもそも造れなかったんだし感謝しても文句は言えないな。」

「となるとこの三人でやるのか…。」

ヒカルノさんが不安そうに呟く、やっぱり迷惑をかけられないし諦めた方が…。

「なあ秋十、そのアップサラスって実物はあるのか？」

「え？うん…悪用されないように東さんが隠してるけど…頼めば3日で届けてくれるんじゃないかな。」

「ヒカルノさん、例えばだけどISって全く違う種類の機体を分解して別の機体に取り付けるってできますか？」

「……なるほど、考えたじゃないか少年。私そーゆーの嫌いじゃないぞ。」

「……となると送るパーツはアップサラス以外にも……。」

突然織斑くんが2人へ質問したと思ったら何かを察したように2人が話を進める…。

実物…データ、取り付け……そうか！それなら……！

できる！私達三人でも打鉄式式を完成させられるんだ！！

「ふふつ、この篝火ヒカルノ。1ヶ月とは言わず1週間で仕上げてやるよ！」

「やったな簪さん!!これで全て解決だな!」

「出来上がったアプサラスからマルチロックオンや荷電粒子砲を取っ払ってISへ取り付けるなんて単純だけど良い考えじゃんか少年、ほら！お礼にお姉さんの胸もませてやるよー！」

「要りません！要りませんから！た、助けて簪さん!!」

3日とは言わずまさか昨日の今日で届けてくれるなんて…流石は『世紀の天才』篠ノ之博士…。

お礼を言いたかったけど倉持技研の倉庫に届けるなりすぐに帰っちゃったから挨拶もできなかつた…手紙を書いて一夏くんに届けて貰おうかな。

「よーし、お姉さんが早速OSをIS用に手直し…手直し…て…なお…。」

「ヒカルノさん？」

「……………ははっ……………流石天才……………全然わからない。」

「ええっ!?」

## 主人公(兄)への憧れが対抗心になつてる幸せになるオリ主

「はあ？ブルー・ティアーズの改修をして欲しい？」

「うん、ダーリンさえ良かったらなんだけど…。」

「いやいやハニー…いくらどうしようも無い僕に降りてきた天使のマイハニーシャルロットのお願いでも…俺がIS委員会直属だとしても勝手に他国のISを改造するなんて無理だよ。」

「いやイギリスからISの改修許可…というより要望が来ている、これが書類だ。」

「ん……本当だ…でも何でオルコットさんの機体の改修をハニーとラウラさんが頼みに来るのさ。」

それはクラス委員を推薦された一夏と自薦したセシリアと秋十の三人からISの模擬戦で決めるって話になった時にセシリアに『貴方の減らず口をそのダサイグラサンごと叩き割ってあげますわ。』って言ったのをダーリンが未だに許してないからってセシリアから言われたんだけど。

一夏と箒に話聞いたらそもそも一夏が『ハンデは要らない、むしろ全力で叩き潰すつもりで来てくれ。』って言った後に続いてダーリンが『ハンデ？ 負けた時の言い訳にされたら堪らねえから俺も要らねえよ！』って言ったからセシリアもそう返したらしいからダーリンが怒るの筋違いな気がする…。

まあそんな事わざわざ言つてダーリンがへそ曲げてブルー・ティアーズの改修しないって言い出したらセシリアが可哀想だから言わないけど

「セシリアが『秋十にグラサンがダサイって言ったのを許して貰ってないから気まずい』  
と言つてたが。」

なんで言つちやうのかな!?!この無知っ子軍人!!



「は？いやそんな事ズルズル引きずる程怒ってないよ…まあオルコットさんがファッションセンス皆無な人なんだなって思ったりはするけど。」

多分英国淑女の方が年中グラサンノースリーブの人よりもファッションセンスは高いんじゃないかな…。

「だがセシリアが『私だけハブかれてる』って言ってたぞ？」

「まっさかあ…ちよくちよくI Sで模擬戦するしクラスでも普通に話してるし…気の所為じゃない？というかボーデヴィツヒさん同じクラスだからわかるでしょ？」

「まあ、私もそう言ったんだが…『いいえ！私だけ明らかにハブられています！』つと強く返されたんだ。」

「僕達から見てもダーリンはセシリアじゃなくても誰かを蔑ろにしたりする人じゃないと思うんだけどね…。」

セシリアが過去編で一言しか出てないとか台詞がどうか出番がどうか言つてたけどよくわかんなかったなあ…。

「うん…よし！誤解を解くためにもやるよ。どうせしばらく暇だしね。」

「ありがとう！ダーリン大好き!!」

「俺もハニーが世界で一番好きいい!!♡」

「…………お前達が人目を気にせずイチヤつく度にのほほんさんが舌打ちしながらコーヒー豆を食り食べるようになってもうこんなに月日が経ったのか。私もそろそろドイツに里帰りしてみようかな…。」

「冗談じゃありません！ブルー・ティアーズは現状でクソ機体です！オルコツ党にはそれがわからないですよ!!」

「もうちょっと手心とかないの…?」

皆を生徒会室に集めるなり何を叫んでるのダーリン…開口一番デイスられたら…  
ああ、セシリアが俯いて黙り込んでしまった…。

「おい秋十!!それは流石に酷いだろ!」

「いや兄貴、『専用機』として見るなら俺だつてブルー・ティアーズはサザビーとかキュベレイ思ひ出すから好きだよ?でも一応俺はIS委員会所属の技術試験官つて役職持つてるからちゃんと仕事しないと…。」

「いやいや、確かにヨイシヨするのは駄目だろうけど悪口を言つていい理由にはならな  
いだろ!!」

まあいきなり友達専用機をクソ呼ばわりされたら一夏なら怒るよね…実際僕も秋十を怒りたい気分でもあるけど…秋十の言いたい事わかつちやつたからなあ…。

「じゃあ兄貴…ブルー・ティアーズの特徴教えてよ?」

そう言うのと一夏は何か思い出すように話を始める。

「ブルー・ティアーズはセシリアの専用機で狙撃用のビームライフルが主兵装の射撃特化型、同じ名前のBT兵器：ファンネルもどきを第三代兵装に持つてる…つまり早い話がヤクト・ドーガとかレガンダムみたいなもんだろ？」

「ガノタ的には一緒にして欲しくは無いけどまあ大雑把に言えばそうだな…でさ兄貴、そのBT兵器だけど…適性が無いと使えないって知ってた？」

「ああ、セシリアから聞いた事あるな。」

「ティアーズ含めて今世に出てる第三世代機体が試験機つてのは知つてる？」

「箒が紅椿を束さんから受け取つた時に聞いたよ。」

「オルコットさんはイギリスのIS乗りでも最高のBT適性持つてる事は？」

「そんな事どつかで言つてた気がするな……。」

「ねえ、オルコットさんはBT兵器動かしてる時自分は動けないのは知ってるよね？」

「……………確かに…俺が見抜いたな、初めて試合をした時に。」

「少しずつ一夏の歯切れが悪くなる…女の子の事以外だと結構頭の回転早いよね、一夏って。」

「なあ兄貴……試作機つて事はさ……。」

「……ああ、そつか……。」



「最終的には『量産機』にする筈だよな。」

そうなんだよね…ブルー・ティアーズは第三世代機体の第三世代たる所以の第三世代兵装がIS適性だけじゃなくBT適性がなくちゃ満足に扱えず、適性最高値のセシリアですらBT兵器の操作中は自分が動けない……恐らくですけど猟師が猟犬を獲物に襲わ

せるようにビットで敵を追い詰めて同時に本体が敵へ一方的に攻撃を仕掛けるっていうのが運用思想なんだろうけどその扱いができない。

そう、適性最高値のセシリアが。

「で、だいぶうろ覚えだけどヨーロッパの防衛に使用するISを決めるとかいうイグニッション・プランにイギリスも参加すると思うんだけど……適性が無いと使えない上に現状適性最高値の人すら本来の運用ができてない機体が採用される？……いや、『量産機』として使えると思う？」

「た……確かに……で、でも！セシリアだってこれから訓練を積んでいけば……」

「オルコットさんが使いこなせても他の人がダメなら意味無いって……兄貴。訓練させるのもタダじゃないんだから……必要以上の習熟が無きや想定した性能を出せませんなんて通じないよ……『プログラム通り訓練したら誰でも扱える』『不具合が起きない程度にそこそこ良い性能』これが兵器としての理想像だと俺は考えてるんだけどさ。」

まあ、ジオンもニュータイプ部隊なんかよりもドムとゲルググの配備に力を入れてたもんね…。

実際満足にブルー・ティアーズに乗れる程度にBT適性ある人が何人いるかもわからないし、セシリアと同じレベルでビット操作できるのかもわかったものじゃないよね…うん、確かに量産機としては名機とは呼び辛いかも。

「だったら少数精鋭でセシリアくらいのBT適性の人を集めて…。」

「戦いは数だよ兄貴!! あんなもんに人材資材財源回すくらいだったらラファール・リヴァイブにジェネレーター増設してビーム兵器使えるようにしとけばそれでいいじゃん! ビット? そもそもビーム兵器なんて装甲をコーティングするなりビーム攪乱幕撒かれるなりすぐに廃れるから要らねえよ!!」

「ボロくそ言うわねあんた…セシリアにもうちよい優しくしてやってもいいんじゃないの?」

「ほ、ほらセシリア！秘蔵の小学生時代の一夏が剣道着の中をうちわで仰ごうとしてポロリしてる写真だぞ！」

「ちよつと待つて箒、その写真はということだ？」

セシリア膝を抱えてすっかり落ち込んで鈴が頭を撫でて慰めてる……。普段言い争いが目立つコンビだけど意外だなあ。

「というか箒はそんな写真なんで常備してるの…？」

「一夏がなんか凄く困惑してるって事は盗撮だよね？」

「と、言うわけでただでさえコアの関係で数を揃えられないIS…：戦力増強を目的で配備するのに安定性が見込めない機体を採用するのはどうかと技術試験官として報告させていただけます。ていうか量産は諦めてイギリスだけブルー・ティアーズ運用してればいいんじゃないかな？量産するのはともかく個としてはブルー・ティアーズは良い機体だしさ。」

「ヒルドルブかな？」

「ほらセシリア！泣き止んでよ…えっと、ほら秋十も良い機体だつて褒めてるわよ？」

あれ？僕はダーリンに改修を頼んだのであつてセシリアを糾弾してくれつて言つてないよね？

「まあ俺はどれか一つ使えつて言われたら第三世代兵装使えなくても充分強機体のシユバルツァ・レーゲンか機体も第三世代兵装もパイロットを選ばない甲龍使うけど。」

「や、やめなさいよ…今私の機体を褒められたら私が何言つても嫌味みたいでセシリア慰められないじゃない…。」

ああ、セシリアが鈴にまで睨み始めた…涙目だと可愛くて迫力無いけど。

「なんなんだ、お前はセシリアが嫌いなのか？」

「篠ノ之さんまで…オルコットさんは女の子として魅力的だけどブルー・ティアーズの

量産は認めたくないだけだつて。」

褒めながらしつかり否定してる…。

本当はダーリンってセシリア大嫌いなんじゃないかな…。

「ね、ねえダーリン…そこまで言うなら改善案位はあるんだよね？というか僕が最初にダーリンに頼んだ内容覚えてるよね？」

「ここまで言うておいて何も無いと言うならお前はただセシリアの心を傷付けただけという事になるぞ。」

僕の言葉に続くように沈黙を貫いていたラウラが口を開く…結構怒ってる…のかな？まあ友達のお機嫌を散々貶されて黙ってられるような子じゃないもんね。真面目な軍人さんだし。

「……………まあ一応程度だけど。」



「と…言うわけでこれがブルー・ティアーズ強化改修型、『クイーン・ビー』…機体のコンセプトは『寄せ付けない数の暴力』って所かな。」

ダーリンのグラサンから投影されたホログラムにはブルー・ティアーズを素体に某東方吸血鬼妹の羽みたいなのが背中に二対四枚出てる…一本一本がビットなのかな…。羽は広げたら端から端までIS二体分の大きさがあるし脚が大型化されて逆関節になつてるし…なんか…女王蜂というよりハーピーみたい…。ついでに全身装甲になつてレイジング・レイヴンをオマーージュした西洋の鎧みたい。

あ、逆間接の脚はあれ足首から先の部分を増設してるんだ、普通サイズだとセシリアの脚バキバキになつちゃうもんね。

「まずコイツは背中に増設された羽に合計32機のビットが装備されてる、こいつはビットの根元がフレキシブルに動いて固定ビーム砲としてそのまま射撃する事も可の  
u」

「32機?!正気なのダーリン?!そんなの操ったらセシリアの脳みそオーバーロードし



「ちやうよ!?!」

「まあまあ最後まで聞いてよ……。で、背中の羽のビット：見た目通りの『クロススパア』って名前なんだけども：刃部分だけの十字槍みたいな見た目だから。こいつが攻撃用の射撃ユニットなんだけど、それぞれの刃先の頂点を繋ぐように正三角形のエネルギーブレードを展開することで直接攻撃可能なブレードビットととしても使用が可能。」

「ほう…：方が一ブレード等で叩き壊されそうになっても即座にブレードビットに変えれば返り討ちにできそうだな。」

「それで本来のブルー・ティアーズのビットが配置されていた腰の部分には『ソードブレイカー』って名前のシールドビットが搭載：しかもこいつは拡散式荷電粒子砲を搭載してるからミサイルとかの爆発物や直接攻撃してきた相手を撃ち落とす事もできるんだ。まあ32機ものビットを潜り抜けてくる相手に通じるかわからないけど。」

「基本はその4機を周りに侍らせて防御するわけね。秋十製らしく大抵の相手には対応できそうな機体じゃない。」

「腕部アームには左腕には50口径の二連装内蔵機関銃、右腕は小型グレネードランチャーが仕込んであるよ。ついでにアーム自体も大型マニピュレーターに変えて指の1本1本がISの装甲に使われる合金でできた鉤爪だからインファイトも可能。」

「ふむ、万が一に接敵されても自衛できる最低限の装備が着いているのか。」

ダーリンの説明にラウラ、鈴、箒がそれぞれ感想を述べる………というかこれ元のブルー・ティアーズ要素胴体と腰以外どこにあるんだろ…。

「ちなみにミサイルビットは本来自動で敵を追尾する筈のミサイルをミノフスキー粒子も無いのにわざわざ手動操作するとかバカみたいだから取り外したよ。」

本当はブルー・ティアーズ嫌いなんじゃないかなダーリン…。

「で、この機体の概要だけど、パス・スロットもイコライザも無し、目的の運用法に必要なデータは全部コアからデリートしてその分演算能力を初めとしたビットの操作及び補助に関係する機能を徹底的に強化することでB T適性の無いパイロットでも最低でも8機同時にビットを操作できる筈だよ、理論上は……しかもただ使うだけならって話だけど。」

「少なくとも秋十自身B T兵器動かせてたからあながち机上の理論じゃ無さそうだけど……どうして適性の低いパイロットでも……というかB T適性の無い奴でもセシリアよりも多くビットを操れるのかお兄ちゃんもうちよつと細かく聞いてみたいかな。」

「ああ、簡単だよ……このビットはコンピュータを積んだドローンでもあつて目標の近くまで移動したりブレードビットとして攻撃する際は誘導ミサイルと同じ要領で自動追尾、射撃自体も目標をパイロットが捕捉すれば自動で射撃して……といった具合にほとんどコンピュータが自動で動かしてくれるからだよ。パイロットはイメージ・インターフェースを通して手直ししたり動かしたいビットだけ直接操作すればいいから、ブ

ルー・ティアーズみたいにいちいち射出したビット全部を操作する必要が無いんだよ。コンピュータが動かしてる間はパイロット自身も移動して敵から離れたり逆に接近するのも自由自在だしね。」

「「何それ凄い……。」」

ひよつとしてダーリンその気になればISコア位作れるんじゃないかな……。

「ちなみに運用思想は、目標をハイパーセンサーで捕捉できるギリギリの距離を陣取ってビットを射出……ビット自体も遠距離から数に任せて一斉射撃することで相手を超長距離から一方的に打ちのめす……って感じかな、大型化した分センサー機器も従来のISに積めなかったサイズの性能が良い奴を装備できるし脚部の逆間接はティアーズのメインスラスタを増設してできたもので少なくとも直線移動ならマツハ2以上を出せるから敵が近づいてもビットをばら蒔いて距離を離してブレードビットで串刺しに……って事も。」

「本体は射程距離外を陣取って自動操縦のドローンがちよくちよくエースパイロットの

巧みな操作も交えて最低十数機が敵の周りを飛び回りながらビームの雨あられを食らわせに来て、敵の射撃が届いたとしてもシールドビットに阻まれて…運良く近づけたとしても辺りそこらにビットをばら撒いて敵を包囲しながら自分はマツハ2の速さで射程距離外へまた逃げていく……………これ相手する側にとって遠回しにクソゲーなので「は？」

遠回しじゃなくてもクソゲーだと思うようウラ……………なんかこれ射程距離外から子機を飛ばして攻撃ってガンダムなんかの機体のコンセプトにあったような……………なんだっけ？

「これならセシリアも大満足だな！やっぱりこういうことは秋十に頼むのが1番だな。自慢の弟だよお前は！」

「ああ、セシリア本人はこの機体で無双する自分でも想像してるのかニヤけたまま反応が無いが…このメンバーで1番性能が高い私の紅椿でも苦戦は避けられないだろう

な。」

「秋十も偶には良い仕事するわね！」

「へへつまあな。」

一夏が凄いベタ褒めするなあ…箒と鈴も一緒に褒めてるし……ダーリンも凄い得意気になっちゃって……。

でも…これって……。

僕の不安を知って知らずかラウラが口を開く。

「なあ秋十。」

「ん？どしたのラウラさん。」

「ISって一機作るのに億はくだらない費用がかかるな。」

「うん、そうだね。」

「その中でも特殊な機能や兵装を持つ第三世代機はその倍以上は金がかかるな。」

「…そうだね。」

「この機体…クイーン・ビーはまだ開発してないんだな。」

「……そりゃ勝手に改造しちゃ不味いもの。」

うん、ラウラも気づいたみたいだね。

「この機体、原型機のブルー・ティアーズから流用するパーツはあるのか？」

「……………ISコアと本体を繋ぐ胴体部以外は取り外す事はあつても流用する事は無いね。」



「なあ、この機体……。」

「イギリスはそんな大改造に予算を出してくれるのか？」

「……………君のような勘のいい軍人は嫌いだよ。」

「ええ!?作れないのか!？」

「そんな…あつ。」

「どういうことd…どうしたんだ鈴？」

ラウラの言葉と秋十の返答に一夏達アジア組が驚く、まあ…そうだよね…ただでさえ

下手な兵器よりもお金のかかる第三世代機：それをこんな原型がほとんど残らない上に新しく追加するものが多すぎる大改造をするお金がそう易々と出せるかどうか言われたら…お察しだよな。

あ、さつきダーリンが「一応は」って言ったのはこれなんだね。

鈴がラウラの言葉に気づいてそれを2人に説明してるから僕は何も言わないけど：というか僕途中から全然喋って無いけど皆に存在忘れられてないよね？

「そんな…どうするんだよ、妄想から戻ってこない上になんか俺の名前呼びながらクネクネし始めたセシリアになんて言えばいいんだよ…。というか何で俺の名前呼んでるんだセシリアは…？」

「気にするな一夏。」

「あんたが気にする事じゃないわ。」

「伝え辛いな…。まあ俺も途中で気づいたのに最後まで予算を無視して改修案を練ったのが原因なんだけど。」

「なんで気づいたのに見て見ぬふりして最後まで突っ走っちゃうのさダーリン…。」

「ねえダーリン、これもつとお安くできないの？例えば改修するのはビットだけにするとか…？」

「そうだな、ビットだけならそんな高くつくことはないよな…どうだ秋十？」

「いや、そのビットを操作する為の補助コンピュータとかISの演算能力を高めるための機器類を積むための大改造だし…。」

「なあ秋十、ビットの数を減らしたらダメなのか？」

「いや…ラウラさん、これでも少ない方なんだよ…これ以上減らすと今のブルー・テイアーズみたいに代表候補生レベルの相手にすぐビットの包囲網潜られて接近戦でボコられちゃうんだよ。」

「最低8機とか言ってたのに32機全部使わせるつもりだったのか…。」

「減らしたとしても本当に雀の涙だよ？そもそもビットって試合中にちよくちよく破壊されるから消耗品扱いで量産しとかなくちやならないし。」

「どうするんだ秋十…セシリアがヨダレ垂らし始めたぞ。」

「篠ノ之さん…もうこのまま夢を見させて知らんぷりしていいんじゃないかなあ…。  
俺達の話聞こえて無さそうだし。」

「……………よし！決めた!!」

腕を組んで悩んでた一夏が急に立ち上がって…………セシリアをお姫さま抱っこして  
…………えっ、どこ行くの!?

「お、おい一夏!? セシリアをお姫様抱っこして何処へ行くつもりだ!!」

「ちよつと！待ちなさいよ一夏あ!!」

「とうか、いきなりお姫さま抱っこされても妄想から帰って来ないオルコットさんは  
なんなの…?」

「待つて皆！ダーリン！…あ、お邪魔しました!!」

「ねえ本音ちゃん、あの子達なんでこの生徒会室に集まっていたの？」

「ほえっ!?!会長が許可してたんじゃないの!?!」

「というか話聞いてたけど、秋十くん…結局あれだけ豪語してた『量産できる機体』ってのは全く達成できてないわよね…。」

「お姉ちゃん…一応ブルー・ティアーズを強化するって話らしいから…多分秋十は気づいた上でバレないように説明してたんだと思うけど。」





「と、言うわけでオチは頼むよ千冬姉。」

「おい!!無茶言うな!というかオルコットを私に押し付けるな!!」



「く……クーちゃん……い、いきなり何を……っ……!?」

「す、すみません……束様が全裸で『マッサージして欲しい』と言うからそういう事かと……。」

「どういう事だよっ……うごっ……全裸なのはお風呂上がりだからだよ……っ……つか寄りによつてなんで……止める間もなく間髪入れずにグー・チョコキ・パーを無理矢理押し込んだのっ……うぐおっ……。」

## 後編になつても主人公に勝ててないオリ主

「ダメだ、仕組みはわかるけど何処を弄ったらいいかわからない。束のやつ…多分他の人間…グラサン少年が悪用しないようにメンテナンスは可能だけど改造はできないようにわざとややこしいプログラムを組んだな。」

「それってつまり…?」

「ISに移し替える事ができない…。よく分からないと言いたげに首を傾げる一夏くんにヒカルノさんは頭を悩ませながらそう呟く。

「どうにかできないんですか!？」

「方法はあるよ…OSをIS用に弄れないならISの方をコイツ用に手直しすればいい、ただ…そうなるか…。」

ヒカルノさんがチラリとフレームが丸出しの状態の未完成の打鉄式式を見る…要は1/6アップサラスを素体にISを作るってわけだから、多分この未完成打鉄式式と互換性なんてあるわけないからIS部分は一からやり直しという事になる。

「そ、それって1ヶ月で完成させられるもんなんですか？」

「…突貫工事で不眠不休ならできかな…このアップサラスにISをくつつけるって話だし。」

焦る一夏くんに気楽そうな表情を作って返事を返すヒカルノさん、でも不眠不休の突貫工事を1ヶ月ぶっ続けなんて正気の沙汰じゃない…。

私なんかの為にそんな事させられないっ！

「あ、あの！やっぱり…打鉄式式は…。」

「駄目。」

えっ……。私が話す前にヒカルノさんが食い気味に切り捨てた。

「そもそもの原因はね、束のやつがその少年の専用機を作りたいから工廠貸してくれて話を持ってきて私がそれをそのままに報告したせいで『篠ノ之博士と世界初の男性ＩＳ操縦者のどちらともコネクションができるなら』とか言っつて君の専用機そつちのけにしちゃったつてのがそもそもの始まりなの。」

「だから今朝アプサラスを届けに来た時、束さんすごい気まずそうな顔ですぐ帰ったのか……。」

そんな話が……。

「そういうこと、私だつて大人として責任感じてないわけじゃないんだ。……せつかくその償いができるチャンス。嫌だと言っつても完成させるからな。」

そう言っつてニヒルな笑みを向けるヒカルノさんは……

私の大好きなヒーローよりもカッコ良く見えた。



「もうこれいつその事下手に改造せずにアプサラス自体ポン付けして第三世代兵装扱いにしちやつていいかな？」

「ヒカルノさん!？」

「ヒカルノさん、いきなり何言ってるんですか？俺こういう事よく分かんないけど束さんが『仕様変更だと…っ！ふ……ふざけるなよ……！戦争だろうが……。2度目3度目の打ち合わせ中ならまだしも…納期1週間前に…んなことしたら……戦争だろうがっ……！戦争じゃねえのかよっ……！』って言ってたし…。完成図と違うの作っちゃダメなんじゃ…？」

「あいつもそんな事言うんだ……。大丈夫大丈夫、プロトタイプって事にして試作前期型、戦術実証型、火力試験機とか言って徐々に改修して元の打鉄式式に寄せてけば最終的には仕様通りの機体になるし。」

「そんなMSVみたいな……。」

「とりあえず完成…外側だけ。」

「これプロトタイプで通るかな…。」

ほとんどボン付けというか本当にくっ付けただけになったけどほぼ1週間で機体自体完成はした…したけど…。

なんか胴体丸々ドアン状態のアプサラスだしフロートユニットがズサ・ブースターだし腕はジオングのサイコミュ無しだし…脚はグフ（フライトタイプ）だし…ええ…私の打鉄式なんかガンダムブレイカーのモブが使いそうなずんぐりむっくりな見た目になってる…というか私の機体は腕の部分は無かった筈だけど…。

「よし…2人とも明日からは来なくて大丈夫だぞ。後は機体のグツチャグツチャなシステム面をISとして動かせるように直すだけだからね。」

「だ、大丈夫なんですか？これ両手両足胴体全部バラバラの機体なんですけど…。」

「大丈夫だって、この程度なんとかなるから。」

「…わかりました、それじゃあ失礼します！」

「あ、あの！本当に…本当にありがとうございました!!」

そういえばこの工場の隅に置いてある未完成の…本来の打鉄式、ずっと置いてあるけどあれはどうするんだろう…？

まあ、私が心配してどうにかなる話じゃないよね…今度ヒカルノさんにお礼にカップケーキを作って差し入れに行こうかな。

「………さてと、大人の責任を果たすのでしょうか。」



「ってわけできさ…意外と早く終わってよかったよ。そうそうその後帰る時に何かの縁  
について簪さんと連絡先交換したんだけどさ…3日経つけど何てメール送ればいいのか分  
からないんだよなあ…。」

「……なあ兄貴、機体完成って多分それ…嘘だと思うよ？…そんなガンプラ限定のプラ  
モ大会にF A : Gで参加みたいな真似できるわけないじゃん。」



「例えがよく分からないけど……つまり……」

「本当は仕様通りの打鉄式式を作らないとダメ……でも被害者の簪さんと原因に関わりがあるだけで本当は何も悪くない兄貴に迷惑かけられない……だからガワだけ適当な機体をでつち上げて2人を帰して、自分1人で打鉄式式を作り上げようとか考えてるとか……?」

「そんな……迷惑なんて俺は……!」

「まあ上手く言葉にできないけど大人が自分のミスの尻拭いに子供を巻き込むのを嫌がる気持ちはわからんでもないかな……」

「俺は……っ、秋十!俺ちよつと出掛けてくる!!」



ヒカルノさんにお礼のカップケーキ：ちよつと沢山作り過ぎちやつたかな：多すぎたら他の倉持の人達にも差し入れて事になればいいかな…。

例え継ぎ接ぎだとしてもやつとの努力で手に入れた専用機がちゃんと完成したのは嬉しい：そんな気持ちでヒカルノさんの元へ向かっていると数日前まで通っていた工場のドアの前まで辿り着くと話し声が聞こえてきた。

「篝火くん。もう充分だろう？もう休みたまえ…一体君は何時間不眠不休で打鉄式式にかかりつきりでいるのかね。」

「大丈夫です…まだやれます。」

「君……白式についてはそもそも政府からも『残った片割れの専用機は何としてでも確保するから入学までに間に合うように織斑一夏の専用機を優先しろ。』と話が来ていたのだ、君が篠ノ之博士の頼みを上に報告しなくてもどの道…式式の延期は避けられない事だったんだ。」

「それでも…それでも、結局あの娘から機体を取り上げる原因を引き起こしたのは私である事変わりありません。」

「責任感を感じるのはわかる…だがな、昼間は通常の業務を普段の倍の速度で終わらせては休憩も食事の時間を惜しみ式式の完成の為に眠らずに夜明けまでアプラサラスの

マルチロツクオンシステムの解析、機体の調整、荷電粒子砲のテストと……このままで君の身体が持たないだろう？……それに、あんな出来損ないの改造プラモみたいなハリボテを作つて嘘をついてまであの2人を帰してしまつて……確か更識簪はそれなりにI Sの開発整備に関して知識はあるのだろうか？なら今からでも呼び戻し」

「私は……私は大人で！技術者です！本来なら私達倉持がちゃんと完成させて受け渡す筈の機体を……『後から別の機体を作る事になったから作れません。』『間に合わないの諦めてください。』『間に合わせたいなら手伝ってください。』……これが大人が、子供へ言う言葉ですか？一端の技術者が言う台詞ですか？」

「……だが、どの道君一人でとてもじゃないが間に合う訳ないだろう!!諦めて白式の開発に集中したまえ!!」

「白式と並行して式式の開発に取り掛かつて構わないと篠ノ之博士からは許可は得ています。むしろ何故そう言われているのに式式の開発に誰一人回さないのですか？」

「っ……もう知らん！野垂れ死んでも知らんからな!!例え完成しても君の席がこの倉持に

あるとは思うなよ!!」

「……(´)勝手にどうぞ。」

「……………っ」

そんな…：知らなかった…：ヒカルノさん、私の為にそこまでして…：なのにそんな事も知らずに私は一人浮かれて…：っ！

あの時…：最期まで手伝うと言っていれば…：！あの時…：私が潔く諦めていれば…：！

気がつけば私は走り出していた…：私のせいでヒカルノさんが…：そう思うと、もうあの人にどんな顔をすればいいかわからなくて…：両手を振って息を切らしてその場から逃げ出していた…：持っていたカップケーキを落とした事も気づかなかった…：。

「お願いします!!ヒカルノさんと式式の完成を手伝ってください!!」

「お、織斑くん!?本人なのか…!」

「い、一夏くん…?」

「走って、走って…走り疲れて…足を止めると聞き覚えのある声と名前が聞こえてきた。」

「織斑くん…頭を上げてくれないか、そうやっても君の専用機を放り出して式式に回るわけにはいかないんだよ…。」



声が聞こえた場所…別の工廠の扉の隙間を覗き込めば…そこには土下座をして倉持の研究員に必死に頼み込む一夏の姿があつた。

「お願いします!!俺の…俺のせいで…誰かが悲しむ所なんて見たくないんです!!」

「やめてくれないか…私達だってやりたくて彼女の機体の製作を取り止めた訳じゃないんだ。大人の事情ってやつがだね…。」

研究員らしき人の一人…この人たちのリーダーらしい年配の人が一夏くんの前に膝を着いて子供に言い聞かせるように頭を上げるように話す。

そうだよね…政府の命令を断る訳にはいかない…I Sを扱う以上倉持は政府の膝元…この人たちにだって生活がある…。

「そこをどうか…どうかできませんか?」

「無理だよ…君に聞かせる話じゃないが、これは日本政府からの決定なんだ。我々の

意思でどうにかできないんだよ。」

「っ……………なら……………ん……………」

「え？なんだって？」

取り付く島もない相手に一夏くんが呟く、研究員が聞き返すと彼は勢いよく立ち上がった。高らかに声を上げた。

「俺は！専用機は受け取りません!!簪さんが機体を受け取るまで……………例え専用機が送られても！俺は一切受け取りはしません!!学校の訓練機以外乗ることは無いし、専用機以外ISに乗るなど言うなら俺はISには乗りません!!例え千冬姉だろうと束さんだろうと誰になんと言われても!!簪さんが専用機をちゃんと受け取るまで!!俺は絶対にISには乗りません!!……………そう政府の人に伝えてください。」

そう宣言して一夏くんは踵を返してその場を後にしようとする…。

誰かが声を上げた。

「それは困ったな…受け取って貰えないんじゃないか。」「

出ていこうとする一夏くんの背中へと、一人の整備士らしきおじさんが言葉を投げかける。

「……迷惑をかけているのはわかっています。それでも俺h」

「ならさつさと式式を完成させちまわないとな。」

「…え？」

「ちよ…ゲンさん！何を言い出して…。」

「確か政府の命令は…男性操縦者の機体を優先しろ…みたいな話だったろ？ならその坊やの専用機と一緒に式式の開発を進めても問題は無いだろ？」

「お、おじさん…！」

「だが…そんな事したら確実に入学までに機体を完成させるのは…。」

「なら間に合うように頑張ればいいだろ。そんな若いジャリが女の子の為に土下座までして…それに何もしてやらねえのは…男じゃねえだろ？主任さんよ。」

おじさんの言葉に主任と呼ばれた年配の研究員が肩を震わせる…。

職人っぽい人ってほしいゲンさんって呼ばれてるのは何だろう…？

「…私も技術者だ…目の前の仕事を放り出す真似なんて…本当は、したくはないんだ。」

「…なら、やってやろうじゃねえか？なあお前らもそう思うだろ？」

「……そうだ、私達は倉持技研だ…天下の倉持がそれくらいできないわけない！」

「そうよ！私達はあの千冬様の機体だって作ったのよ！きつとできるわ！」

「私は、式式を見捨てたりはしない…！そうだ！式式はゴーストファイターなどではない…！！」

「………よし、君たち！睡眠時間以外休めると思うんじゃないぞ！」

「よく言った！主任さんも道連れだぜ？」

「当然だ。私だつてどちらの機体も完成させられるならそれに越したことはないんだ。」

ゲンさんの言葉を皮切りに次々と研究員の人達も賛同していく…。

主任の人まで…。

「おじさん…みんな…ありがとうございます!!」

「その代わり、坊やも手伝って貰うからな？人手はいくらあっても足りないからよ。猫の代わりにブリュンヒルデの弟の手も借りさせてもらうぜ？」

「はい!!知識とかは自信ないけど…俺！何でもやります!!」

「あ、あの!!私も…手伝います!!」

「か、簪さん!?!なんでここに…?」

「役者は揃った…って所か。よし!やるぞ!!」

「」「」「おうよ!!」



やったぜ。 メール投稿者：世界初男性操縦者（兄）

年配の開発主任のおっさん（60歳）と先日連絡先くれた特撮ヒーロー好きの眼鏡の嬢ちゃん（多分同い年）とヒカルノさん（25歳くらい）とその他倉持の技術者さん達（45人）を中心に打鉄式式を開発したぜ。

今日も明日も春休みなんで倉庫で機材と工具を持ってから滅多に政府のお偉いさんが来ない所なんで、そこでしこたま予算を注ぎ込んでやりはじめたんや。

3人で納期を舐めあいながら汚れてもいい作業着だけになり持つて来たマルチロツクオンのデータを3回ずつ解析しあつた。



しばらくしたら、データ解析が中々進まなくてコメカミがひくひくして来るし、焦りから解決の糸口を求めてデータ解析室の中でぐるぐるしている。

主任のおっさんに機体本体の製作を任せながら、ヒカルノさんのくれた塩飴を舐めてたら、先に嬢ちゃんがキレながらパソコンにコナ○コマンドをドバーつと打ち込んで来た。

それと同時にヒカルノさんもわしも怒りの声を出したんや。もう顔中、汗まみれや。

3人で出し合った意見をホワイトボードに纏めながら軽食のパンケーキにハチミツを塗りあったり、束さんに電話を駆け込んで遠隔操作でデータを解析させたりした。ああ〜くたまらねえぜ。

しばらく待ってから送られてきた解析データを見ると問題が解決してもう気が狂う程気持ちええんじや。

打鉄式式の機体のコアにマルチロックオンのデータを突うずるつ込んでやると残りの課題が荷電粒子砲と近接武装だけで完成が近い気がして気持ちが良い。

嬢ちゃんもヒカルノさんの胸に顔を突っ込んで歓喜の声を上げて居る。

機械油まみれの主任のおっさんの手伝いをしながら、思い切りビス止めしたんや。

それからは、もうめちやくちやにおっさんと嬢ちゃんとヒカルノさんと式式の完成の喜びを分かち合い、打ち上げで飲み屋でシャンパンをかけあい、二回もお巡りさんに未

成年飲酒の疑いで店から連れ出された。

もう勘弁して欲しいぜ。

やはり大勢で1つの事をにやり遂げると最高やで。こんな、男性操縦者を許してくれないか。

ああ、く千冬姉、早くに迎えに来ようぜ。

打ち上げに参加したけど酒は一切呑んで無いって信じてくれるなら最高や。

わしは弾の家の近くの公園前派出所、嬢ちゃんはいつの間にかいねえぜ、糞が。

弟想いの千冬姉、至急、メール返信してくれや。

作業着姿のままの弟をお迎えして、早く家に帰ろうや。

「少なくとも事の発端はお前にあるから黒ひげ危機一髪の刑で許してやる。」

「いや、このご時世でお酒飲んでないにしても居酒屋に入っちゃういっくんも悪いんじゃない……って黒ひげ危機一髪って何!? 穴は1つしか無いんだよ!」

「飛び出るまで何本でも押し込んでやる。」

「ゆ、許しと」

「牙突零式っ！」

ぬふうっ

主人公に勝てないけど諦めはしないもう目覚めたオリ主

夏休み序盤、包帯はまだ取れないが充分回復し退院した私と秋十は一夏を連れて家に帰り、ついでに同じく退院した山田くんを誘って教師二人の宅飲み洒落込む事にした。

……したんだが。

「たまには俺にISを動かさせろよ!!」

「いつも動かしてるだろ!?!いきなりどうしたんだ!」

庭に転がりでて何を喧嘩してるんだあの愚弟共は…あとなんで一夏は青、秋十は黄色でそれぞれスーツを着用しているんだ…。

「世界初の男性操縦者としてチャホヤされたいと言っているんだ！それをわかるんだよ兄貴っ!!」

「俺はお前と違って世界初以外特にネームバリューが千冬姉の弟ぐらいしか無いんだぞ！…というか今更何言ってるんだよ!!」

「俺だって世界初で世界最強の弟って肩書きで人生イージーモードで女子にチャホヤされたいんだ！何故それがわからん!!」

「そこで山田先生と宅飲みしてる…女手一つで俺達を育て上げた千冬姉の前でもういっぺん言ってみろ!!」

「俺は織斑一夏になりたかったんだ!!」

「そうやって誰かに成り済まさなければ幸せになれないと思っ  
ているからっ!!」

「世界は！人間の全部を幸せにできやしない！」

「幸せになろうとする意思があれば!!人間の知恵はそんなもんだ  
って、乗り越えられる  
！」

「ならば、今すぐ鳳鈴音にええ乳をさずけてみせろ！」

「貴様をやつてかr…失礼だよ!?!別に鈴は貧乳だから不幸せとか  
じゃないだろ!?!鈴はペ  
チャパイでも必死に生きてるんだぞ!!」

お前も失礼だぞ一夏…。

「あの…織斑せんs…先輩?なんで織斑くんと織秋くんが外の庭で  
取っ組み合つてゴロ  
ゴロ転がりながら口論してるんですか?」

「多分秋十が私のストゼロをジュースと勘違いして一夏と一緒に飲み干したからじゃないか？」

「ええ……」

まあアイツらの口喧嘩なんぞ……シチューにご飯はセーフかどうかだの、パクチーは美味いか不味いかだの……宇宙世紀以外のガンダムを認めないのはおかしいだの……くだらない話ばかりだから放って置いてても大丈夫だろう。

……まあ私は逆にアナザー以外は乙乙しか見てないんだが。

「だいたい立場が入れ替わったとしても俺はお前のISは白式だぞ!!それに俺はIS委員会に所属したりしないから改造の許可が降りないからパーツ増設して強化なんてできなくなるぞ!!」

「どうしてそんなことするの兄貴……」



「俺は政治に関わる気が無いからな。 I S 委員会なんて関わったら絶対面倒事になりそうだし。」

「面倒事って…まあ I S 学園の防衛用って名目でガツガツに軍事利用前提の I S とか設計させられたりするからあながち間違いじゃないけど。」

「ついでに立場逆転したとしても、俺は I S 委員会所属の初心者パイロット…秋十は特に I S 改造する権限のない整備科志望の 1 年生って…むしろしょぼくなってないか？」

「ええい！なんやかんやで女子にチャホヤされればそれで構わん!!」

「俺に成り代わりたいうって言うなら入学初日に箒の裸見て木刀でぶっ飛ばされてセシリアのサンドイッチ食べて地獄を見て無人 I S に吹き飛ばされて入院してみろや!!!」

そう言ってまたゴロゴロと取っ組み合いながら庭を転がりだして…喧嘩といっても口喧嘩だけで後は 2 人で転がってるだけだ n…あつ一夏が秋十を巴投げしてお隣さ

んの塀の中に放り投げやがった。

「止めなくていいんですか？」

「なら山田くんが止めてきてくれないか？ 私は今ストゼロを自慢の肝臓で処分するのに忙しいんだ。」

「私も熱爛で喉を潤すのに忙しいので無理です。」

「そっか。」

「ああゝゝ…頭痛い…。なんで俺は兄貴と一緒に寝てんの？」

「ん……お前が昨日『一夏のにーと一緒に寝る！決定！』とか言ってたっけ？」

「は？..」

まさかジュースと思いきやストロングゼ〇とは…少ししか飲んでなかったから酔い  
はすぐ覚めたけど秋十はなんか気持ち悪い甘え上戸になってたなあ……グラサンノー  
スリーブに抱き着かれるとか頭おかしなるって。

「うわあ……千冬姉……」

「書き置きだ……『私の心の友ストゼロを飲んだ罰として後片付けを命じる……弟達を愛する姉より。』……取ってつけたみたいに愛するとか書きやがって……どうやったら宅飲みで2人分のランジェリーと局部を隠せそうなお盆が2枚ずつ散乱するんだよ。」

「俺、朝ごはん用意するから先に片付けしてくれよ秋十。」

「朝はトーストだけでいいから……うわ！ヌメヌメしてる、気持ち悪っ。」

酔っ払った女教師2人に酒の勢いでナニがあつたのかは考えないようにして俺は昨日千冬姉達の酒のツマミに在庫を解放して空っぽになった冷蔵庫からジャムやマーガリンを用意してからトースターに食パンをセットする……秋十が下着類片付けるまで台所で料理するフリしてようかな。

「兄貴…俺さ…ガンブラで武器と上半身作ってる時が一番楽しい。」

「気持ちわかる…俺も千冬姉のプラモ勝手に組み立てた時そうだったよ。」

「それで下半身で萎えるんだよ…下半身の無いGPシリーズとジェガン達が部屋にあるんだよ…。」

「1つくらい下半身も作ってやれよ……。」

朝食を済ませて2人で残りを片付け終わる頃、ピンポン……とインターホンがなる。そういえばラウラが一緒にスマブラやりたいとか言ってたから家に誘ったつけ…。

「はい、今受け取りまーす。」

注文したガンプラの宅配と勘違いした秋十が一足先に玄関に向かう、俺もそれに続いて玄関に行く…。

「おはよう一夏！それに秋十！先程、教官とすれ違ったが山田先生が何故か織斑教官にもたれかかって2人くつついて歩いてたが…多分夏バテかなんかだろうな…：エアコの効いた室内でも2人とも油断はするんじゃないぞ？」

「やあラウラさん、大丈夫大丈夫。俺と兄貴は意外と頑丈だから。」

「おはようラウラ、そうだな…子供の頃に一回秋十と兄弟揃って風邪ひいたくらいだっけかな？」

「やつほー！ダーリン♡退院したって聞いたからフランスから帰国して来ちゃったよ。」

「ハニー！♡…ごめんね、夏休みはハニーの実家でデュノア夫妻に挨拶する予定だったのよ…。」

「ダーリンが無事ならそれで構わないよ…あ、お邪魔するね、一夏。」

「おう、弟の未来のお嫁さんなんだし実質シャルも織斑家みたいなもんだから大歓迎だよ。」

そういえば秋十が核爆弾みたいなIS作って、それに吹き飛ばされた千冬姉達IS学園教師が入院して…秋十も秋十で、それにキレた東さんにボコボコにされて後追いで入院したんだっけ…。

暑い夏場の玄関前でいつまでも立ち話とは行かないし、家に来たラウラとシャルを早速中へ招こうとして…：目が合った。





「はい、ダーリン…あーん♡」

「あー…あむっ！ハニーのケーキ美味しいう♡」

「それセシリアが持ってきてくれたケーキだからな？」  
「相変わらず人目も気にせずに…このバカツプル…。」

イチヤつく秋十とシャル、それを見て壁を殴りたそうにしている鈴とツツコミを入れる  
ラウラ……なんか睨み合ってる筈とセシリア……場所が教室から自宅のリビングに

なっただけで結構いつもの光景に逆戻りしてるなあ。

「えつと……あう……。」

簪だけなんか初めて女子の部屋に来た男子中学生みたいになってる………なんか可愛いからもう少しこのまま眺めてようかな…。

「所でみんな女の子な服装だけどラウラさんだけなんか……チャラいな。」

「これがナウでヤングでホットでクールだとクラリツサが言っていたからな、それにフアツションに男も女も軍人も無い。」

グラサンノースリーブな秋十がブーメラン発言してるけど……確かに、自慢げにラウラ・ドヤ顔ーデヴィツヒになってるラウラの服装……斜めにずらして被ってるメンズキャップに黒いシャツ、首元と手首にはこれでもかと金色のアクセサリーをジャラジャラ付けて……ダボダボのズボンにカラフルな靴下………一昔前のラッパームみたいな格好してるな、ラウラはちよつと学生生活エンジョイし過ぎなんじゃないかな……。

「それじゃあスマブラやろう…と思っただけど昨日は兄貴とISバーサススカイやってたからプレステ外して配線し直さなきゃいけないくてちよつと時間が掛かるんだよね…：どつかのアホ兄貴が『織斑家において出した物は使い終わったら1日以内に片付けること』とかルール作るから…。」

「プラモのランナーやらジャンクパーツ、ガンダ○メーカーに空箱で部屋の足の踏み場を埋め尽くす弟、ビールだのおつまみだのゴミを散乱させてリビングをゴミ捨て場にすゝる姉さえいなけりゃそんなルール作らなかつたよ。」

「ダーリン…：片付けはちゃんとしようよ。それでシャアザクの角無くして散々大騒ぎして隣の部屋でお昼寝してた本音さんがガチギレして『ぶちのめすぞ変なノースリープ野郎』って怒鳴られてたよね？」

「あつたわねそんな事…：キツネの着ぐるみパジャマ姿で秋十の顔面目掛けてシャイニング・ウィザードしてっけ…。」

「ああ、鈴も現場見てたんだ…あの後ダーリンが脳震盪で倒れて2日ほど意識戻らなかったんだよね。」

「……さーと、Switch何処にしまったかなあ〜。」

あ、逃げたよこの弟…。

「じゃあその間に…スマブラをやらせてもらう御礼に…というわけじゃないが私もゲームを持ってきたんだ。」

　　といってラウラが取り出したのはバルバロッサって名前の粘土をコネてそれが何なのか当てるボードゲーム…らしい。

「スマブラやるまで時間掛かりそうだからこれで時間を潰そう。」

「ラウラさん？それだとスマブラの起動準備する俺が仲間はずれなんだけど…。」

「いいな、このゲームのルールなら誰でも簡単に遊べそうだ。」

「篠ノ之さん？俺の事無視して話進めようとしてませんかね？」

「それじゃあラウラにルール教えて貰いながら遊びましょっか、習うより慣れろって言うし。」

「鳳さん？無視されると俺泣いちやうぞ、俺泣いたら湯b：姉ちゃんきちやうぞ？」

「今の発言千冬姉にLINEしておいたからな。」

「そんな殺生な兄貴!？」

「よし、私が最初に粘土を完成させたから私から始めるとしよう。」

「得点を手に入れるにはみんなの作った粘土が何なのか当てればいいんだよね？」

「その通りだシャルロット…この場合は…鈴が私に質問する事ができるな。」

「じゃあ早速質問させて貰うわね？…これは生き物？」

「そうかもしれないな。」

「これは自然界にあるもの?」

「そうだな。」

「これは特定の生き物?」

「違うな。…『違います』の返事が出たらもう一度質問するか回答ができる、質問して違うと言われたらそこで試合終了ですよ?」

「なんでアンザイ先生になったのよ…じゃあ答えるわよ…。」

「それh 「終わったからスマブラできるよ?」

鈴が答える直前で……タイミング悪いな秋十……。

「……………これはキノコ……かしら？」

「NO」

「は？」「は？」「は？」「は？」

「The Answer is ……」



「おっげい。」

「(・8・8)( )」

「( ) (・8・8)( )」

「うわビックリした!?!なんでみんないきなり激しくデンプシーロールしながらパンツアーフリート歌い出すんだよ!?!」

「まあバズってたから真似してみたかったし……。」

「秋十は秋十で何言ってるかお兄ちゃんわからないんだけど…。」



私の名前は居村望……前はMと名乗っていたがその名は捨てた……全く、あの第2回モンド・グロツソの日、オータムの馬鹿がしくじったと聞いて助けに行こうとスコールから預かった戦闘員達と奪ったラファール・リヴァイヴに乗って現場に向かおうとすれば道中で待ち構えていた織斑千冬に一撃で全員撃墜されるわ、落下途中でラファール乗り捨てて路地裏に落ちてみればシールドエネルギーが切れても往生際悪く抵抗しようとした戦闘員の小型ミサイル乱射の巻き添え喰らうわ、気がついたら病院で現場で爆発に巻き込まれた観光客と勘違いされて危うく日本大使館に連行されるわ、ISもパスポートも無いから2ヶ月かけて陸路でアジトに戻る羽目になるわ、戻ったら戻ったで組織は既に壊滅してるわ、組織無くなつたからストリートチルドレン生活強いられるわ……本当に散々な目にあつた……。

適当な奴から財布をひつたくろうとしたら相手が運良くスコールで、スコールが警察の目を掻い潜るために潜伏してるIS委員会に入れてもらえて……そしたら織斑千冬の弟の片割れのグラサンの方と出会って……私の正体を知れば似たような目標を持つてるからと何か同情してくれて私に織斑千冬を倒す機会を与えてくれて……そこまでは良かったんだ。

やたら威力の高いバズーカを装備したISで織斑千冬を文字通り吹き飛ばす事に成功したが……。

「うう……まだ背中が痛む……。」

まさかバズーカの中で精製される荷電粒子の排熱がろくにできなくてISがフアラリスの牡牛状態になるとかあのグラサンノースリーブ馬鹿じゃないのか？ナノマシンのお陰で火傷跡は一切できなかつたが死ぬかと思ったぞ……絶対防御貫通する熱量とか殺す気しないだろ…パイロットも敵も。

まあいい、退院した織斑千冬にあのグラサンからくすねた予備のIS…ツダ初号機とやらでもう一度確実にぶちのめしてやる……モンド・グロツソから色々あり過ぎて何で織斑千冬を憎んでるのかももう覚えていないが一発痛いの喰らわせて全て終わりにして…あのグラサンから慰謝料分捕って人生をやり直そう……パン屋を始めるんだ…。



よし、秋十お兄ちゃんとスコールに頼んでIS委員会の正式なパイロットになろう。  
……関わりたくない。



主人公に勝てなくても嵐の中で輝いたオリ主

秋十がシャルロットに出会う少し前…

「お邪魔します。」

「おう！ ゆっくりしてけ。」

俺の名前は五反田弾、絶賛彼女募集中のピカピカの高校生だ。

それで目の前にいるイケメン双子が兄の織斑一夏と織斑秋十…俺の中学からの友達だな…誰に説明してるんだろ俺。

「いやあ弾くん、久しぶり！ 相変わらず彼女できない顔してんね。」

「うるせー、そういう秋十はどうなんだよ?」

「ほら…俺は打倒兄貴に集中してるし?それに俺の理想はパリジエンヌだし?べつつに…まだ恋愛に現を抜かす時期じゃないし?」

そう言えば秋十はパツキン…パリジエンヌが好きとか言ってたな…一度もそんな相手に会ったこと無いくせに。

というか相変わらざるのグラサンノースリーブだな…中学の頃も学ランとジャージの袖を引きちぎってたし、そのせいで「イケメンだけどファッションセンス無い人」みたいな評価で兄の一夏と比べて秋十はそんなにモテて無かったなあ…まああん時は俺がナンパに誘うまで本当に一夏一筋だった所も本当にあるけどな。

「まあ一夏の方h」

「弾くん?」

「あ、す…すまねえ…。」

「ん？どうしたんだよ？」

「え？ああ！いや！なんでもねえよ!!」

やつべ、危うくまた一夏の事茶化し過ぎて秋十にキレられる所だった……一夏のやつ……ISのせいで女尊男卑社会になったのと千冬さんが有名になりまくって女子のファンクラブがあちこちにできたのもあって『自分に告白してくる女子はみんな俺じゃなくて織斑千冬を見てるだけなんじゃないか……織斑一夏を見てくれる人はいないんじゃないか。』とか思い込んで無意識に恋愛事に気づかないフリしてる……って秋十が言ってたからな。

「何でも無くないだろ？……そう言えば弾、お前最近俺に唐変木とか言わなくなつたよな？」

「え？ああ……まあ一夏には一夏のペースつてもんがあるだろうし！な？」

「それより兄貴。ISバーサススカイの新作で遊ぼうよ？DLCでセシリアさんと嵐さんの機体が見えるらしいよ？」

「お！本当か？俺、鈴の甲龍使ってみたいな。」

「え？俺どつちも高いからダウンロードして無いけど…。」

「えー…なら買ってよ弾くん。」

「いやいや、秋十…弾に無理強いさせようとすんなって…別にDLC無くても充分面白いし。」

「ん…お、兄貴！『DLC全部購入するとキャンペーンモードに特別ミッション追加！クリアーするとプレイキャラに『織斑千冬・暮桜改』が使用可能になります。』だってさ。」

「いやいや、いくら千冬さん大好きな一夏でも…。」

「買え。」

「えっ?」

うわびつくりした…一夏がいきなり千冬さんみたいな表情でヴィラン連合仕切って  
そんな声出してきたぞ…。

「か… 買えと言われても、自腹は切れません…。」

「PlayStation storeの残高があるではないか… 買え。」

「ぶ、PlayStation store…!?身に覚えが…:…つてそれ妹のアカ  
ウントですよオオオオ!?」

というか蘭…アイツ勝手に俺のプレステでアカウント作るなや!!

「関係ない 買え。」



「おかしい!!完全に背後を取ったのにあんな理不尽な反応速度で斬り伏せてくるだなんてこつちをなんだと思ってるんだ!!!」

「死角を狙えば見えてるかの様に避けるしこつちは見失った途端に一撃で倒されて…ふざけてるのかこのゲームは!!」

「あ、あの…先輩?それ敵キャラ現役時代の織斑先輩ですよね?」

「黙ってる山田くん!!くそ!後ろにも目を付けてるってのかよ!!」

「あの…ちーちゃん? 独身女三人集まってする事が酒飲みながら格ゲーって悲しくならないの?」

「お前が持つてきたゲームだろうが!! そうやって脇から見てるだけで! 人を弄んでばかりで…っ!」

「ちーちゃん!?! アスランじゃなかった錯乱しないで!?!」

「現実なら上手くできるのに…!! 理不尽を押し付けて楽しいのか!?! 答えろ束ツツ!!」

「凡人共は現実の方が上手いかなってんだよ!!」

「現実で世界最強ともなると現実とゲームは違うってセリフがこうも違う意味で伝わものなんですかね…。」



「東え!!コントローラーにイメージ・インターフェイスを搭載しろ!!この仏頂面女を倒すまで絶対このゲームやめないからな!!」

「I Sの技術をゲーム攻略に使うんじゃない!?あとその仏頂面女はゲームのお前だよ!?!」

「あの…このマンション、壁が薄いので余り叫ばないで欲しいんですけど…というか織斑先輩も篠ノ之博士も何で私の部屋に遊びに来たんですか…特に宅飲み約束とかしてないのに。」





「あのね兄貴…やっぱり弾くんに謝ろうよ…。流石にアレは悪いって…。」

「お前だってDLCの山田先生とか二代目ブリュンヒルデとかめっちゃ欲しがってただろ?」

「……………まあ、後半辺りは俺がゴネる弾くんからコントローラー取り上げて爆買いしたのは否定できないけど…。」

「夏さーん!♡どうかしたんですか?」

「い、いいえ!!なんでもないです!!」

「そっか、じゃあお兄をシメるまでもう少し待っててくださいね♡」

「はーはい!!」

「しかしここに来るのも久しぶりだな…。鈴は逆に常連客何だな？」

「そうね…：そういえば箒って五反田食堂で…飯食べた事無いわよね？」

「ああ、深い理由は無いんだが…：…そういうタイミングに限って腹が空いてなかったかな。飲食店で何も頼まずに居座るなど言語道断だ。」

「なら今日は奢ってあげるから食べてきなさいよ。五反田食堂で食事した事無いなんて人生の半分損してるわよ？」

「ほう…鈴の（日本の）実家の中華料理店で鍛えられた私の舌を満足させられるかどうか…試してやろう!!」

「何言ってるのよ……。」

休みの日に偶然を装って一夏に会いに来ようとしたが、留守だったし神社に帰る途中に、娘のＩＳ学園転入に合わせて日本に戻ってきた鈴の御両親に捕まって家に連れ込まれては『鈴ちゃんと遊んであげてね?』とか言われて鈴と２人で外に出されて……ドアが閉まると同時に男女の艶かしい声が聞こえてくるとか鈴の御両親はどれだけお盛んなんだ……『大丈夫、聞こえないわよ』……って丸聞こえしてたからな…鈴の気まずそうな顔が未だに頭から離れん……一夏を想うもの同士集まってガールズトークでも花を咲かせようと鈴の提案で五反田食堂に来た訳だが。

ちなみに蘭は中学時代に弾を通して知り合った…一目見て一夏を巡るライバルだと気づいた私と鈴はその日のうちに仲良くなつて２人で色々可愛がつてやったもんだなあ…。

「いでででで!? 本当だつて! 本当に一夏が…! アルゼンチンバックブリーカーやめてくれえ!!」

「一夏さんがそんな事する訳無いでしょ!! 変な嘘着くなお兄!!」

「いや、蘭…本当に俺が全部悪くて…あの? 蘭さん?」

なんだこの状況…弾が蘭にプロレス技決められてる…え? どういう事だ?

「どうしたのよ蘭…弾が何かやらかしたの?」



「あつ！鈴さん！それに箒さんも！聞いてくださいよ！！お兄が私のお金で勝手にISバーサススカイのDLCを爆買したんですよ！！」

「いや、だ、だから一夏が…。」

「嘘付け！秋十さんが…『兄貴が…ヒエ…だ、だだ弾くんが！』うおおおおお！千冬さんの下乳うおおおおお！」とか言いながらやりました！！』つて一夏さんに後ろからあすなろ抱きされながら証言してたのわすれてないからね！」

「いや、秋十…一夏に首絞められて脅さr」

「篠ノ之流アルゼンチンバックブリーカー！！」

「ぐおおあああつ??  
!!?」

「勝手に私の実家をプロレス道場にするんじゃない!？」

「流石は蘭…私と箒に鍛えられただけはあるわね。」

いや、確かに蘭に武道を教えたが痴漢撃退に簡単な奴を教えただけだぞ……こんな大の男を持ち上げてグルングルン回るような鍛え方絶対してないぞ…。

「本当にすいませんでした…。」

なんかヒソヒソ話していたのは聞こえていたから秋十に篠ノ之流尋問術『夜斬之玉津神』……まあ『縮んどるぞ！しつかりせい!!』と言いながら握り締めるだけの技なのだが…まあ秋十の玉を掴んで質問してみれば一夏が珍しく暴走したというわけか…一夏ってこんな事する奴では無いと思っていたが……私が想像していた以上に千冬さん大好きっ子だったのかもね。

尋問が終わり床に正座する織斑兄弟へ鈴がジト目で見下ろしながら私に続いて口を開く。

「つたく、いくら弾でも濡れ衣着せるなんてやっていい事と悪い事考えなさいよアホ兄弟。」

「秋十ならともかく…一夏！お前がこんな真似をするなんて幼なじみとして情けないぞ！」

本当に他人に迷惑かけるボケは姉さんか秋十だけにしてくれ…まあ2人ともそこま

で暴走した事は……ダメだ、片や無人機を学園に落として暴走させて、片や夢の国にシニールストレミングばら撒く極悪人若干2名とか擁護できなさすぎる。

「篠ノ之さんが地味に嵐さんと蘭ちゃんにマウント取ってる……」

「でもよお箒……千冬姉だぞ？」

「だったら自分のアカウントで買えばいいだろう!! 全く……見ろ!! 弾がバックブリーカーされ過ぎて腰が曲がったまま戻らないぞ！」

「ちようど3時と4時の中間くらい曲がっちゃったよ……」

ギャグマンガ日和に出てくるグラ郎みたいになってる赤髪チャラ男なんて何処に  
ニーズがあるんだ……。

「まあまあ箒さん、一夏さんも悪気があった訳じゃ無いんですから……」

「悪意無しで他人のアカウントの金使い込む方がヤベー奴だと思っただけと…。」

鈴の言う通り一夏もやばいかもしれんが人体の骨格を無視した曲がり方してる兄に無反応の蘭はもつとやばいんじゃないだろうか…。

「もういい!! 画面から出てこい!! プリユンヒルデを教えてやるツツツ!!!」

「落ち着いてちーちゃん!? たかがゲームだよ!? おい! 3LDKで物干し竿振り回しちやダメだって!!」

「せめて洗濯物外してください!? さつきから私の勝負下着がばら撒かれています!!!」

「と、まあ逆からバックブリーカーすれば元通りというわけです。」

「大丈夫？ 弾の腰が使い古したガンブラ並にヘタレてない？」

「大丈夫だ一夏、ちよくちよくバックブリって慣れてるから。それに身体柔らかい男つて……なんかモテそうだろう？」

「弾……腰だけ首の座ってない赤ちゃんみたいになってる男は正直ナシだと思っぞ？」

「私も箒に賛成。」

「私も腰がグワングワンしてるお兄は無いかな…。」

やった本人すら否定するのは酷くないだろうか……とりあえず一夏にはお仕置として…アレだな、私がしばらく学園の剣道場で付きつきりで根性を鍛え治してやる必要があるな、うん。

決して鈴やセシリアに抜け駆けして一夏との時間を過ごしてやろうとかそんなの無  
いからな？

そう思っていると鈴から死刑宣告が放たれた。

「とりあえず全部千冬さんにチクつとくわね。」

「えっ……。」

「兄貴さまあ。」



「言い出しつぺは秋十つてしつかり伝えとくから。」  
「えっ……。」

多分……今の織斑兄弟ほど『絶望』の似合う顔をしてる男はいないだろうな。

「はい……揉み合いになつて……そこからズブリといきました……今思えば私はゲームごときに熱くなつて……とんでもない事をしたと思つています。」

「先輩！私は刑事さんじゃありませんよ！？現実逃避してないで抜くの手伝ってください  
！！」

「は…破城槌みたいに押し込みやがった…た、束さんじゃなきや死んでるよお…つ」

「むしろこんなに啜えこんで生きてるんですか篠ノ之博士…。」

# 主人公に勝てなくても挑戦するのがオリ主

前回より数日後

「弾、バカな愚弟共が済まなかった。」

「い、いや頭を上げてください千冬さん！俺は別に気にしてませんから！とりあえず店先で土下座はやめてください！」

親父から千冬さんが呼んでるって言われて店前に出てみればそこにはコクピット吐き出した後のサザビー並にズタボロにされた一夏とファイギュアに出てた本編で見覚えの無いポロポロのレガンダム並にギツタンギツタンにボコられて正座してる秋十、そして土下座する千冬さんの姿があった……爽やかな朝には見たくない光景だなあ。

「とりあえずはコレを受け取ってくれ。」

「ええ!?!そんな、悪いですよ……こんな分厚い封筒……」

「心配するな、金ならそのI S委員会所属のグラサンノースリーブの財布から出した……謝罪の気持ちというやつだ。」

「そんな……こんなに……」

身体を起こした千冬さんが懐から分厚い何かが入った茶封筒を渡してきた……え? いるの? こんな受け取っていいのか俺……ってあれ? この封筒の中身……。

「ゲーム……カセット?」

「M O T H E R 1 & 2 と M O T H E R 3 のカセットだ。心配するな、ちゃんとゲームと

「して動くし全クリまでちゃんと進められたぞ。」

「本当に気持ちじやないですか…しかも一通りゲームクリアし終わってから渡すって完全に友達に要らないゲームあげるノリですよね？」

「だがMOTHEOは不朽の名作だぞ？」

「まあそうですけども……。」

「あとこれは一夏にあげる予定だったお年玉だったんだが…。」

「ちよ!?!そんなの頂けませんって!一夏に渡してやってくださいよ!!」

「いや、謝罪は受け取ってもらおう。」

「いやそんな申し訳な…ってこれゲームミックOじゃねえか!?!なんすか!?!これでMOTOERシリーズやれってか!!普通に画面の大きいゲームボーイアドバンOの方を使うわ

!!

「金を渡すとしても受け取るべきなのは蘭の方だからな。」

それは確かに……。

千冬さんが帰った後、妙に申し訳無さそうにしてた蘭が昨日のバックブリーカーのお詫びとして俺に焼肉を奢ってくれた。

チラツと見たら蘭の財布がグツチだったよ。

…え？俺の出番もう終わりなの？

「それで…一夏と秋十は仲良く千冬さんの篠ノ之流ZZパイロドライバーをしこたま食らったせいで寝込んで欠席ってわけなのね。」

「鈴……私の実家はプロレスなんか教えてないしZZガンダムは劇中でパイロドライバーバーなんかしない。」



時は現在

「はいダーリン…あーん♡」

「あーむ…美味い！クレープもそうだけどハニーの愛情が伝わって2倍美味しい!!」

「カップル仲睦まじいのはいい事だな。」

しかしアレだな…クラリツサは「バカップルのそばに居ると口から砂糖が出る怪奇現象が起きる」とか言っていたが微笑ましいだけで特に何も無かったな…まあクラリツサは日本に行ったことなんて殆ど無いらしいから嘘は言っていないのだろうな、情報が正確では無いだけで。

入学直後も「親しくなりたい異性に対しては『俺の嫁だ』と宣言する風習があります。」とか言ってたから一夏と秋十に『私の嫁になってくれ』と満面の笑みで頼んだら箒とセシリアに何故か怒られたし…クラリツサに聞く前に自分で調べてみる癖を付けた方がいいかもしれないな…いや、インターネットは嘘ばかりってネットに書いてあったしやはりクラリツサの情報も蔑ろにする訳にはいかないか？

「いやあ、ボーデヴィツヒさんがたまたまクレープ屋さんに立ち寄ってくれたお陰で助かったよ。まさかミックスベリーのクレープの正体が2つのクレープを2人で食べさせ合いっこする…なんて思いも寄らなかつたな。」

「まあ食べさせ合いっこなんて僕とダーリンは2人でご飯食べる時いつもやってるからね……。ありがとうラウラ。」

「私が教える前に既に口移しで食べさせ合いっこしてたから私は実質何もしていないんだが……。まあ感謝は受け取るとしよう。ツナマヨクレープ奢って貰えたしな。」

「つて、そうじゃない!!!」

急に秋十が立ち上がりながら叫ぶ、どうしたんだ？公共の場で口移しするのはマナーが宜しくないことに気づいてくれたのか？

「夏休みに入ってから……いや！ハニーとイチヤイチャしまくるようになって……俺、兄貴と勝負してねえじゃねえか!!」

「あ、言われてみればダーリン夏休み中はIS作ったり入院したりセシリアの専用機ボロクソに言ったり……一夏と勝負してないね。」

そう言えばそんな事してたな秋十、普通に忘れてた。

「よし、今すぐ兄貴を倒す為のガチ機体を作ってくる!!」

「え？ダーリン！僕とのデートは!？」

言うが早いか秋十は凄い勢いで走り出し…タクシーを拾って帰って行った。え？  
シャル置き去りにしちゃうのか？

「だ、ダーリン……………」

「……………なあ、シャル…私と一緒にゲーセンでダンレボするか?」

「……………する。」

「つーくるんご♪つくるんご♪インフィニット・ストラトスつくるんご♪条約なんかしらねえんご♪バレたら逮捕んご♪（んごー）」

「あいつはオルコット♪（んごー）」

「あつきー？なんで今向こうの渡り廊下歩いてたセッシー指さしてたの？」

「いや、語呂が良かったから…。手伝ってくれてありがとね、のほほんさん。」

「そっか…。どういたしましてあつきー、でも今度お菓子ご馳走してね？」

「もちろん！約束通り美味しいチョコケーキ食べさせてあげる。」

「やったぜ。」

「さーとと…コイツで兄貴と勝負してくるか。」

結果から言えば秋十は敗北した。

久しぶりに俺に挑戦してきた秋十は「テンペスタ・スクランブル」という空戦特化形

の機体で戦いに挑んだ。

この機体はテンペスタの右腕を丸ごと大型の荷電粒子砲に取り替え左腕は肩部に最高速度の赤椿を補足できる大型レドーム、腕部に牽制用マシンキャノンと両腕共にマニピュレーターを完全に排除して高性能な武装に転換、脚部には散布式ミサイルポッド、腰にはビームガン、背部には可変式ウイングに強化型のブースターを装備し飛行形態に変形すると頭部をすっぽり覆いグライダーのようになる……某ガンダム種のデザインみたいなアレだな。

実際こいつは可変ウイングによる揚力だけで空中飛行を行い、PIC等は武装を使用する際の姿勢制御のみに使うことで飛行しながら無茶な機動で射撃を行っても反動によつてバランスを崩す事がなかった。戦闘機のように飛び回つて一撃離脱戦法を行う、強力な武装を大量に装備しばらまくように弾幕を張ることで敵を近づけないようにするコンセプトらしく接近戦は一切対応できなくなっている、強いてあげれば某ジ・Oみたく腰のスカートアーマーに隠し腕がありそこからエネルギー・ブレードを展開し振り回す程度ならできるそうだ……その前に零落白夜で装甲諸共切り落とすちゃったけど。

試合は徹底して俺から距離を取り弾幕を張りながらアリーナの外周を飛び回る秋十



に向けて俺はアイツが作ってくれた白式用のライフル型荷電粒子砲を撃つも元々接近戦に持ち込まれなければラウラやシャル相手にも大立ち回りできる（逆に1度でも接近されてペースを乱されると誰が相手でも確実に負けるんだけどな）秋十には素人の射撃など軽々と避けていく、あつという間に撃ち尽くした俺は外付け武器の腕部2連機関銃を乱射しながら先回りをするように接近、秋十は射線から逃れようとバレルロールしながら向きを変えて俺から離れようとするが瞬間加速で雪片を叩き込むが右腕の大型荷電粒子砲の砲身で受け止められ秋十もその場で瞬間加速を行いゼロ距離で体当たりして俺を弾き飛ばした。

大型荷電粒子砲はデカすぎる余り飛行形態を取っている間は真正面にしか砲口を向けられない。腰のビームガンも腰の付け根を軸に縦にしか動かせないので後方は真後ろしか撃てないだろう。左腕のマシンキャノンはISが人型兵器で有る以上はうつ伏せの秋十から見て右後方それも斜め上に狙いは付けられない。

だからこそ俺は轢き逃げしてまた距離を取ろうとする秋十の背後、マシンキャノンとビームガンの死角を陣取って後を追う、ミサイルをばら蒔いて引き剥がそうとするが白式の推進力に任せて直撃する前に振り切る、ミサイルは通り過ぎた俺を追いかけようとして互いにつつかり誘爆し更にその爆風で他のミサイルまで吹き飛ばされる。

ミサイルを撃ち尽くした秋十は機体をクルリと回転させ背面飛行する事でマシンキャノンを俺に向けようとするが……なんてことは無い俺も移動してまた死角へと逃げ込む、意地でも秋十の得意なドッグファイトには持ち込ませない、その代わり俺も腕部の機関銃は使わず互いに攻撃を行うことなく追いかけてつこうが続く。

痺れを切らせた秋十が飛行形態を時ながらスラスターの推進で強引に俺の方を向いて大型荷電粒子砲を向けた、追いかけてこの最中にチャージしていたのか既に発射準備は完了していた。

砲口から吐き出された光を擦れ違うように避けて零落白夜を発動させて振り上げながら秋十へ急接近を仕掛ける。

それを読んでいた秋十は撃ち尽くしたフリをしていたのか腰のビームガンを俺に向ける、相手の隙を突いて接近し零落白夜を叩き込む……白式の必勝パターンなどお見通しなんだろう。

だからこそ俺は雪片を放り捨てるように両手を離しながら両腕を秋十へ向けて腕部の機関銃と単発式グレネードを秋十のビームガンと左腕のマシンキャノンへありったけ撃ち込みながら白式のスラスターを出力最大で噴かして秋十から距離をとる、千冬姉

から受け継いだ雪片を捨てた俺に虚をつかれたのか秋十は俺の攻撃をまともにくらい  
ビームガンは銃弾の雨に銃身をひしゃげさせマシンキャノンの弾倉へグレネードが直  
撃しどちらも小さく誘爆を起こす、慌てて無事な荷電粒子砲の再充填を行う秋十…一撃  
で決めるつもりだったのか最大出力を放った巨砲は排熱が間に合わない。

俺は雪片を展開し直して正面から秋十を切り伏せる事で勝利した。

「ありがとな兄貴！んじやまた後で!!」

「なんだと！やーいお前の……………あれ？」

「おいそれはどっちもクラリネッサの……………ん？」

「はあ……改築の済んだ実家の二階のベランダに腰掛けて飲むコーヒーはいつもより  
美味しい……」

「た、東様！そんな所でコーヒーブレイクなんて危ないです！それ完全にフラグです!!」

「はっはっはっ！大丈夫大丈夫、東さんちーちゃん並に運動神経あるから落ちないし…それに今日は何も悪い事してないからお尻の心配しなくていいしね。」

「で、ですが東さま…。」

「んもー…くーちゃんは心配性だなあ…誰かが庭で棒状のものを振り回してるなら兎も角……ベランダから落ちてても庭に背中を軽く打つだけだから心配ないよ…ほら、庭の隅っこで盆栽眺めてる東さんの父親を名乗る生命体から剣道でも教えて貰えば？」

「東さま…彼氏も結婚もできないから見せてやれない孫代わりに私を柳韻お祖父様と遊ばせてやろうという子心って奴が何処と無く溢れt」

「ぶふおつ?!…はー!?一向にそんな親孝行とか考えてませんけどー？天災たる東さんの仮にも遺伝子の繋がった男がボケないようにくーちゃんに相手させるだけです」

どー!?

「ふふっ…ふふっ…ではそういう事にしておきます。」

「……………と、言う事がありました……………せいっ！」

「そうなのか……………しかし、ISを作つて夢の為に家を出た娘がこんな可愛い孫を連れて帰つてくるなんて思わなかつたなあ…。」

「いえ、私は東さまに命を救われた恩返しがしたくて仕えさせて頂いてるだけで家族では……………」

「いやいや、東が言っていたよ。『可愛い娘を見つけたから自分の子供にする』……………つてね。」

「東さま……………っ。」

「クロエちゃん、素振りが止まっているよ？」

「あつ！はい！……………せいっ！……………やあつ！……………せいんとせいやつ！」

「最後の掛け声はやめようか。」

「悔しいけど正解。……孫代わりじゃないよ、くーちゃん……東さんにとってくーちゃん



は可愛い可愛い束さんの……って熱い!? コーヒー零し……うわ?! おちおちおち?! ベラン  
ダから……落ちる落ちる落ちいつ……。」

『誰かが庭で棒状のものを振り回してるなら兎も角……』

『今日は何も悪い事してないからお尻の心配しなくていいしね〜』

あっ……。

番外編、 I S 二次創作の主人公に勝てないオリ主に憑依してしまつた…

『I S 世界に転生したいとか言つてたからチートスペックのオリ主にしてあげました。』

間違いない……I S 学生服の白と赤のカラーを逆転させたノースリーブ、そして某フワトロ・ヴァギー○大尉そっくりなグラサン……こいつ……いや……俺は……。

「お、織斑秋十になつちまつたのか!？」

「急にどうした秋十? お前は元から秋十だろ?」

俺は何処にでもいる休み時間は寝たフリして過ごすタイプの中学生……ただ人と少し違う所を挙げるとすれば……I S 世界に転生して一夏をボッコボコにしてハーレムを作りたいて所かな。

まさか夜中ハーメ○ンのIS二次オリ主作品を読みながら、もしも自分が転生者なら読んでる作品のオリ主よりもっとカッコよく立ち回ってヒロインを惚れさせるシユミレーションをしていて…目が覚めたらグラサンノースリーブで教室のド真ん中である唐変木の隣に立っていた…。

え？ どういう状況なんだこれ!?

「あの？ 急に叫ばれてどうかなされたのですか？」

声がして振り返ればそこには心配そうにこつちを見る金髪英国チヨロイン…セシリア・オルコットがそこにいた…あれ？ コイツってたしか過去編で一言喋っただけでIS学園入学辺りからセリフが1回も出てこない筈じゃ…？

「大丈夫か秋十？ まあ目立ちたがり屋なお前がクラス代表立候補したい気持ちは分かるけど…緊張してるなら無理しなくていいんだぞ？」

「え？ あーいや、大丈夫だ！ 一夏は引っ込んでろ!! 俺がセシリアを倒して日本を馬鹿にした事を後悔させてやる!!」

「(秋十って他人を呼び捨てするやつだったっけ…?)」

「(日本の事馬鹿にした覚えは全くありませんけど…) まあいいですわ… 織斑先生、彼はI Sによる模擬戦でクラス代表を決めたいようですが… どうでしょうか? 無論わたくしも賛成です。」

「(グラサンで一夏とオルコットから見えていないが… 私弟ってこんなガッツリ英国代表候補生のパイオツをガン見するような奴だったかな…) … 分かった、では立候補者3名によるI S試合の総当たり戦を行い、勝者をクラス代表に任命しよう… アリーナの使用申請をするから試合の日程は追って説明する。以上!」

「「はー!!」」

「では秋十くん……こちらが君のI Sコア、そしてこの打鉄とラファールが君が自由に使っている機体よ。普段はその2機を使って、委員会から指令が下った時は送られてきた機体を使う事、但し改修等は自由に行ってくれても構わないわ……勿論、結果を出してくればだけど。」

「ありがとうございます！スコア……じゃなかった！えーつと……I S委員会の……偉い人の……。ナーバス原尾さん！」

この人たしか原作開始前に束さんに潰された亡国企業のスコールなんだよな……偽名なんだっけ？一夏が催眠ハーレムにポロクソにされるやつとか、強キャラが一夏に惚

れまくりなやつとか、一夏を倒せないやつとか、一夏が顔文字でしょんぼりするやつとか面白い作品なら大体読んでるけど…一夏に勝てなくても幸せになるのは別に読み込んでる訳じゃないからなあ…。

「……………今朝名乗ったばかりだけど、私はルーコス平野よ。（今この子私の本来の名前の方言おうとしてたわよね…。）」

「さてと……とりあえずこのI Sを改造するとしますか……。なんか憑依モノ特有ご都合設定で俺の頭の中には秋十のI S知識があるっぽいし……記憶とかはちよつとあやふやだけだな。……へっへっ俺だけの最強機体を作って一夏をボコボコにして、チヨロコツトを俺の嫁ラウラちゃんに来るまでの愛人にしてやるぜ。」

えーと、たしか秋十はI Sの破損した部品とかのジャンクパーツを集めて作ってたんだっけ……そうとなれば早速集めまくってやるぜ！ グラハムガンダ○とか作ってやるよ！

「はあ？破損したブーツ…？ある訳ないだろ、一学期2日目で機体を壊すような奴がい  
たら私が一発痛いデコピン食らわしてる所だ。……何？…『出席簿で殴らないのか？』  
だど？…：ほう…：秋十、お前は自分の姉が教育的指導とかほざいて生徒を道具で殴る阿  
呆に見えるのか…：そうか…：私…：そう…：見えるのか…：。」

「ち、千冬姉!?ほ、ほら!千冬姉つて体育会系っぽく見えちゃうから…別に誰も千冬姉を  
暴力教師なんて思っってないって!秋十もちよつとした冗談で言ったんだよ!ほら!涙  
拭いてくれよ千冬姉!!」



「はあ?…ブルー・ティアーズのビット?入学早々から壊すわけありませんわ…そもそもこれから戦う相手になんで国家機密であるI Sの…しかも第三世代兵装のビットを貴方に渡さなくてはならないのかしら?例え破損したとしてもお断りですわ。」

「ん〜…ごめんね？お姉さんとしては面白そうだから手を貸して上げたいけど生徒会長としては生徒一人に肩入れするわけにはいかないのよね。…あ、そうだ！整備科の生徒に知り合いがいるからその子に聞いてみたら？」

「よっしやあ!!あざあつす!!」

と、言うわけで集まったこのISの廃品パーツの山：ほんとにIS一機作れそうな量だな。

……え？このスクラップ工場に幾らでもありそうな錆だらけで油でギトギトの部品から使えそうなもの取り出してそこから作りたいISに必要なもの取り出すの？

たしか原作だと今日から一週間後に試合：それまでに完成させろって言うのか……？  
完成させた上で乗りこなせと？練習する時間とかあるの……？

織斑秋十……あいつ週一ペースでIS作ってたらしいけどいつ練習してたんだよ……  
ひよつとして完成したら即出撃してたの？そりゃ毎日研鑽してる一夏に負けるわ。

「まあ、待て待て……今は俺が織斑秋十なんだ。何処ぞの壺と紫ババア大好きおじさんに憑依したあの人みたいに上手くやれるはず……！」

とりあえずグラムガンダムは諦めよう。

「これは使える…これは駄目…これは…アウト…！圧倒的アウト…！」

まず作りたい I S の設計…！必要な部品や機材を割り出して…！リストとにらめっこしながらジャンクパーツを一つ一つ条件に当てはまるものを引っ張り出す…！そこからパーツを点検して使える物を選出して…！こびり付いた廃油と埃を取り除いて…！

「これ…どつちもプラグがメスじゃないか…！このパーツはデュノア社製品しか使えない…！こつちはサイズが大き過ぎて他の部品に干渉するから組み込めない…！こんな杜撰な設計でISを改造しろつての…！」

IS本体から改造しなくちゃいけない部分を分解…！装甲をひっぺがして…中のパーツを取り替え…付け足す…！接続部分は基本的に合わないから一つ一つ付け替え…！打鉄の規格に合わせる…！あと根本的に大きさが合わないパーツは選び直し…！

「改造して形が変わった分装甲を新規造形…今からでも間に合うか…板金屋…！足りるのか…！9万円コース…！！」

装甲も元の奴は使えないから作り直し…！別の機体のパーツに合わせてOSを書き直し…！デバッグして…動くまでやり直し…！

やることが…やる事が多い…！

I Sを自作するオリ主……凄…！こんな面倒臭い…作業の連続…普通に苦痛！今まで…メカニックキャラを活躍少ないと思ってたけど…そうだよ！メカニックが頑張つて機体を作つて整備してるから…パイロットが活躍できる性能を実現できるんだ…！知らなかった…！こんな…当たり前前のこと…！！

「あれ……秋十くん……？」

くそ…やる事が多過ぎるんだよ！…これ全部1人でやるとか無理ゲーだよ…やるけどさあ!!

二次創作の気な奴でオリ主が I S 自作するとかよく読んでたけど嘘つけよ！こんなので作れるわけねえだろ!!…ああそうだ、アイツらだいたい企業とか東さんとか味方に付けてたわ……ん？企業？

そうだ！俺 I S 委員会所属じゃねえか！なら委員会から人を送って貰おう!! 早速スーコル…じゃなくてラスカル美園さんに連絡だ！



「なら来週辺りに技術チームを送りますね、あと私はルーコス平野です。」

「なら間に合わないから要らないです。」

ダメだったわ…。

「はあ…人手が足りない…パーツも足りない…せめて束さんが居たらなあ…」

「呼んだ？」

「そしたら…って本人!?本物の篠ノ之束!？」

「いえす!あいあむ!チツチツ」

両足を取っ払われたI Sに文字通りガラクタなジャンクパーツ、そして散乱した工具で散らかった整備室でボケくつと現実逃避していると横から束さんが現れた、めっちゃビビるわ。

「で、どしたのあつくん?入学前にI Sに塗装してシャア専用ラファールとかランバ・ラル専用アラクネとかやってた人がいきなりI S改造に手を出しちゃって…塗装に慣れ

たとか言っていきなりプラ板とかパテ買い込んで改造しようとして参考にした動画みたいに上手く作れなくて途方に暮れるガンプラ初心者みたいだよ？」

「まさにそんな感じですけど…。」

「（あれ？あつくくん敬語使う子じゃなかったよね？）…手伝おうか？」

「え!?!いいの!?!」

「あんまり良くないけど…束さん今暇なのと…それと実は最近、可愛い娘ができて凄いい機嫌が良いからね！」

「おっしや！勝てるわ！この勝負勝てるぜ!!」

ニコニコ顔で助けの手を差し伸べてきたお尻ポツカリ兎の言葉に俺は高らかに腕を振り上げてガッツポーズを決めた、邪悪なドラえもんと名高い束さんが居れば負ける気しねえぜ!!

「で、東さんにどうして欲しい？今なら先着一名様に東さんお手製の第三世代機をプレゼントしちやおうかなあ。」

「マジで!?!要ります要ります!今すぐください!?!」

「……………そっか…はい。」

東さんがその場から1歩横に動くとも何も無かった筈の場所には異様に太い腕にビーム砲を肩と拳に装備した…本来ならもう少し後に登場する筈の無人機、ゴーレムがそこに居た。

「よっしゃ!コイツがあれば負ける気しねえぜ!!」

「あつくん…束さん、あつくんの事はそれなりに気に入ってたんだよね。どんだけ負けても諦めなくて、勝つ為にはどんな事も自分の力にしようと勉強して…努力っていうよりは…執念かな？勝ちたい、その一心で分野を問わずに色々な物事を調べてあちこち駆け回って、必要なプライドも捨てて頭を下げて…なんか見るとISに打ち込む束さんもこんな風に見えるのかな…なんて思ってたさ。」

「おお！このビーム砲！スラスタもどれもこれも性能がすげえ!!」

「ISの事を教えるきつかけも…『かつこいいロボットを作って兄貴にプレゼントするじゃないって俺が凄いやつって見せつけるんだよ！』とか言って…とにかくいづく

んやちーちゃんに褒められて認めて欲しくて…って自己承認欲求が高かったね。」

「このOS…このデータは…！I Sがこんなにも息吹を…っ！」

「いつまでたつても子供だし、自己承認欲求お化けだし、小心者な所があるのに凶々しくて、あと時々人の尻に爆竹挟もうとするクソガキな所があつて…そんなあつくんの事を入った理由…今も覚えてるよ。」

「…いつと…これに…あ、あとこれも…。」

「いづくんに剣道で負けた時、東さんがさつきみたいにな……いづくんに勝てるようにしてあげようか？」って……そしたらさ……『俺は自分の力で兄貴に勝ちたいの！剣道は負けただけど今度は料理の腕で勝負してやる！』……ってさ。」

「このセンサー類もひとつまみ……。」

「師事を求めて頼る事はあっても結果そのものは自分の手で勝ち取ろうとする、その為

ならどんな難しい事も苦しい事もやろうとする…そんなあつくんが何だか妙に気に入って……………」

「よし！後は設計図を手直しして…。」

「あの……………あつくん？何してるの？」

「え？東さんのくれた I S バラしてますけど？」

なんか後ろでごちゃごちゃ言ってたような気がするけどよく聞こえなかったなあ…しかしこのゴーレム…ホントにいい機体、分解が簡単だしパーツもユニバーサルデザインって言うか打鉄に組み込むのに必要な加工が打鉄側の端子やプラグを変えるだけとかさつきよりも作業が少なく済んでるし。



「え？なんで…？普通にそれ乗ればいいじゃん？」

「え？いや…それだと俺じゃなくて機体用意した東さんが凄いつて話になるじゃないですか、俺は一夏に自分の力で勝ちたいの！！過程や方法なんぞどうでもいいけど結果だけは俺の力で勝ち取りたいの！分かります？」

『織斑秋十』がやってた事を俺ができないわけ無いんだからな！

まあ、できなくてもやるけどな！実現するまで諦めなきやオリ主に不可能なんかねえんだよ！

そう言ったら東さんがなんか妙に安心した顔になった…：…どうかしたのかな…？

「ああ、うん…：…そうだよ、ポンと渡された貰い物をそのまま使って勝利なんか絶対認めない子だもんね…：…あつくんはいつも通り負けず嫌いで人の完成品のISバラバラにしてパーツがめるクソガキだったね。」

「え？なんで俺デイスられてんの？」

「メインスラスターはもう完全に固定しちゃつていいんじゃない？ 方向転換とかは胴体前後のスラスターとバーニアに任せちゃおうよ。」

「それだと機動性落ちるし…いや、ぶつちやけそこまでの性能求めなくていいか…推力

自体はあるから…。東さん、良かったらOSのデバッグ頼めます?」

「おっけー! まあ変な所あったらメモしとくから直すのは自分でやってね?」

そんなこんなで東さんに手伝って貰いながらISを組み立てていく…やつぱりすげえよ東さんは…背中からロボットアームめっちゃ生やして細かい作業とか秒単位でこなしてくし、使えるパーツと使えないパーツの選定も頭のウサ耳センサーで瞬時に分けていくし…。

「あ、あの! 秋十くん!!」

「え?」「お?」

そんなこんなで急ピッチながらISの完成を急いでたら不意に声を掛けられた。振り向くとそこには…。

「あ、その水色の髪は…。」

「た、楯無簪さん？」

「なんでアニメ二期登場の楯無簪がここにいるんですか？え？秋十ってシャルロット党じゃないの？」

「あの…篠ノ之博士がいるから…ひよつとしたら邪魔かもしれないけど…えっと…わ、私にも手伝わせて!!」

「ええ!?な、なんで？俺って簪さんに手助けして貰える程の事したっけ？」

「あの時…秋十くんが居なかったらマルチロックオンのデータも手に入らなかった…秋十くんがデータを用意しなかったら一夏もヒカルノさんも…私も…式式の事を諦めてたと思う…だからその恩返しをしたくて…っ！」

……困った、身に覚えがない。だって俺つい最近憑依したオリ主だもん。

「まああつくんから連絡来なかったら東さんもアプサラスの実機なんて用意しなかったかもしれないもんね。」

何それ知らない。

「ね、ねえ……いいかな……？」

「え……あ……お願いします。」

何が何だかよく分からんが……とにかくよs

「俺もいるぜ秋十!!千冬姉をナデナデして元氣付けて遅れたけど弟が困ってるなら助けてやらなきゃ兄の立場が無いからな！」

「い、一夏!?!」

まさか主人公が助けに来てくれるなんて……!今までバカにしてごめんよ一夏……これ

からはTS一夏ちゃんて抜きます…!」

「助けを求める者に手を差し伸べる…両親から教わったことですから…私も手を貸してあげても良くってよ?」

「せ、セシリア!?! っていうか2人とも俺と戦うのにいいの!?!」

チヨロコツトまで…いや本当になんで? この子そんな事するキャラだっけ?

「もちろん試合に向けての特訓もやるさ…でも弟を見捨てる理由にはならないだろ?」

「勘違いしないでくださる? 『I S が無くて試合できません。』なんて言わせないように逃げ道を潰すだけですわ。」

「さつきと言ってること違うくないかセシリア?」

「シヤラップですわ、一夏さん。」

照れ隠しが下手すぎる…でも…ありがてえ…っ！ありがてえ…っ！

「ふっ、教師として手は貸せないが姉として見守ってやるくらいなら…。」

「よーし！皆で完成させるぞー！！」

「「「おーっ！」」」

「えっ……おい？……今ここにブリュンヒルデが来たんだが……ちよつと扱いが雑でお姉ちゃんいっぱい寂しいんだが…秋十？」





結果から言えば秋十は爆散した。東さんのデカイ両腕にビーム砲を搭載したIS：ゴーレムと打鉄をニコイチした全身スラスターに有線ピットの両手からビーム砲を繰り出す秋十製ISの『ジ・オング』は性能の高すぎるゴーレムのスラスターにIS学園の使い古しである打鉄のフレームが耐え切れず、スラスターの推力を出力最大にして出撃しようとした秋十を大爆発させてアリーナ上空で待つセシリアに質量ミサイルとして激突して2人とも気絶してしまい、なんか俺の不戦勝となっちゃった……ええ…（困惑）。

ちなみに東さんは『やっぱりリミッターケチったのは不味かったなあ……。』と呟くと全力疾走して何処かへと逃げて行った。

「リミッター壊れて爆散とかツダメてーなもん弟に渡すんじゃない!!」

「本当にごめんね!?でもー週間足らずでI S完成させるとなるとそれくらいの不具合は避けられないというか……あ!謝るからそのローション濡れのゴム手袋付けた拳を振りかぶるのやめて!?!つーか束さんのお尻から手を離して!?!束さん悪くn」

あふんっ

## 主人公に勝てなくても幸せへ進むオリ主

「これがA I S—E O 4…『エトワール・シュバリエ』…俺が設計しデユノア社技術研究部が形にした第三世代機…以前作った『デイツカーマン』の正式量産型って所かな。デイツカーマンはI S学園を始めとした重要施設の警備防衛を目的とした実戦配備を想定した機体だからそれに見合った性能を引き出す為に高性能な部品や機器類を使っただけで少数生産限定の高級機になっただけだが、こっちはあくまで量産前提の試合用の機体として過剰な性能を落とすつぽらファール・リヴァイヴのフレームに多少付け足しを加えた程度で生産ラインを流用、デイツカーマンの可変ウイングは高機動パッケージのオプションパーツにする事でオミットして整備性も向上、デイツカーマンの時は3つあったジェネレーターは高出力の新型を一つだけにする事で開発コストも抑えられる様に正統進化と言える機体になってるな。」

「なんというか…ラファールを全身装甲にしましたって見た目だねダーリン…あと違い

を上げるとしたら某シナンジユみたいに両足に稼働するスラストと背面のウイングがまんまシナンジユになってるね……これS社に怒られたりしない？」

「ま、まあ……ほらヒュツケバインも許されてるし。」

「許されてるつてのは一度許されなかつたつて事だよねダーリン……」

「……………ウイングはラファールmkⅡのやつの強化型にします。」

「僕の専用機のウイングならセーフだね。」

「……………じゃあ、続きを話します。」

「あ、うん。」

今僕のダーリン……秋十が僕に説明しているのはデユノア社とIS委員会が共同開発

する予定となつてゐる第三世代機だ、まあ表向きの話で実態は実力を兼ね備えた金食い虫こと『デイツカーマン』（※10話参照）をIS委員会が運用できる程度に安くしたいとの要望に秋十が「デユノア社製のISとして作つていいなら廉価版設計しますよ。」と持ち掛けたらしい。

という訳で秋十が設計だけして開発はデユノア社が行うこととなり、僕のお父さんが「イグニツション・プランに我が社も参加できる！競合相手は手動操作ミサイルだの明らかに使いにくそうなワイヤーブレードとかグフのMSVみてえなのしか無いから勝ち確だ!!」と大喜び。条約違反のISの開発やら数回の逮捕歴がある秋十と僕の交際に懐疑的だったお父さんは今では周りの企業に「織斑秋十つてしてます？あの子うちの婿なんですよー（笑）」（↑英国式意識）と他の企業に横取りされないように言いふらして回つてるとか。

話が脱線したけど、そんな経緯で作られたこの『エトワール・シュバリエ』ラファール・リヴァイヴの基本フレームを多少加工する事で生産ライン流用、そして既存のラファールも少し改修すればジムがジムIIになるようにシュバリエに変更が可能。新型のジェネレーターによってエネルギー兵装の装備もできる、まさにラファール・リヴァ

イヴの正統進化だって秋十が言ってた。ラファールの利点を残したままディツカーマン程に優ることは無いけど劣らない機体性能だからね。

「…で、肝心の第三世代兵装が『イージス・エリア・システム』、ウイングに装備されたこいつは機体をすっぽり覆うようにバリアーを展開、そして特殊なナノマシン入りのガスを噴射してバリアーの外周に布が湿って水滴を垂らすように少しずつ染み出させる…こいつによってエネルギー・荷電粒子系統の攻撃を拡散または減衰させて無効化かダメージを大幅に軽減させたり、ミサイルやグレネードを始めとした爆発系統の攻撃に対してはナノマシンを放電させることで誘爆させて直撃を防ぐ事ができる。」

「弱点としては使ってるだけでナノマシンを消費するから無駄遣いすると使用不可になる事とレールガンや大口径砲等の強力な実弾兵装やブレードとかの実体武器による攻撃を受けるとシールドが破壊されることだっけ?」

「そうだね、アサルトライフルとかなら大丈夫だけどそれ以上の威力は数発喰らえばシールドが壊れて再展開するまで無効化されるね。もちろんシールドが破壊されたら

出したナノマシンのガスが放出されて残量が減るけど。」

「どうせ距離詰めたら近距離戦か弾幕ばら撒くからその間は相手の牽制射撃とか気にせず撃てるのは結構いいかも…。大火力の砲撃とかは余程隙を見せなきゃハイパーセンサー越しに感知して避けられないと思うし…。」

「それはハニーやボーデヴィツヒさんとかのエースパイロットありきの発言な気がするけど…。ああ、それとスラスターを増設した高起動型と、ミサイルポッドや肩部ビームキャノンを追加した支援攻撃型、シールド付サブアームを展開できる重装甲型とバリエーションがあるけど…これ全て背部バックパックと両脚部スラスターの3つをハードポイント差し替えだけで変更できるようにするよ。」

「今度はゲルググから運用思想受け継いでる…。前々から言いたかったけどダーリン……秋十はあれなの？サン〇イズに媚びてるの？それとも喧嘩売ってるの？」

「えっ…違っ…確かに俺の作るISがどれもこれもガンダムシリーズの機体からアイディア得てるけども…。でもアイディアを得るだけで一向にオリジナルだから問題

無いと思うし……。」

「頭アナハイムかな？」



結果的に言えば秋十は敗北した。

事の始まりは俺は秋十に誘われ白式用ビット兵器『ドローン・ビット』の試験ついでに勝負する流れとなった。ビット兵器の試験なので俺は白式をビット兵器の運用を中心としたカスタムし、秋十はデユノア社の新型を自分専用のカスタムをした状態の機体に乗りに込んだ。

ドローン・ビット：Dービットは簡単な命令だけ脳波コントロールで行い、攻撃や回避と言った細かい挙動はビットに内蔵されたAIが担当する事でBT適正の無い人間でもマルチタスク擬きのオールレンジ攻撃を可能としているそうだが、ただ実戦に使えるようになるまでにはAIのメモリーに『パイロットはどんな状況でどう判断しビットをどのように動かすのか』と様々なデータを蓄積しなければならず、結局はプログラムに沿った起動しか描けないのでそれを読まれてしまえば簡単に撃ち落とされてしまうらしい。例えば『敵が回り込もうとするならビットは先回りして正面から射撃』というプログラムがあり、それを見破れば全く同じ状況をもう一度作る、後は何も考えずに目の前に銃口を向けておけばビットの方からやって来るわけだ。もちろんパイロットが指示を出して避けさせればAIがそれを学習してプログラムを手直ししてくれるそうだが

が……なんでビット側にAI仕込んだんだろ……これビット破壊されたら一からやり直しなんじゃねえかな……。

俺は開始のブザーと同時に秋十へ突貫、あいつがアサルトライフルの二丁持ちで乱射して迎撃してくるが何度も秋十との勝負に付き合って行くうちに攻撃を避けながら空を飛ぶ事にすっかり慣れた俺にとつては相手の射線を避けながら接近するのも苦では無くなってきた、零落白夜無しでもセシリアの射撃を掻い潜れる自身がある……まあ実際挑戦してみたらセシリアも成長して自分さえ動かなければビットと同時に自身も射撃が可能になっていてビットで執拗にメインスラスタを狙われて気を取られた隙を突かれて撃ち落とされたんだけど。

先週戦った『シルバリオ・クロス』という秋十がアメリカ軍人の人のISデータ（無断複写）を元に第2世代仕様で作った対空迎撃特化型の機体に比べれば牽制にもならない銃撃に俺が秋十の目の前に近づき雪片を振り上げる、秋十がスラスタを吹かして体当たりしてくるがこちらでも急上昇してそれを避ける、最初から俺は囷だ。俺の背後にピツタリ並んで着いてこさせた4機のDービットが四方へ展開して上下の位置はバラバラだが秋十を包囲して一斉射撃を行う、ビットの内蔵火器であるレールガンの弾丸は秋十が瞬間加速する事で更に前へと突進したことによって避けられ秋十が居た場所に

4つの弾丸がぶつかり爆ぜた。

無論だが俺も黙って見ていた訳じゃない、あいつが瞬間加速した事に気づいた時点で俺は最近会得した連続瞬間加速：2回連続を1度の試合に3回程、1度使うと5分以上インターバルを置かないと白式と俺の身体が持たない不完全なものだが：それで強引に秋十の背中へと張り付く、そうされれば当然秋十は俺を迎撃しなきゃならない、そして俺に足止めされ得意の一撃離脱戦法ができなくなった秋十へDービットのレールガンの一斉射撃が降り注ぐ。

とうとう我慢できなかったのか秋十の機体の腰部分の装甲が前後共に開き複数の銃口が現れる：轟音と共に発射された散弾がDービットを貫いた……まあビット自体は絶対防御とかあるわけないからそうなってもおかしくないけど……ビットの運用試験なのに肝心のビットを撃ち落としちゃっていいのかと疑問に思ったが秋十に距離を取られる前に俺は零落白夜を展開して切りつけ試合を終わらせた。

「……………なんか、兄貴強くない？」

「ダーリンが毎回勝手の違う機体で戦いを挑んで来るんだからアムロと同じ理論で嫌でも対応力も実力も成長するでしょ？とかさりげなく別の機体も含めて合計2回負けてるよね？しかもまた逮捕案件やらかしてない？」

「まあ不起訴になったからセーフでしょ。」

「デュノア社の社長令嬢的には逮捕案件控えて欲しいなあ…。所でダーリン。」

「何かなハニー。」

「なんでビーム兵器対策マシマシの機体で実体兵装メインのレールガンビット装備の白式と戦ったの…?」

「あ、兄貴の単一仕様はエネルギーブレードだし。」

「普通にレールガンでバリアー破壊されてから叩き斬られてたよね?」

「……………やーい！ハニーのお父さん好色男!!」

「なっ…やーい！ダーリンの義父になる人浮気者!!」

この後ダーリンと喧嘩ツプルから仲直りックスしようとしたら布仏さんに「安眠妨害

マジやめろ」ってダーリンがローリンググソバットされました。  
にんげんってよくとぶんだなあって思いました。

秋十の奴がおかしい…今回も勝負が終わると用事は済ませたと言わんばかりに帰っ

て行った。前回は…前々回は…何か引つかかる。

そう思考していた俺に勝負の様子を見ていたのか鈴が声をかけてくる。

「…しかしあれね…秋十の奴、毎回一夏に負けてる癖に懲りないやつ。」

「まあ目標に向かつて諦めないのは一つの長所だからな、お兄ちゃんとしてはいっぱい嬉しいと思うよ。」

「でも最近では明らかに一夏の方が優勢な時が多いじゃない、今回は機体の相性もあつたけど…：…ほら、『アラクネ・II（ツヴァイ）』とかいうアイア○マンの背中から蜘蛛の脚を生やしたような殆ど人間サイズの機体で一夏に挑んできた時も対IS捕獲用兵装の…『ウミヘビ』だったかしら…粘着性のナノマシンの糸を飛ばして相手を捕まえて糸伝いに電流を流すことでISコア周りの電子機器をショートさせてISを強制的に停止させるとかいうやつ…：…八本の脚から出したのゼーンぶ一夏に避けられてたし。」

「皆の知らないところで連敗記録が増えてる…。」



「え？どうかしたの筈？」

「いや、何でもない。……一応、秋十は弱い訳では無いのだろうか？」

いつの間にか来ていた筈が話に入ってくる……そう言えば最近、筈と一緒に訓練したりする機会が減ってるような気がする……女子だけで特訓してるのか？

「まあ、弱いわけじゃ無い……秋十はアレだからな……なんていうか。」

「私や他の専用機持ちが『実力を上げて強くなる』ってんならアイツは『性能をあげて強くする』って感じよね……」

そうなんだよな、秋十はどんな機体も乗りこなせるという意味ではパイロット適正つてやつが高い……頭ジェリドかよつてくらい乗り換えまくる。……以前、『エースパイロットなんてもん育てるより強い機体量産した方が絶対コスパ良いじゃん。どうせ育てて伸びるかどうかわかんねえんだし。』と、アニメでザクウオーリア達にポコポコにされるストライクを見ながら言っていたしな……いや、アレは秋十が錯らn……じゃなくてア

スラ○も○ラも嫌いなだけか。俺は種シリーズ好きなんだけどなあ…00の次くらいに。

「一夏？ いーちーかー！…ダメね、考え込んだりして…。そういえば箒、あんた最近放課後見ないけど何してるの？」

「む？ ああ、少し前から秋十に機体操縦のコツという奴を実戦形式で教えて貰っているんだ…本当にISを乗りこなすだけならピカイチだからなああのグラサンノースリーブ男は。紅椿の運用理論と一緒に考えたり、私に展開装甲を含めた紅椿の整備の仕方を教えてくれたりと助かってるよ。」

「へえー…第4世代の紅椿の整備なんて…整備なんて必要なの？」

「そりゃISはパワードスーツだ、整備を怠って良い理由があるわけないだろう。…と秋十に言われてな、姉さんからメンテナンスフリーと聞いてほったらかしてた身としては耳が痛い話だな…。」

「。んーふ……………」

「あのね……ちーちゃん。別に束さんはね説教したいわけじゃ無いんだよ。」

「……………その、束……なんだ。」

「有給だからって酔っ払って束さんに『これがホントのアナサラスだなww』っていいながら束さんのターニングポイントにMG1/100のEz8を突うずるっこんできやがった親友を責めたいわけじゃないんだよ。ちーちゃんが酒癖悪いの知ってるから。」

「あの……あれなんだ……誤解だ、束。」

「生徒がいない隙に逆バニー姿で部屋に入ってきたおっぱいメガネに現場を見られて『違う!! 違うんだ真耶! こいつが無理矢理……!』ってまるで束さんが自分からちーちゃ

んにガンププライフイストファツ○強要したみたいに言い訳しやがった事を怒ってるんだよ。」

「その……………本当にすまん。」

「しかも何でそんな馬鹿みたいな言い訳を信じて帰っちゃうんだよ…あのおっぱい…………。」

## 主人公に勝てなくても負けたくないオリ主

「楽しかったな秋十兄さん。」

「ああ、今日の兄貴の誕生日パーティーは大成功だったな。」

私の今の名前は居村望……ちよつと前まで亡国企業というテロリストのメンバーだったが、I S 委員会に潜り込んでいた元メンバーのスコールと兄のコネで I S 委員会の特殊事務官……という名の篠ノ之博士の私兵兼秋十兄さんの専属パイロットに再就職して社会復帰を目指している若干だいたい 16 歳だ……誰がなんと言おうが私は 16 歳なんだ。

兄の I S 開発に協力する為、そして姉である千冬に「さすがに学歴中卒以下なのはちよつとアレだと思う」との事で I S 学園に秘密裏に転入し保健室登校して学生として最低限のラインまで勉強して来年留年という形で正式に学園生となる予定だ。

元テロリストを入学させる国際教育機関とかセキュリティガバガバじゃないか? ……

いや元からセキュリティはおざなりな気がするから問題ないな。

「最初は女子の皆が兄貴にサプライズパーティーやるとか言ってたけど……暗い部屋で兄貴を捕まえて椅子に拘束とか下手したら兄貴がIS展開して反撃するかもしれないから普通に『誕生日パーティーやるよ』って手紙渡す事にしたのは我ながら英断だったかな。」

「皆が誕生日祝ってくれるって分かってたからか終始ワクワク顔でエンジョイしてたね、一夏兄さん。」

「篠ノ之さんがお茶入れて、オルコツトさんがビリヤード、嵐さんが古典舞踊を披露して、簪さんが遠藤正〇の歌をメドレーで歌って……ボーデヴィツヒさんがオペラ歌い出したんだよな。」

「ああ……男性声のテノールで高らかに歌い上げたインパクトが強すぎてその後の秋十兄さんとシャル義理姉さんの漫才が滑ってましたね。」

「……………滑ってたのは元からな気がするけど…まあインパクトといえば、最後の最後で姉ちゃんとマドカが2人でメイド服で登場したのが1番インパクトあったんじゃないか？兄貴が文字通りひっくり返ってたし。」

「そりや存在の知らない妹がメイド服で現れたらビックリしますよ。」

「しかし、その後の立食パーティーに姉ちゃんがメイド服のまま山田先生と何処か行って帰ってこなくなっちゃったけど…大丈夫かな…。」



「ゲボ……ほっ……おえ……風邪引いた……真耶の奴……治ったら覚えてろ……もうやめ  
と言つても絶対やめてやらんからな……げほっ……。」

一夏と秋十の誕生日パーティーをした翌日……粘膜から直に風邪を伝染された。

山田くんがやけに火照っていたがアレ風邪引いていたのか……私の弟の為に無理して

誕生日パーティーの準備やら司会やらしてくれたのは嬉しいが風邪なら風邪で普通に安静にしているで欲しかった、生徒に伝染したらどうする。

しかし、静かだな。弟達が風邪を引く事があっても私自身はそんな経験1度も無かったからな……少し新鮮な気持ち半分、寂しくないと言ったら嘘になるな…。

一夏は私の心配をして授業が上の空になってないだろうか、秋十はまたバカをやつてないだろうか、山田くんは私の代わりに上手く授業を進めてくれるだろうか……生徒達に私と山田くんの関係がバレていないだろうか。

「やっぱり風邪は他人に伝染すと治るんですね。やっぱりアワビからですか？」

「どうでしょうか？先輩はいつもする時はペにP……って何を言わせるんですか織秋くん！」

「いや完全に山田先生が口を滑らせてましたよね？」

『やっぱり織斑先生と山ちゃん……』

『ほらー、私の言った通りでしょー？』

『そうだけど……でも本音、山田先生が水龍敬ランドみたいな格好して織斑先生の部屋に入る所を見たなんて普通信じられないって。』

『でもこの前セシリアさんが体育館倉庫で千冬様が体操服ブルマで学ラン着た山田先生とイメッセージプレイしてたって言ってたよね？』

『ああ、くたまらねえぜ。』

「はあ……静かだな……。」

ただベッドで横になって天井を見つめるか目を閉じて瞼の裏を見つめるか……話し相手が欲しい……もしくはスマホの充電器が欲しい……風邪引いて暇だからってスマホ弄り過ぎた、充電しようにも寝ながら片手で差し込もうとして充電器の端子をへし折ってしまった。

暇すぎる……というか誰か見舞いに来てくれたりとかしないのか……しないよな、今授業中だろうからな。

『……………!』



風邪引いた奴に贈るものが棺桶ダンスって嫌がらせか!?

これがホントのおくりBEATってか!?

「おいゴラアっ!!……え?」

「あ、織斑先生!」

「結構元氣そうで良かったです。」

「いや私たちが棺桶ダンスなんかしてたから出てきただけじゃない?」

「織斑先生起きてるの?」「千冬様元氣そう?」「ちよつと見えなただけどー。」「私も私も。」「これが…若さか…。」「ちよつと押さないでよー。」「誰か私のお尻触ったでしょ!」「俺は触つてないからな!」「一夏!こんな状況で痴漢プレイとは…!」「恥を痴れ!俗物!」「織斑くんは触つてないって。」「セシリア、何故一夏に尻を向けているんだ?」「触れないであげて、ポーデヴィツヒさん。」「そういう織秋くんはさつきからデユノアさんのおっぱい触つてない?」「腕組むフリしてナニしてんのこのスケベグラサン…。」「い

や、別に僕はダーリンとナニもしてないからね、あはは」「デユノアさん…右手を織秋くんのズボンから離したら?」「本当にナニしてんのこのバカアップル…。」「ああ、その健やかなるときも、病めるときも、これを愛し、これを慰めつつそういう…。」「結婚の誓いをちんちん亭的に解釈するのはNG。」「山田先生は?」「風邪ぶり返したから医務室に置いてきたよ。」

「お…お前達…なんでここに?」

私のクラスの生徒達が…全員集まっているだと…?

「あ!千冬姉!!」

「い、一夏…一夏か?ぎゆうぎゆうに密集し過ぎて手首しか見えんが。」

「俺だよ!俺が千冬姉の様子を見に行くって言ったら…他の皆も千冬姉にお見舞いしたいって言って…。」

「お前達授業は…そうか、もう昼休みなのか。」



寮長室を覗き込み時計を確認する私へ生徒達が口々に言葉を続ける。

「はい！千冬様に少しでも元気になってもらいたくって…。」

「先生！風邪なんかに負けないでください！」

「私達みんなでお粥作ってきたんです！織斑くん監修で栄養満点ですよ！」

「そのでつかい箱って給食バットだったの!?!」

「というかそのお粥入れてた容器、さつきバカップルとボーデヴィツヒさんとのほほんさんで棺桶ダンスに使ってたよね…?」

「お前達…：…全く…：馬鹿みたいにゾロゾロ全員で教師の見舞いに来るとは…：…。」

…：込み上げるものに耐えられず私は顔を床へと俯かせる。

「あ、あれ…織斑先生？」

「やっぱり全員で来るのは不味かったんじゃない？」

「な、何よ？あんただって『厳しくても理解できるまで付きつきりで教えてくれる千冬様に恩返ししたい』って言ってたじゃないっ。」

「そ、そーゆーあなただって『イグニッションブーストの練習のコツを教えてくださいました先生に何かしてあげたい』って…。」

「本当に……………バカな連中で……………」

…胸に溜まるモノに声が震えてしまう……………。

「あ、兄貴…。」「ああ、お兄ちゃんも同じ考えだ…。」

「自慢の生徒達d…ってどうした!?!」

顔を上げ笑顔を向けようとした私の前には、土下座する生徒達の姿が広がっていた…  
水戸黄門で観たなこんな光景。

「あれ？千冬姉怒ってない？」

「見舞いに来て貰って怒るわけないだろう？寧ろ…嬉しく思ってるよ。」

「え？姉ちゃん怒ってな…うえ!?!泣いてんの姉ちゃん!?!」

教師となつて…いつも悩んでいた…本来、正規の教員免許を持たない私がIS関連限定とは言え教鞭を取る資格があるのか…代表候補生をやめてすぐ教師を目指し勉強に励んでいた山田くんを差し置いてブリュンヒルデのネームバリューを利用したいIS委員会の意向で役職を与えられただけの私が担任教師等務まるのか…私は、良き教師になれるのか…。

「え？千冬様嬉し泣き？」「マジで!?!」「マジだこれ!!」「織斑先生も涙出るんだ…」「坊やだからさ。」「織斑教官…泣けるんだ。」「今のうちに写メつとこ。」「あ、後でそれ送って!！」

「全くお前達……昼休みが終わったら、授業に戻るんだぞ？」  
そうか……これがきつと……答えなんだろう……。

「それじゃあ……お前達の作ってくれたお粥を貰おうか。」

「千冬姉……ああ！みんな!!」

「「「「「「「はい!!織斑先生!!」」」」」」」

教師になって……良かった!!

「おはよう！山田くん！」

「おはようございます、風邪治ったんですね。」

「ああ、山田くんも治ったようで何よりだ。」

「先輩…なんか嬉しそうですね？常時にこやかな顔の先生なんて初めて見ました。」

「失礼な奴だ、私だって機嫌が良ければにこやかにもなるさ。……それに、教師としての自信がついてきたからな。」

「逆に今まで不安だったんですか…？」

「ああ、だからつい表情が強ばってな…。」

「(あの仏頂面は緊張してただけだったんだ……。)」

「まあなんだ…。」

「今日も1日…頑張ろう！いち教師として！」

「はい！織斑先生！」

『一学年生徒の9割が風邪を発症した為、学年閉鎖とします。b y I S学園理事会及び生徒会より。』

「わ、私の風邪で生徒がクラスター感染してる……。。」

「げ、元気出してください！ほ、ほーら真耶ママが千冬ちゃんを慰めてあげまちゅよ？千冬ちゃんママにバブバブするの好きでちゅよね？……。な、泣かないでください先輩!!そんな甲子園のサイレンみたいな男泣きしちやダメですよ!?!」





「手洗い、うがいは世の常ってはつきり分かんだね。」

「私が新型の起動試験してる間にそんなことが…。」

「どうだった？マドカ。」

「はつきり言って…：…凄いの一言ですね。」

秋十兄さんの開発したIS用操縦補助システム…。

その名を『Trans・Automata・System』、通称『TAシステム』。いつぞや兄さんが作ったAIが人間を媒体にISを無人操作するコンピュータを強化回収し人間の脳の命令に従いコンピュータが最適な行動を計算し弾き出した答えを脳に受信させることによって無意識に身体が動くようにイメージ・インターフェースのみでISの操縦を可能にする。

従来のISの操作には脳でイメージしそれをISに反映させるイメージ・インター

フェースだけでなく腕部マニピュレーター内に収まっている操縦桿による直接操作も必要だった…だがこのシステムさえあればロボットの操作に置ける『思考から実行』このタイムラグを無くして文字通り手足の様に動かす事ができる…脳さえ無事ならばISを十全に操る事ができる。

言うなれば常に脳内で学校に来たテロリストを倒すイキったイメージトレーニングがそのまま実現可能と言うわけだ…。

「問題はパイロットが無茶な操作による負荷に耐えられるかという所でしょうか…。」

「あと『思いついただけで即実行』しちゃうから、誤操作による事故が怖いな…そこら辺はどうだマドカ?」

「そうですね…試験中は特n」

「やつほー!東さんだよー!!マドちゃん大丈夫?学年閉鎖起きたって聞いて風邪引いた箒ちゃんのお見舞いっいでに様子を見に来てあげたよ!えっへん!」

…びつくりした、明らかに出入口の無いはずの物陰から篠ノ之博士が飛び出してき

たぞ……。

「篠ノ之博士……お久しぶりです。」

「いやいやあ硬い、硬いよー？もっと東さんにはフレンドリーでいいんだよー？」

「東さーん？俺の心配はしてくれないんですか？」

「バカは風邪引かないし、あつくんはいいかなあつて。」

なんか兄さんには微妙に態度が辛辣っぽいのは気の所為だろうか……。

「いやいや、ほらこのお手製マスクと頭の冷えピタが見えないんですか？」

シャークペイントのマスク……それファッションじゃなかったんですね、風邪引いたなら大人しく寝てください。

「はっはっはっ、あつくんはウルトラスーパーデラックス癌細胞でも死ななそうだし。」

「東さんが風邪引いたらケツにネギ刺してやるからな。」

「天災は風邪引かないよーだ。」

そんな子供みたいな口喧嘩を…しかし尻に葱を生やした篠ノ之博士。

……面白そうだからちよつと見てみたいかm

『TA・システム作動』

「…え？」

「ん？今ペツパーくんの声が聞こえた気がするんだけど…？」

「お、おいマドカ？お前こつちに…東さんに近づいて何を…。」

「あ、あれ？す、すいません！ISが…勝手に…!!」

（「あと『思いついただけで即実行』しちまうから……」）

「……………篠ノ之博士!!今すぐ逃げてください!!ああ!やめろ!脱がすんじゃない!!そんな汚ねえモンをおっ払ってんじやねえ?!?!おい!それはネギじやなくて私の大切な! / 5 サイズファイギュアの初音ミク」

「兄さん……私は……そんなつもりじゃ……。」

「東さん……強く生きて……。」

「……生きるの諦めたい……。」

## 主人公に勝ちたくて積み上げるオリ主

『I S 学園バカップル選手権 2 位の代表候補生カップル、第三アリーナで現行犯逮捕  
』  
昨晚未明、代表候補生 2 人がアリーナのご真ん中でみだらな行為をしていたとして現  
行犯逮捕される事件が発生、逮捕したのは教師 2 名。代表候補生 2 人はそれぞれ

『私たちは後から来た、先にやっていたのはあの教師達だ、アメリカ代表候補生として  
誓つてもいい。』

『教師を詐欺罪と名誉毀損罪で訴えます！理由はもちろんお分かりですね？貴女たちが  
自身のこんな淫行を隠蔽し！生徒に罪を擦り付けたからです！覚悟の準備をしておい  
て下さい。ちかいうちに抗議します。ギリシャ政府にも問答無用で弁解してもらいま  
す。会心の準備もしておいて下さい！貴女たちは淫行教師です！理事長に減棒される  
楽しみにしておいて下さい！いいですね！』

と容疑を否認、対して 2 人を逮捕した教師の C. O さんは



『2人は犯行当時に1人は全裸に亀甲縛り、もう1人は鞭を片手に裸リボンというふしだら極まりない格好をしていた、誰が淫行野郎で誰が正しいのかは明白だ。現に私も山田くんも体操服にブルマーと上下共に服を着ている、ブリュンヒルデ嘘つかない。』

と話しており2人の証言を否定。罰則として本来であれば停学処分の所、教師のM・Y氏の要望により社会奉仕として亀甲縛りを始めとした縄縛りプレイの講習を行う事で今回の件を不問とする事で話が決まったとの事。』……………」

「いや、いい歳した女2人がブルマー履いて何してんだよ、千冬姉……………」

「あ、秋十くん、本当に…これを渡せばあの件は…。」

「ええ、勿論ですよ。それにこれは『IS委員会の技術試験に倉持技研が協力した。』…という事になってますから、公的には何も問題ありませんよ。技術の流出は一切ありません…書類上はね。」

「わ、わかった…これが約束のデータ、実物は君の指示通りの場所に運んである。」

「……………確かに、感謝しますよ……………倉持技研の最高責任者の…局長さん。」

「……………な、なあ！本当に！本当に例のアレは内密にしてくれるんだね？」

「しつこいな、俺は…織斑秋十は約束はちゃんと守る男ですよ。」

「そうか……………信じていいんだな？あれが世に知られば私は終わりだ……………」

「ご心配なく、俺の胸の内に留めて起きますよ。まさか倉持のお偉いさんが……………」

「『水色髪の眼鏡なあの子おじ様、私をママにして？』なんてタイトルの3D系アドルトゲームを作ってるなんて誰にも言いませんよ。」

「た、タイトルを言うんじゃない!!更識の手の者が何処に潜んでいるのかわからないんだぞ!?!」

「しかしエンディング全回収までプレイしましたけど、これ本当にくつつつそ抜けるわ

…特に鈍感ルートでヒロインに押し倒される所とか…。」

「あ、わかるかね？私もここはヒロインの心理描写とか特に力を入れていてね…CGの方もMMDを元にしてはいるがほぼ自作なんだよ。」

「いやあやつぱりエロはこうでなくちゃつてのが大体抑えられててティッシュに手を出したのはもんくえ以来ですよ。」

「ああ、アレはエロかったなあ…私もエロゲー制作を趣味とする者として学ぶ所が…。」

「お姉さんとしては純愛ルートからの分岐で姉にNTRれて百合ックス見せつけられるエンディングが好きかな。」

「ああ、『あはは♡私達のココを見てそんなにしちやつて…♡ほら、この娘も見られてこんなにしちやつてるわよ？♡』って煽られまくる所でティッシュ箱使ったわ俺。」

「私も若い頃はあんな風百合に見せつけられるような青春がしたかった…。」

「ん？今女の人の声が……。」

「もう遅いわ。」

『倉持技研局長、ポルノ所持が発覚し降格処分…後任は篝火ヒカルノ氏が引き継ぎか。』  
……あの局長さん、打鉄式式の開発で予算を回すのに手を尽くしてくれた良い人だったのに……。』

「その人の事は忘れなさい簪ちゃん…あとグラサン野郎とは縁を切つて。」

「なんで？」





「秋十、ドイツからお前宛に書類が届けられていたぞ…何故お前宛の荷物が私に届いたのかはわからないが…。」

「お…サンキュー、ボーデヴィツヒさん。IS委員会技術試験官としてちよつと調べ物があつてドイツに資料を送つて貰つたんだよね。」

「そうなのか…ああ、確かデュノア社の新型はAICをアイディアにした対エネルギー兵装用のバリアーを展開する能力があるとか聞いたな…。」

「一応、ドイツのAICの技術を盗んだとかはしてないよ。」

「そうだったらとつくに私が秋十を逮捕してるさ…。」

最近秋十は全く一夏と勝負しなくなつた…せいぜい白式の整備や白式用の武装を作つてやる程度。その代わりに他のクラスの代表候補生や整備科の先輩とつるんでいるのが目に入るようになった…一応彼はIS委員会から役目を与えられているからな、

仕事のせいで一夏との勝負にかまけていられなくなったのだろうか……。

正直、一夏が寂しがつてるから相手してやって欲しい所だが……私も軍人だ。上から与えられた任務を放ったらかして友人と遊び回るなんて許される筈がない。IS委員会に自分から売り込んで雇われた秋十、自身の価値を示さなければ後ろ盾も出世街道も閉ざされてしまうだろう。

まあ二度と遊……試合も訓練も共にできない訳でもあるまい、一夏には弟を信じて待つてやれと私から言つて見るとするか。

「それはそれとして秋十……織斑教官について聞きたいことがあるのだが……。」

「ん？ 姉ちゃんの寝起き顔がみたいなら山田先生のスマホの待ち受けね」

「いや、そんな話では無くてだな……織斑教官には専用機があつただろう？」

「というか教官と山田先生は隠す気あるのか？……教師のオフィスラブとかスキャンダルだと思ふんだが……。」

「ああ、酒浸り…だっけ。」

「暮桜だ。1文字もあってないしそれは教官の趣味だろう。」

「そうだった…それがどうかしたの?」

「いや…教官がモンド・クロッゾ二連覇を達成してから暮桜について一切の情報が無いからな、気になったものの本人に聞きづらいから友達を頼ったという話だ。」

「成程…委員会の話では暮桜はISコアごと学園にあるって噂があるって聞いた事はあるんだけど、実際どうなのかはちょっと…」

「学園にか?教官はもう国家代表ではないから専用機とISコアは倉持へ返上したと思っていたが…」

当たり前だが秋十も知らないか…やはり教官本人に聞いてみるべきか…。

しかしもしも教官の地雷を踏んで嫌われてしまうかもと思うと聞きづらい、いや教官が悪意の無い相手をそう簡単に嫌いになるような方では無いと思っはいるが…。

「よし、思い切って聞いてみよう。秋十…すまないが一緒に来てくれ。」

「え？俺これからハニーと新型機の訓練があるんだけど…。」

「今日は休め。」

「……やっと思ったか。大丈夫か山田くん？」

「は、はい……つて2人きりの時は……。」

「わかったわかった……真耶、これでいいか？」

「はい！ち・ふ・ゆ・さん♡」

「……少しむず痒いな……しかしロツカーの中で2人きりつてシチュエーションがやりたいと言いつから入つてみたが……お互い胸がデカいせいで全く身動きができないな。」

「千冬さんが無理矢理入るからギチギチですね……これ出られるんですか？」

「たかがロツカー1つ、篠ノ之流プロレス術で押し出てやるさ……ブリュンヒルデは伊達じゃない。」

「篠ノ之流は剣道なんじゃ……所でさつき織秋くんとボーデヴィツヒさんが話していた件……真相を伝えたりは……。」

「話すつもりは無いさ、全力ではぐらかしてやる。」

「……………ですよね。」

そう、あれは私が大会二連覇を制覇した後…IS学園教師として内定が私の意思を他所に勝手に決定されたのを知って数日後の話だ…。

『ん……………私はたしか…IS委員会の偉い人の…………化粧が濃そうなルーコスって女を殴り飛ばしてIS学園教師を辞退しようとしてたはず…………いや本当に教員免許を取って

ない私に教師やれとか馬鹿じゃないのか委員会は……高卒だぞ私は。』

それよりここは何処だ……？ なんとというか、斬魄刀が卍解する前のイベントで来そうなの……なんかこう……ふわっとした……ラノベなら馬鹿の一つ覚えみたいにウユニ塩湖っぽい背景が使われそうな空間だな……。

なんでこう……真の能力とか新たな進化とかする前はウユニ塩湖みたいな場所で似たり寄ったりな問答をするんだろうか。覚醒前の問答と脇役の過去編は見飽きてるんだ、さっさと本編を進めろというのがわからんのか……。

『つてそうじゃない、話の流れ的に私の専用機でモンド・グロツソ二連覇を共にした暮桜の……ほら……なんかこう……暮桜と、アレする感じだろ？ 多分……違うとしたら昨日一気飲みしたストロングゼロが原因だな。』

やはり一夏の言う通りストロングゼロは一日一本にするべきだったか……でもアレを5本くらい飲み干してフワフワした気分のまま全裸でベッドに入らないと眠れないんだ……うん、私は悪くないな。

飲んで欲しくないならストロングゼロを規制すればいい。

『……………っ……………！』

『ん？…声が聞こえるな…ひよっとしてあの声は…暮桜か？』

もしくは私がストロングゼロを飲むと必ず現れるピンクタイツの束か…：アイツら結構イタズラ好きで私を全裸にしては一夏の部屋に無理矢理引き摺り込んでくるからな…：一夏は何故か私が自発的にスッポンポンで弟にシヤゲダンする変態扱いしてきやがるが…：ピンクタイツ着た束の仕業だと言っても信じてくれないから困った奴だ。

『……………行ってみるか。…おーい！暮桜!!お前だろう？』



『や……つ……わ……い……い』

『おい！聞こえないのか！！……つたく……』

『う……い……や……え……』

『おい！……後ろ姿が……おい！私だ！！織斑千冬だ！』

『やつ……い……』

『……………おい!!!返事し……………ろ……………?』

『やつべ…うまつ!カップ焼きそばにタラコマヨぶちまけたら…これ優勝!!タラコマヨ焼きそば優勝だわこれ!!んぐ…ずぞぞ…つぶは!!…うっめえ…たまんねっ!千冬ちゃんの脳内に色んな食べ物の事が記憶されてるけどこれが最高だわ!』

『……………お、おい……………暮桜…だよな?』

『そして…んぐ…んぐ…ぶへあッ!!全裸で飲むストロングゼロ!!これは確かに病みつきになるう!!頭バカにして飲む酒うつまッ!!……………うん!準優勝!全裸でストロングゼロは準優勝!!』

『あ、あの……………。』

『トドメはポテチを…ビールで……………流し込む…んぐぐぐッ!……………んぐぐッ……………ぶへえ…喰った喰った…ぷふう…もう、こんなにお酒を飲むのが最高に楽しいなんて……………束ママに頼んで人間の身体とか作って欲しいなあ……………ああ……………エアコンの冷風にM字開脚するとすっげえ気持ちいい……………千冬ちゃんの見よう見まねだけど…最高……………思い切つて束ママをお願いして千冬ちゃんの専用機になって本当に良かったわあ……………。』

『す、すいません…暮桜……………さん?』

『おっ……あ……ポテトチップスが……ポテチのおイモ成分が……ああ、これは……気  
功砲でるわ……ケツから10べえかめはめ波でる……千冬ちゃんのよりでけえのg  
………ん?』

『あっ………。』

『えっ………。』

『その………お邪魔、してます……千冬です。』

『あっ………はい………暮桜です……。』

「それ以来暮桜はコアを自己凍結し、二度と私や束に反応を示す事は無かった……。」

「何度聞いても馬鹿みたいな話ですね……千冬先輩……。」

「……………」

「あの、東さん？俺は言われた通りに東さんにカンチヤ…忍法千年殺ししただけだからね？…………そりゃISのマニピュレーターはやり過ぎだと思っただけ…いや、それ込みで東さんの命令だからね？」

「あの…秋十様…とりあえず救急車を呼びましたので東様を外へ運ぶのを手伝って頂け

ますか？」

「……………」

「あ、うん…じゃあクロエちゃん脚の方お願いね…で、束さん。そりや最近束さんは何も悪いことしてないのに運命レベルで不幸な事故が起こりまくってたのは知ってたよ？…それに束さんは分かりきってた事に対策をしない馬鹿じゃないって事も……………」

「……………」

「なんで厚さ数ミリも無いパンツに爆発反応装甲なんか貼り付けたのさ……。」

「天才にもうっかりはあるんだよ!!…っ…あ…自分にキレそう…。」

「もう切れてます束様。」

「えっ。」



## 主人公に勝つ準備をしてる幸せかもしれないオリ主

「え？ I S テロを無力化できるクリーンな新兵器を思いついた？」

「そうなんだよ束さん!! 『天災』と『天才』がいれば絶対上手くいくと思うんだよ!」

仕事も実家の手伝いも I S 委員会の会合も免許の更新も副業の V t u b e r も通院もとフレンチに行こうとしてぶっ壊したちーちゃんのプリウスの返却とコミケの執筆も紛失したクレカの再発行と電車の網棚に忘れた I S コアの回収と亡国機業の残党の摘発と核搭載二足歩行 I S 戦車の破壊と盗まれた箒ちゃんのパンツの盗難届の提出とザンジバーランドのテロリストの対処とギレ○の野望のガトルマゼラ縛り実況生配信と交通違反の罰金未払いと痴漢冤罪の裁判の出廷と車ぶつけて凹ませちゃったパイオツ緑髪先生のキャデラックの弁償といつくんがベッドの下に隠してた妹の匂いのするクマさんパンティの追求とやる事は沢山あるけど気分が何か退屈だったからいつメン（束さん、クーちゃん、マドちゃん、あつくん）の4人で集まって I S 学園の視聴覚室で

ポケ戦を見ながらだべっていたんだけど…。

自称『天才』こと織斑秋十…あつくんがなんか唐突にI Sの軍事利用を提案してきやがった…殴りたいのかな？

「あつくん…I Sの軍事利用は誰であれ許さないって言わなかったかな？」

「あれ？篠ノ之博士、I Sって普通に戦闘機の代替品よろしく世界中で軍配備されてますよね？」

「それは…ほらマドちゃん…あ、I Sを使う悪者から身を守る為には善人がI Sを使うしかないから…。」

「全米ライフル協会きたな…。」

「そのうち一夏兄さん辺りに『感情的な説教はいらない』とか言いそうですね…。」

「マドカ様、実際I Sを犯罪利用されると止める方法が束様が遠隔操作するか直接I Sで撃退するしか無いのが今の現状です。」

「……………篠ノ之博士が遠隔操作でISを止められるなら尚更軍隊に配備させる必要が無いのでは……?」

まあ、そうかもしれないけど……東さんがISの遠隔操作できるってバレちゃうと本当にヤバイ事しようとする連中にISコアネットワークをジャミングとか対策取られたりして後手に回るのが怖いから単なる襲撃や強盗紛いに易々と使えないんだよね……まあ人命第一で使っちゃったりするけど……じゃあマドちゃんに知られたらダメじゃねえか、口滑らせてるよクーちゃん。

「まあほら、東さんも忙しいから多少はね?」

「確かに篠ノ之博士1人では無理がですか……。」

遠隔操作できるつてのは内緒にして貰わないと……後で桜ミ〇の限定フィギュア買ってあげるから、なんならエロ魔改造したコト〇キヤプラモの初〇ミクちゃん作ったげるから本当に頼みますマドちゃん。

「と、言うわけで!!俺の考えたISの新型兵装を使えばISテロを被害ゼロで抑えられるかもしれないだよ!!!」

「それでどんなゲテム…バカモノを作るつもりですか?秋十兄さん。」

「ああ聞いて驚k…バカモノ?今バカモノって言われた?」

「マドカ様、秋十様はクソダサグラサンノースリーブクソ野郎ですがこういうことは結構デカく当ててくるお方ですから……。」

「兄さんのお陰で私はミ〇ちゃんを一つダメにされたんだが……。前回の誤作動不可避システムだの核兵器レベルの荷電粒子砲だのVT擬きだの兄さんが作るものってオリジナルに限っては本当に当たり外れの差が致命的ですよね。」

あれは悲しい事件だったね……。あの後、束さんの自腹で初〇ミクのフィギュアのお葬式させられるとは思わなかったよ。

とかクーちゃんはいつになったらあつくんを許すんだろ…。

話を遮るようにあつくんが咳払い。……結構好き勝手言われてちよつと涙目なのがグラサンの上からでもわかる……でも実際あつくんは束さんとタメ張れるクソ野郎だからね？

「……………」ほん、話を続けさせてもらうけど。一夏の兄貴がボーデヴィツヒさんとNT的富野文法ロールプレイしながらISで模擬戦していた時に一瞬2人がスツポン☆ポソ☆？（○）／な状態でよく分からない空間に浮かび合う現象に遭遇したって話を聞いたんだよ。」

「なんで今あつくんル〇ーシユのポーズしたの……？」

「富野語録っぽくロールプレイしながらIS……ロボットで戦うとか完全に途中からガチ口論になるやつじゃないですか……。」

「そんなのいいから……それで、俺はISコアが人間の精神に干渉する能力があるんじゃないかと目をつけた訳だ。」

「……………それで？」

「そこで俺は思いついた!! 『I S コアの精神干渉能力を利用してI Sに乗ったテロリストの心を操り無力化できるんじゃないかね?』……てね。」

その発想はなかったなあ……いや有るにはあつたけど東さん洗脳兵器とかドン引きしちゃうウーマンだし……誰だよ東さんの考えたI S スーツをハイグレ星人に結びつけてネットに広めた馬鹿野郎は……本当に許さんからな。

「まあ、もしそれが可能ならI Sを悪用しようとしたらI S コアの方からパイロットを拒否できる機能とか作れそうだし、何より面白そうだし。」

「でしよでしよ? さつすが東さん! いや……東先生! てことは……?」

「うん、東さんに研究を手伝って欲しいんでしよ? いいよ! I Sを利用した洗脳兵器なんてもん作るのほぶつちやけ嫌だけどころかはじめ作つた上でそれを停める方法とか対策を研究するのはいづれやらなきやいけない事だしね。」

ISコアの中身ってIS開発してたJC時代の束さんがストロングゼロ8ダース位をキメてた時に気がついたら完成してた所あるからガチブラックボックスな部分多いんだよね……丁度いい機会だし未知の探究と洒落こみますか！

「やつとできた……対暴走I S 鎮圧用第三世代兵装搭載型インフイニット・ストラトス……その名も……。」



『Lullaby Angel（ラバイ・エンジェル）』：『子守唄の天使』なんて  
キザな名前だね。」

あつくんの数学ノートの端っこに書いてありそう。

「いいじゃん、実際こいつは某アメリカのシルバリオ・ゴスペルを素体にした姉妹機なんだし…。」

三分クツキングもビックリなくらいあつさりと完成したね…束さんとあつくんの目の前にはちよつと前にアメリカとイスラエルが完全な兵器運用を目的に作っていたIS：シルバリオ・ゴスペルそっくりのISが鎮座している。まあISコアはあつくんのセーブ・データ・システム搭載型コアで機体は束さんが再現したやつなんだけどね。

強いて違いをあげると一つは束さんと同じウサ耳が装着され、カラーリングも背中のウイング以外束さんの髪や服をモチーフにしてる、ちなみにあつくんがガンダムメーカーとエアブラシで塗ったとか。

そしてもう一つはあつくんが言ってたようにIS鎮圧兵装が積み込まれた背部ウイングユニット…本来は光弾をばら撒くそれは表裏に大きささまざまなスピーカーが左

右合計18機ほど埋め込まれてる。

そのスピーカーから発する音がISに乗ったパイロットに作用する事によって対象を強制に眠らせて無力化するって寸法なんだよね。

「……………あれ？おかしいな私も手伝ってた筈なのにこれを開発してた記憶が全く思い出せないんですけど…。」

「奇遇ですねマドカ様、私も同じ気持ちです。」

なんかマドちゃんとクーちゃんが困惑してるけどどうしたんだろ…？

「しかし苦勞したなあ…ISがコアネットワークに作用してパイロットの精神干渉を行う特殊音波発生装置…こいつが本当に0から考えて作らなきゃいけなかったから大変だったな。」

「あつくんが途中で投げ出しそうになって7割くらい束さんが作ったけどね。」

「……機体のスペックを高める為にパーツを一つ一つ吟味したり……。」

「あつくんの注文にあったパーツを探して用意したの束さんだけだね。」

「……スピーカーの音声テスト」

「あつくんの後出しジャンケンに出し抜かれて洗脳音波を聞かされたもの束さんだね。」

「……………」。

「……………あつくん？」

「お願いします!!今回の功績、俺に譲って!!マイハニーのシャルロットとイチヤつき過ぎてIS委員会に何も貢献できてないの!!!来月末までに成果を上げないと俺が降格処分になれちゃうの!!おちんぎん!!おちんぎん無いと生きていけないの!!おちんぎんいっぱい欲しいのおおおおおおお!!!」

「ふざけんなグラサン!?というかお前エトワール・シュバリエ開発してたろうが!!それで充分成果あげてんだろうが!!おい!束さんのスカートにしがみつくな!!脱げる!脱げるから!!下に至っては今脱げたから!!!」

「エトワール・シュバリエはデュノア社に権利譲っちゃってIS委員会が独占する事ができないからって……その穴埋めしないと降格処分だって。」

ええ……誰なのそんな事言ったの……?束さんIS委員会の偉い人やってるけど、あつくんを降格処分とか聞いてないんだけど。

……そう言えばあのルーコスって奴、元は亡国機業だったよね……束さんに話を通さずにISを無力化する鎮圧兵器を作れと……。

「……………ふーん……………いいよ、その代わり最後の実践テストはパイロットやってよね?」

「え？いいの!!ぶっちゃけ他人の功績を乗っ取るとか俺の美学に反するから断って欲しかった所あるんだけど……?」

「その代わり……こいつをもう一機作るからね。」

「え?あ、うん!手伝う手伝う!!」

「いやそうじゃなくて……」「へ?」

「『技術を教えてやるから一から十までお前一人で作り上げてみせろ』………つて言ってるんだよ、あつくん?」

「………提出期限があと十日も無いんですけど?」

「とりあえず最終試験いつてみよう!!(ー)ー!」

「ああ!!ちよ、背中押さないで……ああ!!もうっ!わかったよ!!1週間連続で徹夜してやらあ!!むしろもっと良い奴を完成させてギャフンって言わせてやるからな!!!」

「その調子その調子♪」

「秋十兄さん、結局それってIS動力のエンジェル・ハイド」

結果から言えば秋十と束さんは逮捕された。

あの天使みたいな I S から出た催眠音波は I S のパイロットを強制的に眠らせる能力があつたそうだ：I S コアネットワークを通じて特殊な音を聴かせ精神干渉を行い狙つたパイロットだけを眠らせるのだとか。

しかしそれを受信した I S が無差別に I S 関係無く聴いた人間を強制的に眠らせてしまう催眠音波を大音量で発し始め、さらに全く関係ない別の I S コアも例えば人間でも聴きとることのできない程の小さな音であろうと受信した途端に同じように催眠音波

を大音量で流し……まるでゾンビ映画の序盤並の感染と蔓延によりたった10分でISS学園にいた人間全員が眠姫と化したそうだ……たまたま防音室に居た千冬姉と山田先生を除いて。

教師2人で手分けして学園の皆を眠りから覚まさせた後、あの天使みたいなISSは千冬姉の手により爆破解体されて洗脳兵器は溶鉱炉へ放り込まれたそうだ。

何度も逮捕案件を起こして……お兄ちゃん、いっぱい悲しいよ秋十……。



「千冬姉…ひよつとしてあの竹箒片手にグラウンド清掃してる丸坊主のグラサンって……。」

「今回は一歩間違えたらテロだからな、罰を与えねば示しがかん。」

「それでも牢屋行きは免れるのか…たまげたな…。ちなみに東さんは？」

「メントスコーラで人は空を飛べる事だけは分かったな。」

「えっ？」

# 主人公に勝てなくて暗躍して幸せを目指すオリ主

## 報告書

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発二班 班長 2年3組 琴蕪木 八重子

秋十くんの招集したデータ及びディッカーマンの試験データにより新型ジェネレータの開発が可能となりました。これにより計画されていた最新機の製造に着手が可能となりました、つきましては追加の研究費用を『IS学園第三技術研究部』の部室に送ってください。

あと同好会の名前が『AAA』と書いて『秋十の最高な同盟者達』とかダサイし厨二でかつこ悪いし満場一致でアレなので変更しておきました。

返信

秋十技術研究会

会長 1年1組 織斑秋十

報告ありがとうございます。ですがBから機体はまだ能力を十全に発揮できていない気がするとの話がありその調査を終わるまで新型ジェネレータの開発は延期してください。少なくとも研究対象：ATには隠された機能と兵装がある事が既に発覚されています。

あと予算は3ヶ月単位で渡していますがなんで2週間で使い切ってるんですか？貴女のTwitterに俺以外のメンバーでタピオカ啜ってる集合写真と某アヒルドファックのツーショットが上がってたんだけどアンタ何を思ってISの研究費用をタピオカ代とネズミーランドに使い切ってたんだよこの野郎。今部屋前でこのメール打ってるからさっさと鍵開けやがれ。

あと人が一晩考えた名前をダサイ言うなや。

とりあえず真面目な感じの名前に変えとくからこれに統一してください。

報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班 班長 2年1組 万台 亜室

エトワール・シユバリエのイージス・エリア・システムの改良型が完成しました、近接武器や実弾等の実体兵器に対して脆弱だったシールドを強化し荷電粒子をシールド外側に膜を張らせる事でナノマシンを使用せずにエネルギー兵器の減衰、荷電粒子武装の無力化、レールガンや大口径砲を含む実弾兵器に対する一定の防御が可能となります。連続して衝撃を受けると荷電粒子の膜が飛散してシールドが砕かれる可能性があ

る事とミサイルや爆弾などを放電によって誘爆させる能力を失い、直撃すれば一撃でシールドが碎ける可能性があるといった欠点が見られており防御面に重点を置く限りは改良は見込めません。

あと我々の要望で先週設置された部室の自販機にペ○シが無いとか舐めてるんですか？良いんですよ？あのコカコー○バカの琴蕪木の肩を持つなら2年1組所属の部員はストライキを起こす用意ができております。

良い返答をお待ちしております。

返信

## 秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

報告ありがとうございます、開発予定の機体は高機動による一撃離脱戦法を主軸に戦うことを想定しておりミサイル等は追いつかせない、もしくは直接撃ち落とす事にしてますのでそのままISに搭載できるようダウンサイジングの研究を進めてください。

琴蕪木から同好会の名称変更があったと聞いてませんか？上記の名称に変更しておいてください。あと自販機の設置に許可した覚えは無いのですが先月渡した開発予算は何に使ったんですか？何で誰も予算の申請と領収書を私をすっ飛ばして顧客の巻紙礼子先生に渡してるんですか？あの人内容読まずに判子押してるから絶対に俺に話を通せて言ったよな？プラモ屋の娘だかなんか知らんが毎回絶版キット渡せば俺が黙ると思ったら大間違いだからな？

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

先程私宛に届けられた特注品の1/144ガンダムアシユタロンハーミットクラブのガンプラとは全く関係ありませんが部室の自販機はペプ○が売ってる自販機と交換

します、少なくとも明後日までに業者に交換させて見せます。

なのでアツグのHG版を是非とも先輩のお父上であらせられるプラモ会社の幹部様に作って貰えるように言ってくださると嬉しいですよ。

旧キットアツグを買い占めたやつ全員RGのゼータぶっ壊れてしまえ。

## 報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会



## 顧問 卷紙礼子

昼休み終わるまでにメビウスを八箱とコミック百合〇の新刊買ってこい。

返信

1年1組 副担任 山田真耶

織秋くんからスマホを借りてメールを送ります。

生徒をパシリに行かせるのはやめてください、ルーコス平野さんの推薦とは言え貴女が研修中なのをお忘れないうちにお願ひします。

メビウスは私が代わりに買っておきました。これを八箱も買う理由がわかりません。

返信

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

顧問 巻紙礼子

先程秋十くんから受け取りましたがガンプラの方じゃないです。

返信

1年1組

副担任

山田真耶

と見せかけて実は織斑千冬

そうかそうか、お前は私の弟にタバコをパシらせようとしていたのか。  
ちよつとそつち行くから職員室から動くなよ？

1  
年  
1  
組

通  
達

布  
仏  
本  
音  
(  
さ  
ん  
の  
ス  
マ  
ホ  
)

俺のスマホ誰か持つてる？知ってる人いたら返して……。

b y 織斑秋十

返信

1年1組

担任

織斑千冬

スマホに保存されてる男装の麗人系のエロ同人画像フォルダをデユノアにバラされ  
たくなかつたらこの『計画』とやらについて全部吐け。

秋十技術研究会

報告



会長

1年1組

織斑秋十

ブリュンヒルデに『計画』がバレたと思ったけど東さんと計画してた暮桜の凍結解除の計画の方だったわ、明日から活動を再開してください。

送信

みんな大好き篠ノ之東さん

ちーちゃんがポラギノールを60箱持って東さんの隠れ家に向かってきてるんだけど、あつくん何か知らない？

## 報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班 班長 2年1組 万台 亜室

可変ウイング『クロノス』及び荷電粒子伝達パイプの完成の目処が経ちました。これが成功すれば秋十くんの手で人類初の第四世代が完成が実現されると思われ、つきましては彼氏とのデートに物入りなのでお小遣いください。

追伸

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班 班长 2年1組 万台 亜室

今回はMG版でガ・ゾウムをパパに作ってもらいました。

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

彼氏とのデート代せびるとかお前ふざk

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

先程はメールを誤信してしまい申し訳ございません。その件に関しては了解しましたので今度はHGでジャムル・フィン欲しいです。

あと琴蕪木さんと協力して全てのパーツを例の倉庫に運び込んでください。

秋十へ

1年1組 お前のお兄ちゃん

織斑一夏

知らない先輩から『さんせつ計画』って書いてあるファイル貰ったけどこれお前のだよな？お兄ちゃんまたお前と間違えられちゃったよ…。

ε―(・▽・；) コマツタコマツタ

シヤルに渡しておいたから安心してくれ！(・ω・) b  
もちろん中は見えてないから心配しなくて良いからな!!

最近忙しそうにしてるし、お兄ちゃん何もしてやれないけど俺はいつでも家族の味方だからな！美味しいご飯とか差し入れ位はするから迷惑じゃなかったらいつでも持つて行ってやるからな。

バツチⅢ（・Ⅱ・Ⅰ Ⅲ）コイ

IS委員会の仕事も大変かもしれないけど頑張れよ！

あとお兄ちゃんにもうちよつと構ってくれると嬉しいかな。

チラツチラツ—?



ダーリンへ。

1年1組            シャルロット・デユノア

浮きで色々<sup>と</sup>他の先輩と仲良くしてるみたいだけどIS委員会のお仕事なのかな？  
気遣ってあげられなくてごめんね？

だけど恋人としてダーリンの為に何かしてあげたくて。

とても心配…。

しかも最近ダーリン録に部屋に戻らないから寝てないんじゃないかなって…。  
たとえば僕がまたシャルルの格好で…えへへ♡ダーリンってそういうの好き  
らしいって織斑先生から聞いたからね。

こんな僕でもダーリンの事大好きだから何でもできちゃうんだよ？

ろくな事起きなかった人生がダーリンと出会って良い方向に向かって幸せで  
す。

わたしはいつでも貴方の恋人です。

たとえ何が有ろうとダーリンと一緒に何処までもいききたいな。

しってる？ 私もパパもダーリンなら私が日本にお嫁に行くとしても

もしもダーリンがフランスにお婿に来てくれると

しても結婚を認めてくれるんだって。

ぬか喜びさせないように幸せな夫婦になろうね！

返信待ってます。

返信

1年1組

担任

織斑千冬

秋十へ、いきなり電話で泣きじやくりながら『浮気者にされるくらないなら首括る』とか『謝ってもらいぶめ』とか『誤解を解くために助けて』とか捲し立ててきてびっくりして電話を切ったのは悪かった。

お前の質問に結論から言うがIS学園は治外法権だとしても未成年の結婚が許される訳じゃないからデュノアと結婚したいならあと2年は待て。  
デュノアには私から取り成してやるから安心しろ。

報告

日本医学会

また例の患者が来しました、今度は止まらないそうです。

関東の医者は今もう来るの一点張りなので今度は四国辺りのクリニックにタライ回しさせるようお願いします。

## 主人公に勝てなくても幸せしたいオリ主

「えーっと…というわけで、この『ガイア・ラファールリヴァイヴ』は計画中止に致します。」

「えー」「なんでですか。」「脚は飾りじゃないんですよ?」

「ACじやあるまいし実質航空機のISに脚を4本付ける必要ないだろうがよ。みんなわかってる?俺が兄貴に勝つ為に『残雪』のプロトタイプ作ろうって話してんだよ?それでデータ取って完成間近の本機を手直しするって俺言ったよね?」

「でも秋十くん変なガンダムとか好きそうだし…。」

「ジオン水泳部はちゃんと理由があって作られてんの!!オツゴとかアツザムも必然性はあるの!!」

「そうかな…？でもお兄ちゃんとしてはやっぱり色々試してみるのも悪くないと思うんだけどなあ…？」

「つてあれ!?なんで兄貴ここにいるの!？」

俺は今、とある女子生徒…たしか…ぼんだい先輩だったかな？その人に誘われて秋十の部活動の見学をさせて貰ってる。

最近、箒を始めとして鈴もセシリアも簪も何だかよそよそしいというか…避けられるというか…まあ…俺にも原因はあるんだよなあ…。

「ごめんごめん、私と呼んだ。」

「先輩!?てめえ何を考えt」

「HGでサイコガンダムMkIIをパパに作ってもらおうかと思ってたんだけどなあ…。」

「よう兄貴!!ゆっくりしていつてくれよな!!」

「弟がガンプラで釣られてるのはお兄ちゃん不安になっちゃうなあ…。」

ざんせつって秋十の新しいISの事だったのか。最近あんまり相手してくれなかつ

たのはこれが理由だったのか……。

「ちなみにこの『ネオ・テンペストオング』とかこれ予算足りねえから作れないと思うんだけど……。なんだよサイコ・シャードって『ISのワンオフ・アビリティの力を利用して対象のISを自身の武装破壊、機能停止、パイロットの強制脱出を行わせる』……そんなモン作ったらまた逮捕されるわ！」

「もう慣れっこでしよ織秋くん。」

「手錠と牢屋になんか慣れたくないっつーの!!」

「お兄ちゃんとしても親族から逮捕者はちよつと……あ、でもこの『打鉄強化型・政宗』つてのは悪くなさそうだけどなあ……。」

「ああ、全身にブレードくつつけてサイドアームと両手に持って四刀流ってやつね。」

「剣いっばいくつつけたら強そうだろ?」

「使いこなせなかつたらただ重量が増えるだけ……ちよつと待てよ……。」

そう言い出すと秋十が何やら考え込む……。

「……………兄貴、ちよつと付き合つて貰える？」

「えっ!? お兄ちゃん、秋十の事は好きだけどお尻は大切にしたい派というk」

「うるせえ！」

うお!? 秋十が飛びかかつてきた!? 小学校の頃から時々変な視線送つてたけどやっぱ  
り兄萌えなのか!? お兄ちゃんこんぷれつくすなのか秋十お!?



「なんだ…白式の強化案を思いついたならそう言ってくれよ秋十。」

「まあまあ、とりあえずそこら辺に余つてたパーツで作った即席だけど……どうかな？」

「おう！悪くないぜ…サブアームの操作もこの前のBT兵器モドキのドローンより少し  
楽だし…いけるいける！」

アリーナのピットで俺は少しFalloutっぽい改修が施された白式に乗り込む。  
『白式改修型、阿修羅』…全身に予備の雪片を貼り付けて防御用の追加装甲と万が一に武  
装を破壊や取り上げられた時の二の矢として使う事を想定しているそうだ…これに  
よつて手に持つてる雪片を投擲して別の雪片を…なーんて使い方もできるようになつ  
たわけだ。

「ところでこの白騎士そっくりなヘルメットはなんなんだ？」

「それは……さあびすに御座います。」

「……このヘルメットは何の意味があるんだ？秋十。」

「さあびすに御座います。」

「……………このヘルメットは安全なのか、大黒屋。」

「お代官様……さあびすに御座いまするゆえ……。」

あれ？ひよつとしてお兄ちゃん、秋十に騙されてる？

結果的に秋十は逮捕された。改修した白式を起動した途端に俺は白騎士風ヘルメツ

トを真つ赤に光らせてたまたまその場にいたセシリアとついでに鈴をボコボコにした  
そうだ、それに飽き足らず箒とISの稽古をしていたマドカに襲いかかり、ラウラに  
よってIS操縦に関しては学年ナンバー2を誇る『1組の掃除屋』こと篠ノ之箒とブ  
リコンヒルデお墨付きの実力を持つ『初音ミクちゃん大好き』でお馴染み折村マドカ（織  
斑姓じゃないのは偽名だぜ）のコンビネーションの前に白式は大破爆沈したそうだ。

2匹の蝶が舞うような戦いぶりにタッグチームならば学園3本の指に入るセシリア・  
鈴の2人組は「ISの修復が終わったら真つ先に挑戦する」とIS学園の新聞でコメン  
トを残したとか…。

「お前っ…この!!お前え!!」

「やめてください織斑先生っ!?!そっちは生徒指導室じゃなくて屋上ですよ!?!」

「止めるな真耶!!私も付き合ってやるからいつペン閻魔大王のお世話になってこい秋  
十お!!」

「く…首が…首が締まつ…。」

「何が首だお前!!一夏アレ終始『ガアアアアア!!』しか叫んでなかっただろうが!!?何したら血を分けた兄弟をあんなのにできるんだお前は!!?」

「ごめつ…えつと…た、束さんが…グエ。」

「よし束だな!!真耶、こいつを独房に放り込んでおけ!!」

「ま、まあなんだ一夏…下着の件はあれを剣道場で落とした私も悪かった…その、気まずくてつい…距離をとってしまつて…。」

「いや、いいんだよ箒、俺もハンカチじゃなくてパンツだつて気づいた時に気が動転して隠したりしたから…痛たた…。」

「だ、大丈夫なの一夏?」

「鈴もお見舞いに来てくれたのか…大丈夫大丈夫、ただの全身筋肉痛だつて言つてたから。」

「そう…ならいいんだけど…ところで何で医務室の…一夏の隣のベッドに束さんが…。」

「いや、その姉さんは紅椿専用のバズーカ兼用荷電粒子砲を届けに来ただけだった筈なんだが…。」

「うう……冤罪だよお……冤罪だよお……あと東さんは東京湾アクアラインのトンネルじゃないよう……。」

「トミカをギツチギチに詰め込まれたらしいんだ…姉さん何したんだ？」

「してないよお!!…うご?!がつ…ぎ……う…!」

「た、東さん!?レスキューへり来るまで大人しくしてないと……まだヒノノニト○が出てこないんだろ?」

「うう……あつくんのアホタレ……グエ。」

「ね、姉さん!?!しつかりしろ姉さん!?!東お姉ちゃん!?!」

主人公に勝てないのは（中略）幸せなのが悪いオリ主

昔の話…

『それじゃあみんな学園祭に向けてウチのクラスで何の演し物がしたいか意見をだしてくださいねー！』

『たべものやさん！』『いちかくんでーと！』

『はーい！はいはい！！』

『うちの小学校のテレビ集めてマリオパーティ大会！』

『ハイハイハイハイ！！』

『わたしはいちかとでーとにー票！』『なにいつてるんだ箒!？』

『つりぼりー！』『けいばー！』『ぱちすろー！』



『ハイハイハイ!!』

『競馬とパチスロは先生の両親の顔と彼ピツピに押し付けられた借金を思い出すからダメです♡』

『なにがあつたの先生!? 小学校の先生が抱える業じゃないよ?!』

『はいはいはいはいはいはい!!』

『……あきとくん。小学生はダム建設しちゃダメって、先生言つたばかりでしょ?』

『なんでですか!? 行政の許可は降りたって説明したじゃないですか!?』

『行政の許可が降りても篠ノ之神社と周辺一帯をダムにしちゃダメです! ゴチャゴチャ抜かすなら箒ちゃんのお姉さん呼んでまた篠ノ之流ダブルキン肉バスター掛けますよ!!』

『先生と東さんは小学生相手に何してんの!?』

『あきとは私の家をダムに沈めるつもりだったのか!? クリーンな水力発電で皆が幸せになるって言ったから署名したんだぞ!?!』

『……あと篠ノ之道場はプロレス団体じゃないからな?!』

『それじゃあウチの中学も文化祭の時期だからな、演し物を何にするか意見だせよー。』

『一夏くんの膝枕!』『一夏くんの耳舐めASMR即売会!』『一夏くんのパンチラリフレ!!』

『はいはい!!』

『なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ!?タコ焼きでいいだろ!』

『おい織斑!球体とかパチ玉を連想させるのは親に失望して出ていった娘を思い出すから禁止って言っただろ!』

『はーい!はーい!』

『初耳だよ?!先生の家庭に何があったんだ!?!』

『わ、私は一夏だけメイド服で執事喫茶でいいと思います。』

『箒は何を口走ってんだよ!?!』

『よし織斑、先生のミニスカビーチクギリギリメイド服を貸してやる。』

『なんで教師やってんの先生!? 潔くクビになれよ!』

『はいはい! はいはいはいはいはいはい!!!』

『……織斑秋十、先生は何度も言ったけど中学生は地上げ屋とショッピングモール建設しちやダメなんだからな?』

『篠ノ之神社以外の住民から立ち退きの同意は得たって説明したじゃないですか!? 市長からGOサインも貰ってたのに……!』

『先生しってるんだぞ、住民説明会でお前が箒くん以外の篠ノ之一家全員から順番にバロスペシャルジエンドをキメられて泣きながら建設中止したのは先月の話だろ?』

『秋十お前……夏休み後半見かけないなと思っいたら何してんだよ……。お兄ちゃんいっぱいびっくり……。』

『夜中に家族が全員どつか出かけたと思ったらそんな事があつたのか!? あと篠ノ之道場は剣道を教えてたんじゃなかったのか!?』

「へえ：アタシが転校した後にそんな事があつたのね。」

「あの時の秋十は毎日が悪巧みのオリンピックピックだったな：。まあ今もそうかもしれないが。」

「箒も結構メチャクチャなこと言つてたよな。」

「そんなことない、カン違いだ。カン違いじゃなかったら人違いだな。」

「ダーリンって小さい頃から積極的な人だったんだ……素敵♡」

「ニシヤル（シヤルロット）……今の回想の何処に惚れ直したんだお前。」

「……で、肝心の本人は……？」「ほら、あそこよ一夏。」

「だーかーらー!!! I S 学園の文化祭でフィリピンパブなんか許可できるわけないだろ!!  
元々は女子校だぞこの学校!!」

「風営法は書類上クリアできてるって何度説明したらわかるんだよ姉ちゃん!!ほら兄貴も何か言ってくれよ!!」

「一夏にフィリピンパブなんかやらせん!!お前は手のかかる可愛い弟だが一夏は普通に可愛い弟なんだよ!!あいつの経歴に変なモン加えて溜まるか!!!」

「可愛い弟って言うなら織斑秋十主催のフィリピンパブを許可してくれよ姉ちゃん!!東さんも『はいはいそうだね。』って好意的だったんだぜ!？」

「それ絶対そら返事カマされてるだけだろうが!!それにフィリピンパブはお前の考えるようなエッチなサービスはそれ程ない!!」

「何で知ってるんだよ千冬姉…。」

「ダーリン…これはハナシアイシナキヤイケナイネ…。」

578 主人公に勝てないのは（中略）幸せなのが悪いオリ主



その日の夜、疲れ果てて眠ってしまった山田くんをベッドに寝かせ私はバスローブを纏い肌を隠す。

「で、結局…文化祭の演し物はどうなったのちーちゃん？」

神出鬼没の天災兎…私の親友が当然のようにシャワールームから出てくる。コイツの辞書には不可能とプライバシーという言葉が欠如してるとしか思えんな。

「いや、今日は一緒に呑もうってちーちゃんがメッセ飛ばしてきたよね？ストゼロとポテチ用意して待ってたらドアがバーンって開いて束さんガン無視で絡み合いながら入ってきたのちーちゃん達だよね？」

うるせえ、ストゼロ一気飲みさせるぞ。

「嫌だなちーちゃんは呑み比べで束さんに勝ったことなんて一度もないでしょ？それともリベンジでもする？」

……そうだな、リベンジさせてもらおうとしよう。

「おっけー、じゃあ前と同じで先に十本飲み干した方が……ちーちゃん、なんで東さんの足を引っ張って仰向けにするかな？なんでオムツ替えるポーズさせようとするかな？」

穴を塞がれた束の心情とかけましてウチのクラスの演し物と解きます。

「そ、その心は？……あと束さんのウサちゃんストライプ脱がさないで欲しいかな？」

奥深く追求した男女無差別冥土喫茶だオラア!!

「全然上手くnひぎい!?!」

色々とお粗末。

## 主人公に勝てないけど幸せになつてるオリ主

結局、文化祭の演し物にフィリピンパブを譲らない秋十の為にクラス代表の俺と勝負して勝った方の要望をクラスの演し物に決めるといふ事になった……秋十以外の全員で反対したのに民主主義ってなんだったんだよ、千冬姉。

「姉ちゃん……俺が兄貴に勝ったらフィリピンパブ、負けたら男装執事喫茶（兄貴だけ逆バニー）……それでいいんだよな？」

「いや全然良くねエからな!!秋十はフィリピンパブで他のクラスメイト全員がメイド喫茶だつただろ!!男装喫茶って……それ完全に秋十がシャルル・デュノア・執事ver.を見ただけだよな!!あとお兄ちゃん逆バニーしたら普通にモロちんしちやうからな!!俺の股間の雪片が一般公開されちやうからな!!」

「兄貴、世の中には需要と供給つてのがあつて……。」

「モロちんの需要を国際教育機関の文化祭で満たそうとしてんじやねえよ!!」

「全くだ、けしからん…そもそもお前が『フィリピンプにしないなら東さんの蠟人形オンラインで秘宝館やってやる!』とか駄々こねるからIS勝負で勝った方の提案にすると譲歩してやったんだ。これ以上訳分からん事をするな。」

「ほら、千冬姉もこう言ってるだろ!!」

「それに一夏のモロちんが最も栄える衣装は逆バニーではなくウィッグ抜き島風くんと相場が決まっている。」

千冬姉!?!とうとうおかしく…いや、元からおかしくなってたか、山田先生と付き合い初めてから変になつてたし。

「待つてください織斑先生!!」

箒!!よっしゃ天の助けだ…。

言つてやれ!同じ女として千冬姉が間違つてる事を教えてやつてくれ箒!!

「一夏のモロちゃんは全裸に学ランしか有り得ません!!」

後に結婚して息子と娘に恵まれた俺は『パパが女を張り倒そうと飛び交ったのはアレが最初で最後だったよ。』と語る……。

まあひよいと避けた筈に組み伏せられて履いていたブリーフごとボンタン狩りされたけどな。

やっぱり女の子に手を挙げちゃいけないな。

「あ、兄貴……大丈夫？……えつと……ほ、ほら！誰も見てなかったからノーダメだよ  
ノーダメ！だからせめてI S 展開して尻を隠そう？な？な？」

嘘つけ、さつき後ろから「おりむーのお尻すつごい綺麗!?お姉ちゃんのお尻より柔ら

かそう……。」とか誰かがシャッター音と共に言つてたのが聞こえたぞ。

「……しかし綺麗なプリケツだな。」(●REC)

「原因は俺かもしれないけど姉ちゃん黙つてて頼むから!!あとスマホしまえ!!」

いいんだ秋十……お兄ちゃんが悪かつたんだ。

カツとなつて箒に篠ノ之流シャイニングウイザードしようとした俺が悪かつたんだよ……。

いや、仮にも女の子にシャイニングウイザードは本当に悪い事だな。

「あ、兄貴?……じゃ、じゃあ俺も尻を出すか」

「秋十の尻は汚いから見たくない。」

「兄弟揃つて仮にも末っ子になんて事言うんだよ……つてか俺の尻は汚くないからな。」



「いや、一緒に大浴場入る時にいつも思うけど……お兄ちゃん的にはお前の尻は毛の生え方はおかしいと思うぞ?」

「お姉ちゃんとしてこの際言つてやるが……シャルロットから『ダーリンのお尻の毛とシミが奇跡的にチェ・ゲバラになってて怖い』って相談受けたぞ。」

「俺の尻ってどうなってんの!?!」

「……………見事に兄弟揃ってイジけちゃったな。」

「チエ・ゲバラなんていねえよ…俺の尻はちよつと防寒性が高いだけだよ…。」

「2, 3人くらい写メってた…俺の赤ちゃんヒップがクラスの皆に共有されちゃう…。」

もうどうでもいい…俺は明日から『お尻斑一夏』とか『ヒップなY o u』とか微妙に捻ったかアホかよく分からんアダ名で呼ばれるんだ…。

「……………よし、こうしよう。試合して勝った方の要望を『束に』叶えさせてやる。天災の力なら写真も人の記憶も改ざんくらい…ちよちよいのジョー」

「兄に道を譲れ秋十おおおおお!!!」

「お前が下だッ！織斑一夏アアアアア!!!」

「I Sの試合だ!!殴り合うな！脱がし合うな!!おい！バカ共！互いに尻を叩き合うのをやめろ!!!」

絶対に負けられない戦いだ……秋十を倒して、織斑一夏プリケツ説なんて事実をI S学園生徒の記憶から消してもらおう……それしか俺に生きていく道は無い!!

「頼むぜ白式。」

（織斑一夏……私にそんな理由で頼られてもごまります……そんな理由で第四世代に形態

移行できそうな位のシンクロ率を叩き出されても困ります…。)

何だか白式が俺の背中を押してるみたいだ…きつと俺に「I発ぶちかまして勝とうぜ」って言うてるのかもしれないな。

「おつと兄貴い!!今回ばかりは俺の勝ちで決まりだな!!」

するとアリーナのピットから秋十の声と共に何かが勢いよく飛び出してきた、両腕と腰のやや下部分に大きな円盤を合計四枚くつつけた様な丸みを帯びた細身で大型のISS……俺の記憶が正しければあれは……。

「これこそ究極のISS!!『テンペスタ・T(トライク)』だ!!円盤状のPICローターを脚部に一機ずつ、そして腕にも一機ずつ。両腕のはPICローターの出力を上げて荷電粒子を撒き散らしながら円形にAICモドキを発動する事によって実弾兵装を着弾前に停止、エネルギー兵器はAICの停止空間の空洞に閉じ込めた荷電粒子の渦で霧散させる事が可能!!しかも近接武装としても振り回せるからお得だ!!」

ああ、要はビームローターってやつか…ガンダム。

しかし見た目はやっぱりウィルバーナインをISっぽくしたやつみたいだな…：分らない人はハーメルン閉じてググれば良いと思うぜ。

………しかし、似ているってことは…。

「そしてこのテンペスタは何と………完全変形してバイク形態になれる!!PICローターをタイヤ代わりにする事で三輪バイクになるわけだ！オマケに荷電粒子を背後へ放射する事で熱核エンジンの原理で超加速!!その加速力と最高速度は兄貴の白式の約五倍を実現!!原理？エンジンは先輩に造らせたから知らん!!」

「おお、本当に変形した………というか人型形態で一般的なISの約2機分の全長は変形してバイクっぽく見せる為にデカくなったのか……？」

1秒掛からずに三輪バイクに変形したテンペスタはそれでもラリーカー位の大きさを保ってやがる………これ変形しなきゃピットに出入りできねえんじやねえかな………。

「そしてバイク形態時は本物のバイクと同様の操作で操れる!!人型形態にならなければバイクに乗れるだけでコイツのパイロットになれるって寸法よ!!パイロットの胸部装

甲のコア・バイパスからシールドエネルギーを充填してる仕組みでバイク自体はISSコアが無くても荷電粒子とIPICが使えないだけでガソリン発電式のパワードスーツとしても3時間は使用可能!!」

ISSなのにガソリン駆動なのか……たまげたなあ…。

「撒き散らした荷電粒子とAICを発動すれば全方向からの攻撃を防ぐ事ができるし、バイクらしく体当たりしたってOK、外付けのビームキャノン砲とミサイルランチャーでこっちは一方的に攻撃できちゃうんだなこれが!!参ったか兄貴!!」

「インラッドだな!!インラッドに影響を受けたんだな秋十!!」



結果的に秋十は敗北した。テンペスタ・TはISコアが無い非常時にはガソリンさえ有ればバイク型。ワードスーツとして使えるという特徴がある。

『バイクに乗れば誰でもパイロットになれる』

ということは……。

『バイクに乗れば誰でも盗める』

とも取れるわけだ。

盗まれない為の機能が着いてるはずのISコアはパイロットの方にくっ付いてる訳で、バイク自体はコア・バイパスのコードを通してISコアに接続しているだけ。

真つ先にパイロットとバイクを繋ぐコア・バイパスを引きちぎった俺は秋十を蹴り飛ばしてバイクを奪い取り、制限時間ギリギリまで取り返そうと走る秋十に当て逃げアタックしながらアリーナを走り回って勝負が終わったわけだ。

4, 5回程、跳ね飛ばされてボロボロになった秋十は「兄貴なんか…ROUND〇のポケバイ乗れるコーナーに誘わなきや良かった…。」と涙目で呟いていた。

「ぐすん、兄貴め、モロちゃんが嫌だからって容赦なくボコリやがって……やーい!!兄貴の



クラスの副担任黒乳首!!」

「なんだと!!やーい!お前の姉ちゃんの恋人デカ乳輪!!」

「ほお……いつ見たんだお前ら。」

「あ、千冬姉（姉ちゃん）の事、忘れてた……。」「

だって秋十に「巨乳大和撫子が夜の教室でトツプレスになってる。」って言われたら俺だって勘違いしてちゃうよ、千冬姉……。

「シヤチヨサーン！可愛いメイドいっぱいいるヨー！」

「イラシヤマセーゴシュジンサマー！」

「イツパイオモテナシするネー！」

「お、織斑先生…先輩？落ち着いてください、生徒の皆さんも大真面目に張り切ってるだけですから……。」

「あ、ああ……わかってるとも真耶……。」

あのグラサン野郎……！振じ込みやがった……フィリピン要素……！！  
一応国際機関だぞIS学園……これ私が怒られるのか？

「ふふふ…潜入成功…さすがはI S学園、ガバガバ警備で助かったわ…。」

「篠ノ之束、そして織斑秋十…我ら亡国機業を壊滅至らしめた主犯と元凶め。私達フアントム・タスク残党部隊が目にももの見せてやるわ!!」

「早速第1村人が壁の向こうにいるわね!!もし篠ノ之束だったらグレネードランチャーを背後からぶちかましてやるわ!」

私は元オータム、今は巻紙礼子としてIS委員会のお膝元で安月給を貰う立場で新たな生活をスタートしている……IS学園非常勤体育教師、用務員、部活の顧問、IS学園理事長専属の焼きそばパン&コミック百合姫を自腹で配達係と業務は多岐に極まる。

今日は文化祭の警備を任されたんだが……。

「だーかーらー!! 東さんは関係者なの!! IS学園の文化祭にこつそり忍び込んでもセーフなの!」

まさか天災が全身黒タイツのルパンスタイルで忍び込んで来るとはなあ…。

「って言われてもよお……招待客は正門の受付から入んなきゃダメって話だったからなあ……。」

「いや……まあ……東さん、招待客では無いけど……。」

「じゃあ最初からダメじゃねーか……。つーか、ここはIS格納庫に続く通路だから文化祭とは関係ねえし。」

「いや、ほらそれはISコアに自立稼動プログラムを仕込んで『天災・篠ノ之東!!』的なサプライズをs」

それってひよっとしなくてもゴーレム事件の再来でh

「篠ノ之東だど!?! 我らファントム・タスクを壊滅させられた恨みを喰らえ!!!」

あの後、悶絶する篠ノ之博士を横目に元同僚共をボコボコにしていると

警部の中心にグレネードランチャーを直撃させられた篠ノ之博士が

『ちよつと残党を1人残らず網走刑務所に捨ててくる。』

と言つて何処かへ消えちまった………近距離過ぎてグレネードが爆発しなくて命拾  
いしたなあ………そう思うだろ? スコール。

主人公に勝てなくても修学旅行はするオリ主

「ぼくは進むよーお客を乗せてー♪」

「客を運ぶよー♪それが業務さー♪」

「でも退職できねえー♪でも退職できねえー♪」

「敷かれたレールをずっと進むだけー♪」

「織斑、篠ノ之……お前らは静岡県民じゃないだろ。」

なんでそんなローテンションで歌ってるんだコイツら…。

修学旅行の新幹線だぞ？ちったあ楽しそうにすればいいだろうに。

「おりむー、しののん、元気ないね？大丈夫？しののんのおっばい揉む？」

ローテンションな一夏が珍しいのか一夏達の後ろの席でクラスメイトとトランプしていた布仏が声をかけた…。

しまった…ここで心配そうに声をかければお姉ちゃんの威厳が稼げたかも…………。

「いや…………実は昨日、箒と『将来どんな人生送りたいか…』みたいな話題で盛り上がってたんだけど。」

「一夏は『おっさんって呼ばれる年齢くらいには定食屋を開いてのんびり生活したい』と、私は『おばさんって言われる歳になったら実家の剣道場と神社を継いで夫と二人で切り盛りする生活したい』…………と、楽しく話してたんだが…………。」

「秋十が…………。」

『いや、世界初のIS操縦者にIS適正Sの篠ノ之博士の妹とか将来選ばせて貰えるわけないだろ?』

「…………つてすれ違いざまに言われて…………。」



「ああ、言われてみれば…千冬姉とか東さん見てたら『のんびりした生活』とか送れるか不安になってきて……。」

「ほえー……あつきーも酷いこと言うね、私はそんなことないと思うよ！」

「ありがとう布仏…でも私の胸から手を離してくれ。」

「ありがとう、のほほんさん……俺も揉みたいから片方貸して……。」

秋十のあんにやる……しかし箒はひよつとしてノーブラなのか？服の上から揉まれるにしては布仏の指がなめらかに動いてやがる……ブラジャーの上からではああはならんな……。

「山田くん、バカの方の弟がどこいったか知らないか？」

「え？デユノアさんと二人でトイレの方に……。」

アキトラマンが説教されて

臀部ボコボコにパンチ食らって

新幹線のランプが点滅すると

あと3分で京都につき降りる

その時の彼氏の苦しむ姿にドキドキするって

ヒーロー凌辱だぜ！

グラサン割れた秋十わ前見えねえし

息わ苦しいし

アキトラマン最後の3分間わ30分以上にわたり

絶対マゾのはずのないダーリンがおつきする

そんなのあり得ない！

力尽きたアキトラマンがボコされる

マチ苦しい

酸欠で死にそう

力が入らなくなつた秋十の尻が大きく開かれて

秋十のケツにキツクが容赦なく突き刺さる

脳天まで突き上げるキツクに苦しみ喘ぐ息もおしやぶりで塞がれて

最初わキュウキュウ締め付けていた私も

「秋十の振動で意識が薄れてくると

最後わあの痙攣がやってくるダーリンだって気絶ときわ出るんだよ

「あー!!イク!!」

アキトの穴にビクビクと弾丸パンチが撃ち込まれると同時に

アキトラマンも意識がぶっ飛び謝罪

そのあとピクピクと痙攣したまま動かなくなつた。

「お前ら……修学旅行の新幹線で赤ちゃんプレイするんじゃない。見ろ、トイレ占拠されてオルコツトが絶望の表情で固まってるだろう。」

「……僕も、やめとけば良かったって思います。ごめんねセシリア……。」

織斑先生に頭を下げながら旅行のテンションで彼氏を誘惑するもんじゃないなあ………つて思うんだろうなあ、普通は。

……とりあえず秋十……ダーリンにパンツ履かせとこうかな……おしゃぶりはそのまま  
でいいや。

ダーリンはパンイチでも構わないけどデュノア社の令嬢が新幹線でスツポンポンは  
スキャンダルだからね、僕の着替えの方優先しなきゃ。

「ごめんねあにき、しのののさん…ゆめのないこといつて…。」

「いや、気にしてないよ秋十。お兄ちゃん、全裸でおしやぶり付けて新幹線に置き去りにされかける弟を見てたら爆笑して一周回って冷静になれたし。」

「そうだな、一夏と二人で鼻水噴き出して笑ってたら寧ろ人生なんでもイける気がしてきたからな。」

しかし前を歩いてるシャルロット…スカートの端から紐パンぶら下がってるけど言ったほうがいいのだろうか…？

とか秋十はいつになったらおしやぶり外すのだろうか…？

折角、一夏と二人きりで京都観光を楽しむかもしれないというのに…気になって気になって仕方がない……。

「ん？二人きり……？なあ一夏、鈴を見なかったか？」

「え？……あれ？そういうえば2組はいるのに鈴がない……。とうか『鈴と2組の友達とワード人狼してくる』って2組の車両行ったラウラも見えないんだけど……。」

「そういうえば兄貴、オルコットさんは？」

「え？」

『まもなく、大阪く大阪くに着いたします。』

「ね、寝過ぎした……ラウラー！アンタさつき『起こしてやるから寝てて構わんぞ』とか言ってたじゃない!!」

「……すまない、普通に寝過ぎしてしまった……というか隅っこの座席とはいえ誰も気づかず置いてかれるって凄いな。」





「……つてことがあつて大変だったよ。あむ……あふ……はふはふ……。」

「へえ……結局その中国娘とドイツ人は大阪観光してきたんだ……はふはふ……。」

「この冷凍たこ焼きレンジでチンしても普通に美味しいですね……はふはふ……。」

今、東さまと秋十のアホタレ小僧と三人仲良く……仲良く。

タコパで美味しいたこ焼きを食べている盲目美少女は何処の誰でしょう？

そう、私です。クロエ・クロニクルです……シーズン遅れで観るアニメは一気見ができてお得です。

「それで……東さん……お願いがあるんだけど……。」

「イギリス女の搜索願でも出したいの？」

「そうなんだよ。オルコットさんだけまだ見つからなくて……可愛そうに……新幹線で酔って吐きそうだったらしいし……。」

そのリバーズしそうでヤバかった人を放置してトイレ占拠してたのは何処の日本の痩せたホーロー・インムソンでしょう。

そう……そのグラサン野郎です。

「東さんも……最近は単独で大気圏突破と突入できるISの開発研究が軌道に乗ってきて……ちよつとしたヒラメキが東さんの頭の中にどっかーん！って湧いてきたから、たこ焼き食べたら忘れちゃう前に論文にしてNASAに送らないといけないから。」

「……東さん、IS委員会の権威で宇宙開発には積極的なんだよね？」

「そうだけど？」

「俺……ISの宇宙開発利用の研究とか、ISが宇宙で実験したとか……全然ニュース

で聞かないんだけど……?」

「……………」

東さまがたこ焼きを食べる手を止めてゆつくり目を逸らしました……。

三点リーダーの多い作品です。

そうです、東さまが雲隠れしながらとはいえ、IS委員会のお偉いさんの立場にないから全然宇宙開発に乗り出せてない理由は……。

「東さん? ねえ……どしたの?」

「ごめん、あつくん……やつぱり……今すぐ論文書かないと! また忘れちゃうから!!」

「ちよ、ちよつと!?! お願いだよ東さん! 兄貴も姉ちゃんもハニーも

『セシリア連れ戻すまで顔見せるな(チヨメチヨメお預け)』

って言われたんだよ!! お願いだから!!」

「ちよつと抱きつかないで!?今東さん立ってるから!?たこ焼き機の前で不安定な姿勢にさせないで!?!?」

「お願いだから!!お願いだか……うわあ!?!?」

グラサンあほ野郎に縋り付かれて…東さまが後ろに倒れちゃう!!

「東さま!!危ない!?!?!!」

「ごめんなさい……っ、ご……ごめんな……っ……ごめんなさい……っ！」

「泣かないで、クーちゃん……全治一週間入院の軽傷だから。」

でも……シヤンク……束さま……。

「穴が!!」

「安いもんだよ……激痛でアイディア忘れた事も……穴も……。」

「で……でも……っ!!」

「クーちゃんか咄嗟にタコ焼きをクルって回す針を突き出してくれたから……火傷せず  
に済んだって事だし。」

「束さま……つでも、お医者さまの話だと……火傷の場合は全治3日の通院だけで済んだ  
とか……。」

あつ泣き出しちゃった……びえん。

# 主人公そっちのけでサボったけども幸せにはなりたいオリ主

「やっべ……学園のシステム落ちたんじゃねえかな」

「いやあ、やっちゃったね☆束さんにも筆の誤りというか……ほら……な！」

「うん、仕方ないですも秋十兄さん……不可抗力というか……ほら……な！」

「……………な！」

「マドカはともかくクロエ……クロニクル……さんはそのもうちよつと……実行犯として何か

コメント無いかな」

「あつくんクーちゃんに嫌われ過ぎてどうとう敬語に……」

「篠ノ之博士に散々な仕打ち受けさせた原因の一人ですからね、あの人」

『より臨場感のあるVRchOtを体験したい』という秋十兄さんによって篠ノ之博士とクーちゃんと共に学園の地下サーバールームへ連行された私、居村マドカは今すつとごく困っていた……

篠ノ之博士の養女であるクロエ・クロニクルことクーちゃんのISである『黒鍵』を



IS学園のサーバーに繋いで演算能力を倍付けしパワーアップさせることで滅茶苦茶リアルで臨場感のあるメタバース体験をすることに成功したもののサーバーームに仕込まれていた篠ノ之博士お手製のセキュリティシステムに引っかけたしまい学園中に警報が響いてしまったのだ。

いや篠ノ之博士、何で自分で作ったセキュリティシステムに自分自身が引っかけてるんですか？

「ほら、天災の作ったセキュリティシステムだから………な!!」

そうですか……警報を止めるためにとつきにクーちゃんが黒鍵でジャミング攻撃をしたところ、学園中のあらゆる電子機器が止まってしまい今に至る……。

「至る……じゃありませんよ。クーちゃん、早く復旧させて役目でしょ」

「いえ、マドカ様……復帰させたいのは山々なのですが」

『おいコラ開けるオ!!居るのはわかっているんだぞ!!どうせ東だろ!!東えええ!!今度はミニカーじゃなくてラジコンのブルドーザー詰め込んでやろうかア!?ああ!?お前何の恨みがあつて停電騒ぎなんか起こしたんだ!?お陰で先週から作つてたやm:じゃなくて、IS委員会への報告資料のデータが吹きとんだわコノヤロウ!!』

うつわ:サーバールームを守る隔壁からお寺の鐘を乱雑に突いたような打撃音がめつちや聞こえる。姉さん早いなあ、さすがブリュンヒルデ。しかし私は兄さんに巻き込まれた被害者として許してもらえるかもしれないが篠ノ之博士が凄い末路を遂げそうな事態に:いやまああの人も『束さんも前々からVR〇hat興味あつたんだよね』とかノリノリだったからまあ当然の結果つてやつかもしれないけど:

「……………復旧させますか?」

「ちーちゃんもう来ちやつたの:~?」

「やつべ、バレたら転がされる:~束さんが」

「秋十兄さんと私は弟と妹の特権としてなあなあで許してもらえるかもしれないがお

仕置きは免れませんか……篠ノ之博士が」

「なんで東さんだけお仕置きされるんだよ!? マドちゃんはともかく発案者はあつくんだよね!?!」

「いや、俺は『やりたい』って言ったけど『やれ』とは言っていないし……な!」

「な!……じゃねえよ!! いや消えたデータを元に戻すぐらいチョコチョコイのチョコイだけど今怒り狂ってるちーちゃんの前に出たらお詫びするまえにお仕置きされちゃう……よし、クーちゃん」

「はい」

「復旧させるのはちーちゃんの怒りが収まってからにしよつか」

「え? 俺とマド力はどうなるの? 明日月曜日なんだけど? 登校日なんですけど」

「明日は休め」

「寧ろ休み過ぎたぐらいなんだけどな……」

「開かん…!!誰だこんな頑丈な電子制御の隔壁なんぞ取り付けたやつは…!!そうだ束だ…!!アイツ絶対許さんぞ…!!私の山田真耶隠し撮りベストセレクション（動画ファイル）を理不尽にも吹き飛ばしたこの恨み…くそっ…下手にぶち壊したら滅給モノだしそもそも私怨で施設破壊なんて良心が咎めるから開ける方法が手元に無い」

「……ん？待てよ、あいつがうっかりミスか何かでサーバーをぶっ壊したとばかり思っ  
てここに来たがさつき非常特別区画のシステムは普通に動いていたな…パソコンの  
データを確認する時にいの一発に飛び込んであちこち弄り回したからそれは確か…  
サーバーが壊れてたらあそこも駄目になるはず…」

「そうか、クロエか！何を企んでたのかは知らんがあいつのISを使ってサーバーを落  
とさせているんだな…だったらこっちにも考えがあるぞ…!!」

「あれ？姉ちゃん行っちゃったみたいだぜ？」

「ちーちゃん諦めたのかな？」

「束様、絶対ないと思います」

「だよねえ……RCかあ……RC……せめてミニ四駆……ミニ四駆……いや束さんのターニン  
グポイントにミニ四駆も嫌だけど……ううん……」

「(……今のうちに隔壁開けて逃げれば良いのでは？篠ノ之博士は兎も角、秋十兄さんは  
怒られるべきだから逃さないためにも言わないけれども)」

……

……

……

「というわけでサーバールームを奪還すべくお前達イツメンに協力してもらいたい」

「いや千冬姉：普通にＩＳでサーバールームの隔壁をこじ開ければいいんじゃないか？」

「二夏は知らないのか、この非常特別区画はＩＳテロ対策に少し狭く作られているからＩＳが通れないようにできているんだ。こういう非常事態に占拠されたら一番困る場所だからな、もちろん中に入ってからＩＳを展開しても狭くて動けないようになってい部分展開はできるがパワー不足でどのみち開けられない」

「箒……詳しいな」

「まあＩＳ学園の建設は姉さんも設計に関わっているからな、地上部分は非常事態に教員部隊が動き回れるようにＩＳでも出入りできるようにしているがそれはテロリストから生徒たちを守るために教員がＩＳを展開して文字通り盾になる為だ、生徒がまず来ないような場所は逆にＩＳが使えないようにして部屋の中に籠城してテロリストが入ってこれないようにしているらしい。……と姉さんがよくウンチクを話していた、暇なんだろうな」

多分だけど束さんは箒に構ってほしくてそういう知識披露から姉妹の語り合いに発展させたいとかそういう感じじゃないかな：それはそうと、サーバールームの奪還に専用機持ち：もといいつももの一組のメンバー＋鈴と簪さんが呼び出されたけど千冬姉は何をさせるつもりなんだ？

「細かい説明はハシヨるがISコアを使って電腦世界に入つて束が閉じこもつてるサーバールームの隔壁を開けてもらう、隔壁を開けると同時に私と教員部隊がサーバールームへ突入して束をボコボコにする。……恐らく束の養女であるクロエが電腦世界で邪魔をしてくるだろうがそうだな……デュノア以外は織斑兄を見たらとりあえずボコボコにしろ」

「え!?俺ボコボコにされるの!?!」

何それ!?俺リンチされるの!?!ナンデ!?リンチナンデ!?あとクロエつて束がいつも連れて歩いている「自分はラウラに似てる」みたいなこと自称してるけどそんな似てないあのクロエだよな……?え?それと俺がどういう…

「逆にデュノアは織斑弟を見つけたらボコボコにしておけ」

「あの…織斑先生?なんで一夏とダーリンをボコボコにするのか聞いてもいいですか?」

「ごもつともな質問、ナイスシャル!!」

「まあ……ほら………な?」

な?……じゃねえよ千冬姉!!説明をちゃんとしようぜ!?

「あー…一夏、説明するからちよつとあっち行つてろ」

「なんで!?!俺だけハブられたらクロエが何かしてきても俺だけ何も対策ナシでボコボコにされるじゃねえか千冬姉!?!いやクロエが何もしなくてもこのままだと皆に俺がボコボコにされるじゃねえか!?!」

「いや……ほら………な?」

「な?じゃねえよ!?!」

「ん………僕がダーリンをボコボコにする理由………そうか!相手は電腦世界で偽物ダーリンを出して邪魔してくるかもしれない………ってコト!?!」

「シャルロット以外のメンバーが一夏をボコる必要がある………?………ん?………ああそういうことか………」

「なるほど、相手は私達の好意を利用して騙し討ちするつもりってわけね………この中国I S界の麒麟児こと鈴サマが随分舐められたものね………」

「相手は変装のプロで一夏に化ける可能性があるわけか………教官や秋十、他のものに化ける可能性もある………後で全員で合言葉を決めておく必要があるかもしれないな………」



（私が呼ばれて生徒会長のお姉ちゃんが呼ばれない理由はなんだろう…？まあ私は皆のオペレーター役だろうから一夏をボコるなんてことはしなくて大丈夫かな）

「「「あ、大丈夫です察しました」」」

「察しましたって何を!?俺に理由を教えてくださいよ!」

「ほら一夏……な?」

「まあ一夏……ほら……そういう……な?」

箒と鈴すら俺をハブろうと……俺はお前ら二人の幼なじみなのに……!!頼りになるのは親友のラウラが優しい簪さんしか……

「一夏、教官も言っている……な?（皆とノリを合わせてバイブスを下げないようにする……だったよな、クラリツサ）」

「……えーと……（あれ?これ説明したら私が一夏の事好きだってバラすことになるんじゃない……）」

「ラウラまで……頼りになるのは簪さんだけだ……頼む!!」

「…………な?（ごめん一夏）」

「簪さん……!」

俺には味方はいないのか……!!お兄ちゃん悲しいよ秋十……お前がいたらきつと俺の味

方して皆に話すように言ってくれたりとかしてくれるんだろいな…

「それと織斑弟…もとい秋十も束と一緒にサーバルルームに立て籠もっている可能性が高い」

俺に味方なんかいなかった…!!

………

………

『電脳世界に侵入を確認、ワールド・ページ起動します』

………

………

「……え？これ次回に続く感じなの？」

「多分……：電脳世界なら怪我しないし一夏兄さんと対決してみたし私もクロエと一緒に妨害に回りますね」

「俺も電脳世界ダイブとかしてみたんだけど……」

「篠ノ之博士が今ある材料だけじゃ電脳世界ダイブする装置は二人分しか作れないそう  
で」

「ごめんねあつくん、束さんと一緒にVRゲームしながらちーちゃんに気づかれずに逃げる方法でも考えよ？」

「えー……もう隔壁の前に姉ちゃんがSWATみたいな装備付けた教員部隊を率いて取り  
囲んでるのに無理だよ……えーっと……コントローラどこやったかな……？」

「ゲームのセッティングしとくから探してね、よつこら……しよつて——」  
「椅子の上に置いておいた気がするけどこっちの椅子には置いてない……」

「あ……が……っ！……コントローラあつたよ……」

「え……？あ……その……ごめん。」